

上信越自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書 8

—長野市内 その6—

むらひがしやま てい せき  
村東山手遺跡

1999. 3

日本道路公団  
長野県教育委員会  
長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書 8

—長野市内 その6—

むらひがしやま て い せき  
村東山手遺跡

1999. 3

日 本 道 路 公 団  
長 野 県 教 育 委 員 会  
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー



繩文時代後期敷石住居址 (SB08・10)



玉類 (繩文時代・弥生時代・古墳時代)

# 序

上信越自動車道は、平成9年に県内の全線が開通し、交通網の大動脈の役割を果たしています。この上信越自動車道は群馬県から東信地方を通り、善光寺平に入り千曲川東岸の山沿いを北進し、新潟県へと延びていきます。この建設に伴い、長野市内では平成元年度から平成4年度にわたり11遺跡の発掘調査が実施されました。本書はこのうち長野市松代町大室に所在する村東山手遺跡の発掘調査報告書です。

村東山手遺跡の周辺には国の史跡に指定された大室古墳群があり、高速道路用地内にも6基の古墳が確認されていました。これらの古墳は明治大学考古学研究室の御協力により発掘調査が行われ、すでに報告書が刊行されています。古墳他には、縄文時代と奈良・平安時代のムラの跡、弥生時代の墓などが発見されました。縄文時代では埋葬された人骨が出土しており、善光寺平での埋葬形態を示す貴重な資料となりました。また、弥生時代、古墳時代、奈良時代のそれぞれの墓が発見されており、各時期の集落と墓のあり方を考える上で興味深い資料であります。

上信越自動車道建設に伴い、近隣の榎田遺跡・松原遺跡などの大集落跡が調査され、大きな成果が得られております。本遺跡はこれらの遺跡に比べ小規模であります。これらの大遺跡と同様に古の人々が活動した痕跡であります。小さな痕跡を一つ一つ明らかにすることによって、大規模な遺跡の意味がはじめて理解されるものであり、村東山手遺跡の調査成果は貴重な資料となることでしょう。

当埋蔵文化財センターでは、これまで高速道路・新幹線建設などの広域事業に伴う発掘調査を行ってまいりました。これにより善光寺平における膨大な考古資料を得ることになりました。また、近隣市町村の発掘調査と合わせて、資料の量はここ数年で飛躍的に増加しています。近い将来、これらの資料により善光寺平の新しい歴史像が描き出されることが期待されます。

最後となりましたが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで、深いご理解とご協力をいただきました。日本道路公団名古屋建設局・同長野工事事務所・同東京第二建設局・長野県高速道局・同長野高速道事務所・長野市・同教育委員会など関係機関、対策委員会をはじめとする地元の地権者・関係者の方々、発掘調査や整理作業にご協力いただいた多くの方々、直接のご指導を賜った長野県教育委員会の皆様に対し、心より感謝申し上げる次第であります。

平成11年3月31日

財団法人長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター

所長 佐久間鉄四郎



## 例 言

- 1 本書は上信越自動車道建設工事にかかわる、長野県長野市松代町村東山手遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 上記遺跡の概要は、財団法人山梨文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』6・7巻で紹介しているが、内容において本書と相違がある場合は本報告を持って訂正する。
- 3 本書に使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道平面図（1：1,000）、長野市基本図（1：2,500）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1：50,000）を使用した。
- 4 写真図版の航空写真は株式会社パスコに撮影を委託したもの及び日本地図センターから提供を受けたもの（版權国土地理院）である。
- 5 執筆分担は第1章に記した。また、次の方々から玉稿を賜った。記して謝意を表する。  
明治大学文学部 阿部芳郎氏  
財団法人山梨文化財研究所 河西学氏  
京都大学霊長類研究所 茂原信生氏  
獨協医科大学 櫻井秀雄氏
- 6 本書の編集・校正は鶴田典昭が行い、土屋横が全体を校閲した。
- 7 遺物の番号は、挿図・表・実測図・写真のすべてに共通する。
- 8 註および参考文献は各章あるいは節の末にまとめた。
- 9 図版番号・表番号は1章と2章を通し番号とし、3章は各節ごとに独立した番号とした。
- 10 発掘調査から本書の刊行に至るまで、次の諸氏・諸機関より御教示・御協力を頂いた。お名前を記して感謝したい。（敬称略・五十音順）  
阿部芳郎・安藤道由・大塚初重・飯島哲也・石井 寛・風間栄一・小林三郎・小口英一郎・  
河西 学・加納俊介・小池裕子・櫻井秀雄・茂原信生・鈴木直人・建石 徹・早野浩二・  
家根祥多・綿田弘実・中村由克  
明治大学考古学研究室
- 11 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、報告書刊行後長野県立歴史館に移管し保管する。

## 凡 例

- 1 本書に掲載した実測図の縮尺は原則として下記の通りで、該当箇所のスケールの上に記してある。ただし地形図・調査区全体図・遺構配置図などは任意である。
  - 1) 主な遺構実測図  
竪穴住居址 1:60 住居内施設 1:30 土坑他 1:30または1:60
  - 2) 主な遺物実測図  
土器拓本 1:3 器形復元をした土器実測図 1:4 石器 2:3と1:3と1:4と1:6
- 2 本書に掲載した遺物写真の縮尺は、原則として実測図と同一であるが、適宜縮尺を変えたものがあり、それらを以下に示す。  
草創期土器と早期土器 1:2 打製石斧 1:2
- 3 遺物の出土地点の表記は、図版の表題に示すか、図版中の遺物の下に出土遺構名またはグリッド名を表記した。図中に表記のないものは観察表に出土地点を示している。
- 4 実測図中のスクリーントーン等は下記のように用いた。これら以外の場合は、当該項目の中で説明するか、図中に凡例を示した。
  - 1) 遺構実測図



竪土・穴床

### 2) 遺物実測図



赤色塗彩



黒色処理

縄文土器の胎土に繊維を含むものは、断面図中黒丸を付けた。

古代の土器は、土師器を断面白抜き、須恵器を断面黒塗り、灰釉陶器を断面網点とし区別した。

遺物の平面図の欠損部分は斜線で示した。

# 本文目次

## 序

### 例言・凡例

## 第1章 調査の概要

第1節 調査の経過	1
1 発掘調査に至る経緯 2 調査体制と調査期間 3 報告書作成の分担	
第2節 遺跡と調査の概要	4
1 遺跡の立地と周辺の遺跡	4
2 調査の概要	11
1) 調査範囲と調査方法 2) 発掘調査結果の概要 3) 調査経過	
3 発掘調査の方法	17
1) 遺跡名称と遺跡記号 2) グリッドの設定と呼称法 3) 遺構記号	
4 整理の方法	18
1) 整理分析計画 2) 整理収納の方法	

## 第2章 調査の成果

第1節 遺跡内の層序と微地形	21
第2節 縄文時代の遺構と遺物	23
1 概要と器種分類	23
2 竪穴住居址とその遺物	27
3 土坑とその遺物	64
4 石棺墓とその遺物	80
5 焼土址とその遺物	80
6 遺物集中区とその遺物	82
7 遺構外の遺物	91
1) 草創期の遺物 2) 早期・前期の土器 3) 中期・後期・晩期の土器	
4) 石器 5) 土製品 6) 石製品	
石器観察表	149
第3節 弥生時代後期の遺構と遺物	152
1 概要 2 土坑墓 3 土坑 4 溝(周溝墓) 5 土器集中箇所 6 遺構外の遺物	
第4節 古墳時代の遺構と遺物	160
1 概要 2 古墳 3 土坑 4 遺構外の遺物	
第5節 奈良・平安時代の遺構と遺物	167
1 概要 2 竪穴住居址 3 焼土址 4 土坑 5 遺構外の遺物	
第6節 中世以降の遺構と遺物	179
第3章 調査成果の検討	
第1節 村東山手遺跡出土の早期後半土器の型式学的検討	181
第2節 村東山手遺跡出土の堀之内2式土器の型式学的検討	194

第3節	村東山手遺跡の土器の網代痕	210
第4節	村東山手遺跡出土縄文土器の胎土分析	217
第5節	村東山手遺跡の石器群の検討	234
第6節	村東山手遺跡出土の人骨	246
第7節	村東山手遺跡出土の動物遺存体	252
第8節	村東山手遺跡の縄文時代後期住居址の検討—遺跡形成論的検討	260
第4章	結論	266

#### 写真図版

#### 報告書抄録

### 挿 図 目 次

第1章	第32図	S B13と出土土器(1)
第1図	第33図	S B13出土土器(2)
第2図	第34図	S B13出土土器(3)
第3図	第35図	S B14と出土土器
第4図	第36図	S B15と出土土器
第5図	第37図	S B16と出土土器
第6図	第38図	S K20
第2章	第39図	S K33と出土土器(1)
第7図	第40図	S K33出土土器(2)
第8図	第41図	S K33出土土器(3)
第9図	第42図	S K47と出土土器
第10図	第43図	S K52・53・62・66
第11図	第44図	S K63と出土土器
第12図	第45図	S K65と出土土器
第13図	第46図	S K77と出土土器
第14図	第47図	S H05
第15図	第48図	縄文時代の土坑(1)
第16図	第49図	縄文時代の土坑(2)
第17図	第50図	縄文時代の土坑出土土器
第18図	第51図	焼土社と出土土器
第19図	第52図	遺構外の遺物集中区
第20図	第53図	遺物集中区1出土土器(1)
第21図	第54図	遺物集中区1出土土器(2)
第22図	第55図	遺物集中区1・2出土土器
第23図	第56図	遺物集中区3出土土器
第24図	第57図	遺物集中区4・5出土土器
第25図	第58図	草創期の遺物
第26図	第59図	遺構外の早期・前期土器(1)
第27図	第60図	遺構外の早期・前期土器(2)
第28図	第61図	遺構外の早期・前期土器(3)
第29図	第62図	遺構外の早期・前期土器(4)
第30図	第63図	遺構外の早期・前期土器(5)
第31図	第64図	遺構外の早期・前期土器(6)

- 第65回 遺構外の中期～晩期土器(1)  
 第66回 遺構外の中期～晩期土器(2)  
 第67回 遺構外の中期～晩期土器(3)  
 第68回 遺構外の中期～晩期土器(4)  
 第69回 遺構外の中期～晩期土器(5)  
 第70回 遺構外の中期～晩期土器(6)  
 第71回 石織の欠損分類  
 第72回 石芥の欠損分類  
 第73回 石器(1)  
 第74回 石器(2)  
 第75回 石器(3)  
 第76回 石器(4)  
 第77回 石器(5)  
 第78回 石器(6)  
 第79回 石器(7)  
 第80回 石器(8)  
 第81回 石器(9)  
 第82回 石器00  
 第83回 石器01  
 第84回 石器02  
 第85回 石器03  
 第86回 石器04  
 第87回 石器05  
 第88回 石器06  
 第89回 石器07  
 第90回 土製円盤  
 第91回 土偶(1)  
 第92回 土偶(2)・ミニチュア土器・石製品  
 第93回 S M01～S M03  
 第94回 弥生時代の遺物出土状況  
 第95回 S M01～S M03と出土遺物  
 第96回 土坑・土器集中箇所・溝  
 第97回 遺構外出土弥生時代後期の遺物(1)  
 第98回 遺構外出土弥生時代後期の遺物(2)  
 第99回 古墳時代の遺構配置図  
 第100回 村東単位支群古墳分布図  
 第101回 S M04  
 第102回 S M04と出土遺物  
 第103回 S K88と出土遺物  
 第104回 遺構外出土古墳時代の遺物  
 第105回 奈良・平安時代の遺構配置図  
 第106回 S B01と出土遺物  
 第107回 S B02  
 第108回 S B02出土遺物  
 第109回 S B03と出土遺物  
 第110回 S B04と出土遺物  
 第111回 焼土量出土遺物  
 第112回 遺構外出土古墳時代後期～平安時代の遺物  
 第113回 S D01・S X01  
 第114回 中世の遺物
- 第3章 1節**  
 第1回 村東山手遺跡第I群土器  
 第2回 村東山手遺跡第II・III群土器  
 第3回 村東山手遺跡出土の早期後半土器の文様  
 第4回 村東山手遺跡出土の早期後半土器の器面調整  
 第5回 山梨県古里遺跡出土土器  
 第6回 長野県下り林遺跡出土土器
- 第3章 2節**  
 第1回 村東山手遺跡S B10出土土器(1)  
 第2回 村東山手遺跡S B14出土土器  
 第3回 村東山手遺跡S B10出土土器(2)  
 第4回 村東山手遺跡S B08出土土器(1)  
 第5回 村東山手遺跡S B08出土土器(2)  
 第6回 長野県円光寺遺跡14号住居址出土土器  
 第7回 長野県平石遺跡第15号住居址出土土器  
 第8回 長野県宮の本遺跡散石住居址出土土器  
 第9回 長野県御堂垣外遺跡第3号住居址出土土器  
 第10回 長野県林山渡遺跡第4号住居址出土土器  
 第11回 長野県埴ノ内遺跡第490号土坑出土土器  
 第12回 堀之内2c式集成図  
 第13回 村東山手遺跡出土土器の南三十福場式土器  
 第14回 南三十福場式の器種 (阿部1989)
- 第3章 3節**  
 第1回 村東山手遺跡の木炭灰土器と中期の網代底土器  
 第2回 村東山手遺跡の網代底と籠状圧痕  
 第3回 中期・後期の底部圧痕の割合  
 第4回 器種別の底部圧痕の割合  
 第5回 網代底の分類と後期土器における組成率  
 第6回 後期前半の主体となる網代の編み方の分布
- 第3章 4節**  
 第1回 縄文中期・後期胎土分析資料一覧  
 第2回 土器断面X線透過写真  
 第3回 土器断面実体顕微鏡写真(1)  
 第4回 土器断面実体顕微鏡写真(2)  
 第5回 土器胎土の岩石鉱物組成  
 第6回 岩石組成折れ線グラフ  
 第7回 土器のクラスター分析樹形図
- 第3章 5節**  
 第1回 村東山手遺跡出土の石器群(1)  
 第2回 村東山手遺跡出土の石器群(2)
- 第3章 6節**  
 写真1 村東山手遺跡出土の骨

写真2 村東山手遺跡出土の人骨

第3章7節

写真1 村東山手遺跡出土のニホンシカ(縄文時代後期)

写真2 村東山手遺跡出土のイノシシ(アブ) (縄文時代)と  
ウマ(平安時代?)

第3章8節

第1図 地形区分と遺構配置

第2図 後期敷石の遺存状況

第3図 SB10敷石の使用痕

第4図 SB08敷石の使用痕

挿 表 目 次

第1章

第1表 遺跡地名表

第2章

第2表 土坑一覧表

第3表 土層分類別点数

第4表 磨製石斧分類別・石材別点数

第5表 石核の石材別重量分布

第6表 土製円板観察表

第7表 出土地点別遺物数

第8表 出土地点別口縁部破片数

第9表 出土地点別石器数

第3章1節

第1表 関東・中部地方における早期後半の土器編年

第2表 村東山手遺跡早期後半土器の胎土分類

第3表 早期後半土器の文様組成比率

第3章3節

第1表 器種別・出土地別・底径別の網代旗幅

第3章4節

第1表 試料表

第2表 土器胎土中の岩石鉱物

第3表 岩石組成折れ線グラフによる土器の分類

第3章5節

第1表 周辺遺跡の石器組成

第2表 器種別細分類の出土点数

第3章6節

第1表 村東山手遺跡出土の人骨の概要

第2表 村東山手遺跡発掘の人骨の歯の計測値

第3表 村東山手遺跡発掘の人骨の下顎歯の計測値

第3章7節

第1表 村東山手遺跡出土の脊椎動物遺存体(出土位置別)

第2表 村東山手遺跡出土の脊椎動物遺存体(種別リスト)

第3章8節

第1表 SB10敷石観察表

写 真 図 版 目 次

- PL1 村東山手遺跡周辺の地形
- PL2 遺跡遠景と縄文時代の遺構1
- PL3 縄文時代の遺構2
- PL4 縄文時代の遺構3
- PL5 縄文時代の遺構4
- PL6 縄文時代の遺構5
- PL7 縄文時代の遺構6
- PL8 縄文時代の遺構7
- PL9 縄文時代の遺構8
- PL10 弥生時代から平安時代の遺構
- PL11 平安時代の遺構
- PL12 縄文時代草創期の遺物
- PL13 縄文時代早期の土器1
- PL14 縄文時代早期の土器2
- PL15 縄文時代早期の土器3
- PL16 縄文時代早期の土器4
- PL17 縄文時代中期の土器1

- PL18 縄文時代中期の土器2
- PL19 縄文時代後期の土器1
- PL20 縄文時代後期の土器2
- PL21 縄文時代後期の土器3
- PL22 縄文時代後期の土器4
- PL23 縄文時代後期の土器5
- PL24 縄文時代後期の土器6
- PL25 縄文時代後期の土器7
- PL26 縄文時代後期の土器8
- PL27 縄文時代後期の土器9
- PL28 縄文時代の石器1
- PL29 縄文時代の石器2
- PL30 縄文時代の石器3
- PL31 縄文時代の石器4
- PL32 縄文時代の石器5
- PL33 縄文時代の土製品
- PL34 弥生時代・古墳時代の遺物

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査の経過

### 1 発掘調査に至る経緯と経過

村東山手遺跡の発掘調査は、日本道路公団（以下、公団）による長野市内における上信越自動車道建設に関連して行われたものである。従来から、長野県では、高速道に関わる埋蔵文化財保護は広域にわたる統一的措置が求められることから、長野県教育委員会（以下、県教委）が対応してきた。また、その発掘調査は長野県埋蔵文化財センター（以下、センター）が実施している。

長野市内の上信越道建設に伴う発掘調査は平成元年度から平成6年度の6年間で計11遺跡におよんだが、村東山手遺跡の発掘調査は平成元年度と平成2年度の2年間にわたって実施された。これらの遺跡のうち大室古墳群・大星山古墳群等・松原遺跡（縄文）がすでに刊行されており、今年度、村東山手遺跡の他に、松原遺跡（弥生等）・榎田遺跡・小滝遺跡等・春山B遺跡等を刊行する。これらの事業は平成11年度に川田条里遺跡などの刊行によって完了予定である。

高速道路用地内の村東山手遺跡調査対象地区には、大室古墳群大室谷支群・村東単支群に含まれる6基の古墳が存在しており、これらの古墳も破壊されることとなった。これらは、かつて栗林紀道氏によって付された古墳番号第21号・第22号・第23号・第24号・第25号・第二号の各古墳である。大室古墳群では昭和59年より明治大学考古学研究室による分布調査と現状把握のための発掘調査が行われており、6基の古墳も昭和63年と平成元年に同研究室により現状調査の対象になったものであった。高速道路建設工事に関わる遺跡の調査はセンターで実施するのを通例としているが、県教委、センター、明治大学考古学研究室、大室古墳群保存会などの協議の結果、考古学的調査研究の経緯の上から、明治大学考古学研究室により構成された調査団（大塚初重団長）にセンターが委託し、古墳の発掘調査と整理作業を実施することとした。具体的な調査計画は、調査団とセンターとの間で調整し、古墳以外を村東山手遺跡としてセンターが担当することとなった。両者の発掘調査は並行して行われ、古墳の調査が終了した後、センターが古墳の下部を調査した。古墳部分については、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3—長野市内 その1—大室古墳群』（1991年）としてすでに報告書が刊行されている。なお、古墳のうち保存状態が良好な23号墳は、調査終了後、長野市教育委員会によって高速道路用地外の隣接地に移築復元された。

平成元年度は、9月より大室第一トンネル坑口部分（④区）を中心に調査を行い、合わせて調査区全体に試掘トレンチをあけて遺跡の全容の把握に努めた。④区では弥生時代の土坑墓、奈良時代の竪穴住居址など遺構が検出されたが、年内に調査を終了し、大室第一トンネル坑口部分を公団に引き渡した。トレンチ調査の結果、引き渡していない地区全域に遺構・遺物が広がっており、特に、調査区東側には数石住居など縄文時代の遺構が集中していることが確認され、次年度の調査へと引き継ぐこととした。これらの調査と並行して大室古墳群2号墳、23号墳、24号墳の調査が行われた。平成元年度の調査面積は2,500㎡である。

平成2年度は前年度公団に引き渡した地区の東側全域（①区～③区）を調査対象とし、表土剥ぎと試掘



トレンチを併用して調査を進めた。工事工程との関係、また、23号墳が道路下に伸びていることから、道路を付け替えて道路下部分を調査するなど、分割調査を余儀なくされた。調査の結果、縄文時代中期後葉～後期前葉の集落跡などの存在が明らかとなった。また、並行して大室古墳群22号墳、23号墳、24号墳、25号墳の調査が行われた。なお、発掘調査面積は前年度分と合わせて18,000㎡に及んだ。

## 2 調査体制と調査期間

発掘調査から整理作業及び報告書刊行にいたる全ての業務は、長野調査事務所が管轄した。調査体制および調査期間は以下のとおりである。

### (1) 平成元(1989)年度

調査体制	常務理事(兼長野調査事務所長)	塚原隆明
	事務局長	
	(兼総務部長兼長野調査事務所庶務部長)	半田順計
	同 庶務部長補佐	松本忠巳
	同 調査部長(兼長野調査事務所調査部長)	笹沢 浩
	長野調査事務所調査課長	白田武正
	同 調査研究員	土屋 積 町田勝則
調査期間	平成元年9月1日～同年12月25日	

### (2) 平成2(1990)年度

調査体制	専務理事(兼事務局長)	塚原隆明
	長野調査事務所長	峯村忠司
	事務局総務部長(兼長野調査事務所庶務部長)	塚田次夫
	同 庶務部長補佐	松本忠巳
	同 調査部長(兼長野調査事務所調査部長)	小林秀夫
	長野調査事務所調査課長	宮下健司
	同 調査研究員	広瀬昭弘 藤沢袈裟一 赤塩 仁
調査期間	平成2年4月4日～同年10月12日	

### (3) 平成9(1997)年度

整理体制	事務局長	青木 久
	事務局総務部長	西尾紀男
	同 調査部長(兼長野調査事務所長)	小林秀夫
	同 事務局総務部長補佐(兼庶務課長)	外谷 功
	同 調査課長	土屋 積
	同 調査研究員	鶴田典昭 石原州一

整理作業内容 一部遺物の注記、接合、実測、トレースを行う。なお、遺物の洗浄、注記、一部の接合は発掘調査年度の冬季間に行われ終了していた。

## (4) 平成10(1998)年度

整理体制 所長	佐久間鉄四郎
副所長(兼管理部長)	山崎悦雄
管理部長補佐	宮島孝明
調査部長	小林秀夫
調査課長	土屋 積
調査研究員	鶴田典昭

整理作業内容 遺物実測、トレース、図版組み、原稿執筆、編集、校正を行う。

## 3 報告書作成の分担

## (1) 執筆分担

各章・各節の執筆者は以下のとおりである。

第2章第2節7(2) 石原州一・鶴田典昭

上記以外 鶴田典昭

第3章第1節・第2節・第4節・第6節・第7節は阿部芳郎氏(明治大学助教授)、河西 学氏(財団法人山梨文化財研究所)、茂原信生氏(京都大学霊長類研究所教授)、櫻井秀雄氏(獨協医科大学第1解剖学教室)に玉稿を賜ったものである。記して謝意を表する。

## (2) 作業分担

本遺跡の整理作業では各作業を以下の調査研究員が担当した。

遺物の接合・実測・トレース、遺構図トレース、図版組 鶴田典昭

土器の復元・補強 徳永哲秀

遺物写真撮影・焼き付け 西島 力

遺物保存処理 白沢勝彦・山本 浩・白田広之

上記の作業は以下の調査補助員の協力により進められた。

安東武子 内山美砂 北沢節子 小林タイ 中沢さか枝 西川美恵子 西沢米子 長谷川征子

松林節子 宮入さち 山岸隆男 米田ちえ子 北島康子 小出紀彦 日向富美子 小平道子

宮下孝一 松林明子 大沢松子 坂田恵美子 山本和美 久保ます江 小林直子 宇賀村節子

岡島光枝 倉沢より子 小山勝子 竹内幸子 山本洋子 佐藤桂子

## 第2節 遺跡と調査の概要

### 1 遺跡の立地と周辺の遺跡

村東山手遺跡は長野市松代町大字大室字村東山手233番地他に所在する。遺跡は善光寺平の東端に位置しており、奇妙山系の山麓に深く入り込む谷状の崖錐地形の末端部に立地する。遺跡範囲は二つの尾根にはさまれた谷間の北向きの斜面地で、尾根状に幾分高い地区と沢状に低くなった地区によって構成されている。前面の千曲川自然堤防上には現在の大室集落が形成されており、遺跡との間には後背湿地が広がっている。大室集落の西側には千曲川が北に向かって流れており、3kmほど下流で犀川と合流する。遺跡からは約800mで千曲川河川敷に至る。

次に、発掘調査が行われた遺跡を中心に、周辺の遺跡の様子を概観しておきたい。本遺跡では縄文時代草創期から晩期、弥生時代後期、古墳時代中期から後期、奈良・平安時代の人々の活動が認められた。善光寺平を中心にこれらの時代の遺跡を時代ごとに概観する。それ以外の時代の遺跡についても第1図の遺跡地図に示したので、第1表遺跡地名表と対照の上参考にしていただきたい。

縄文時代：草創期では大室地籍内の宮ノ入遺跡で神子柴型石斧が、笹付遺跡で神子柴型尖頭器が採集されている。善光寺平南部では早期の遺跡の調査例が少なく、土器編年においても不明な点が多い。前期には鶴前遺跡、石川条里遺跡、松原遺跡、松ノ木田遺跡などで住居跡・集落跡が発見されている。中期では松ノ木田遺跡、松原遺跡、屋代遺跡など、集落跡の調査例がある。善光寺平に遺跡は少なく、周辺の山間部や千曲川上流域に多くの遺跡が認められる。後期では松原遺跡のほか数遺跡で遺物が出土しているのみであるが、千曲川上流の戸倉町、東部町、小諸市、御代田町などで後期の集落跡が数多く調査されている。善光寺平南部では、中期、後期ともに集落の様子を知りうる遺跡は少ない。晩期では、尾根を挟んで2km東方の宮崎遺跡で佐野式・水式の資料が出土している。他に、屋代遺跡群、屋代清水遺跡、鶴前遺跡、篠ノ井遺跡群などで晩期終末の遺構が調査されている。

善光寺平南部では上信越自動車道、中央自動車道長野線の建設に伴い、大規模な遺跡の調査が行われ、石川条里遺跡、松原遺跡、屋代遺跡群において、沖積地の地表下数メートルの深さから遺構と遺物が発見された。善光寺平の沖積地には、分布調査では見つけることができない未知の遺跡がたくさんあることが予想される。

弥生時代：中期には榎田遺跡、松原遺跡・春山B遺跡・中俣遺跡・篠ノ井遺跡群松節遺跡などで集落や墓城の調査例が見られる。後期から古墳時代初頭の遺跡も多数見られ、善光寺平では弥生時代後期の標識遺跡である箱清水遺跡を含め、数多くの遺跡が調査されている。最近の調査例では榎田遺跡、松原遺跡、春山B遺跡・高野遺跡、篠ノ井遺跡などで広範囲な調査が行われており、集落や墓城の様子が明らかになりつつある。また、村東山手遺跡において鉄剣を出土した墓塚とほぼ同時期の、山上の墳墓である北平1号墳が調査され、前方後方形を呈することが推定されている。

古墳時代：本遺跡では前期の遺構・遺物は見られず、ここでは中期～後期の遺跡を中心に触れてみたい。

大室古墳群大室谷支群が本遺跡範囲に重なる。大室古墳群は五百余基からなる古墳群で、多くの積石塚古墳が存在することで注目されている。善光寺平の千曲川東岸には大室古墳をはじめ、長原古墳群（長野市）、杉山古墳群（更埴市）、鮎川流域古墳群（須坂市）など多くの積石塚古墳が分布しており、大室古墳群大室谷支群（5世紀後半～7世紀）、長原古墳群（7世紀代）、鮎川流域古墳群の八丁鉾塚古墳群（4世紀後半～6世紀）などが調査されている。また、尾根を隔てた若穂地区では前方後円墳3基と円墳2基の

和東山古墳群、円墳と方墳が4基確認された大星山古墳群（4世紀後半～5世紀前半）など、前期から中期にかけての古墳の様子が近年の調査で明らかとなってきた。

当該期の集落については調査例が少なく不明な点が多かったが、本村東沖遺跡、榎田遺跡、篠ノ井遺跡群<sup>(4)</sup>など、近年の調査で集落の様子が明らかとなってきた。特に、榎田遺跡は本遺跡から北東に約5kmのところの位置しており、多数の住居跡が調査され、多量の木製品が出土するなど注目すべき遺跡である。また、川田条里遺跡では当該期の水田跡が発見されている。

奈良・平安時代：最近の発掘調査により奈良・平安時代の大規模な集落跡の様子が明らかとなってきた。屋代遺跡群・更埴条里遺跡、篠ノ井遺跡群中央自動車道地点、南宮遺跡、松原遺跡、南条遺跡、高野遺跡などで多数の住居跡などの遺構が調査されている。屋代遺跡では7世紀第3四半期から8世紀の前半の木簡が出土しており、奈良時代の埴科郡家・信濃国府の所在地などをめぐって問題を提起している。南宮遺跡では10～11世紀を中心に800棟を超える住居跡が調査されており、『和名類聚鈔』記載の斗女郷の中心地と推定されている。

村東山手遺跡周辺では松原遺跡、高野遺跡、南条遺跡などで平安時代を中心にいずれも100棟を超える住居跡が調査されている。これに対し、小規模ではあるが榎田遺跡、小滝遺跡、岩崎遺跡などの集落跡が調査されている。小滝遺跡では山際に数棟の竪穴住居址が発見されており、村東山手遺跡と同様な立地条件を示しており、善光寺平における集落景観を復原する貴重な資料と言える。また、近接する川田条里遺跡では当該期の水田跡が確認されている。なお、岩崎遺跡以外は長野市埋蔵文化財センター及び長野県埋蔵文化財センターにより現在調査・整理作業中であり、調査成果の報告が待たれる。

## 註

- 1) 長野市埋蔵文化財センター・風間栄一氏のご教示によると、篠ノ井遺跡群の平成10年度の調査で古墳時代中期～後期の多くの住居跡が発見されている。

## 参考文献

- |              |      |  |
|--------------|------|--|
| 文化庁          | 1983 | 『全国遺跡地図 長野県』                                 |
| 須坂市教育委員会     | 1985 | 『須坂市遺跡詳細分布図』                                 |
| 長野市埋蔵文化財センター | 1988 | 『町川田遺跡』                                      |
| 長野県史刊行会      | 1981 | 『長野県史 考古資料編』全1巻(1)遺跡地名表                      |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1990 | 『長野県埋蔵文化財センター 年報』6                           |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1991 | 『長野県埋蔵文化財センター 年報』7                           |
| 長野市埋蔵文化財センター | 1991 | 『岩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』                         |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1992 | 『長野県埋蔵文化財センター 年報』8                           |
| 長野市埋蔵文化財センター | 1993 | 『松原遺跡田』                                      |
| 更埴市          | 1994 | 『更埴市史』第1巻 古代・中世編                             |
| 長野市埋蔵文化財センター | 1994 | 『長野市埋蔵文化財センター所報』No.5                         |
| 長野市埋蔵文化財センター | 1995 | 『長野市埋蔵文化財センター所報』No.6                         |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1997 | 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 長野市内その3 石川条里遺跡』     |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1998 | 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25 更埴市内その4 更埴条里遺跡・屋代遺跡群』 |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1998 | 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4 長野市内その1』                 |
| 長野市埋蔵文化財センター | 1998 | 『綿内遺跡群 南条遺跡 現地説明会資料』                         |

第1表 遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中近世	番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中近世
1	村東山手遺跡	長野市松代町大室		早-晩	後	前	奈-平	○	51	川柳寺塚古墳	長野市篠ノ井石川端の入口						
2	松葉遺跡	長野市松代町東寺尾字高尾		中-後	中-後		奈-平	○	52	中郷古墳	長野市篠ノ井津崎四之宮						中
3	大室遺跡	長野市松代町大室			○	○	奈-平		53	宮崎遺跡	長野市善徳保科字上和田	後-晩					
4	牧尾遺跡	長野市松代町牧尾					奈-平		54	十二山遺跡	長野市若穂川田下和田			中			平
5	一帯牧遺跡	長野市松代町大室一帯牧			○	○	奈-平		55	藤本遺跡	長野市善徳川田坂本				後	○	平
6	花立遺跡	長野市小島田町					平		56	片山遺跡	長野市善徳保科上和田					○	
7	田牧尾遺跡	長野市相屋町山出					平	○	57	大室古墳群18号墳	長野市松代町大室						前
8	田中沖遺跡1-1	長野市小島田町			中	前-後	奈-平	○	58	中条遺跡	長野市松代町西条中条				後	奈-平	平
9	窪川原遺跡	長野市篠ノ井西寺尾荒川原					奈-平		59	十二山古墳群	長野市善徳川田下和田十二山						●
10	南宮遺跡	長野市篠ノ井東松寺字南宮					平		60	王子塚古墳	長野市善徳川田坂本						●
11	松代城北遺跡	長野市松代町松代町城跡					平		61	白塚古墳群	長野市善徳保科高下						●
12	四ノ屋遺跡	長野市松代町清野佐			後	前-中	平		62	松原古墳群	長野市善徳保科善徳川中道北						●
13	西村遺跡	長野市松代町清野前村西沖					平		63	和用・東山古墳群	長野市善徳保科上和田柳田東山						●
14	林正寺遺跡	長野市松代町清野大村中沖					平	○	64	牧付遺跡	長野市松代町大室	早創					
15	大村遺跡	長野市松代町清野大村中沖			○		平		65	川田美草遺跡	長野市善徳川田須家			晩	中-後	奈-平	○
16	麻島遺跡	長野市松代町西麻島		○			奈-平		66	開崎遺跡	長野市善徳川田町川町上				後		
17	中村遺跡	長野市松代町西条中村		中-後			奈-平		67	高下古墳群	長野市善徳保科高下						●
18	虫巻-宮崎古墳群	長野市松代町西条中条				後			68	町川田遺跡	長野市善徳川田町川田				中-後		平
19	嵐地遺跡	長野市松代町東条			中-後	後	奈-平		69	吉久保古墳群	長野市小山切塚遺産地沖						●
20	袴神山遺跡	長野市松代町豊香普山西ノ平			○		奈-平		70	高富古墳群	長野市安茂里西宮前						●
21	大屋山古墳群	長野市善徳川田下和田				前-中			71	馬神古墳群	長野市小山切塚遺産地吉馬神						●
22	大室古墳群・城址群	長野市松代町大室					●		72	腰村古墳群	長野市篠ノ井小松原郷村						後
23	大室古墳群大室古墳群	長野市松代町大室					●		73	市地蔵古墳群	長野市篠ノ井市地蔵五明大平						後
24	大室古墳群北山古墳	長野市松代町大室					●		74	郷塚古墳	長野市篠ノ井石川端の入口						前
25	大室古墳群金山古墳	長野市松代町東条・東寺尾					●		75	上見林遺跡	長野市篠ノ井津崎四野宮						平
26	北平1号墳	長野市松代町東寺尾北平				前			76	大室古墳群北山古墳	長野市松代町大室						後
27	松原1号墳	長野市松代町東寺尾金井平				中			77	馬神遺跡	長野市小山切塚遺産地				前		
28	長礼山古墳群	長野市松代町東条長礼				後			78	中郷遺跡	長野市安茂里中郷						平
29	大玉山古墳	長野市松代町東条中川大玉山				後			79	西河原宮古墳遺跡	長野市安茂里西河原				○		平
30	竹原塚古墳	長野市松代町東条竹原				後			80	西河原塚	長野市安茂里西河原						
31	菅原王塚古墳	長野市松代町東条菅原				後			81	穴香							
32	牧内古墳群	長野市松代町豊栄牧内				後			82	城遺跡	長野市安茂里城						中
33	桑根井宮古墳群	長野市松代町豊栄桑根井				後			83	城古墳	長野市安茂里城						中
34	桑根井空塚古墳	長野市松代町豊栄桑根井空塚				後			84	欠下遺跡	長野市安茂里欠下				○		平
35	村北古墳群	長野市松代町豊栄平村北				中-後			85	香花古遺跡	長野市安茂里香花台				○	中	平
36	南大平古墳	長野市松代町西条南大平				後			86	大門遺跡	長野市安茂里大門				○	中	
37	小丸山古墳	長野市松代町豊栄小丸山				後			87	大門古墳群	長野市安茂里大門						●
38	土口将軍塚古墳	長野市・更地市南宮土口				中			88	三合塚古墳	長野市安茂里三合						●
39	天上山南跡	長野市松代町東条中川大玉山					平		89	平楽平遺跡	長野市平楽大分坂	後-晩	中-後			○	平
40	牧内原跡	長野市松代町豊栄牧内					平		90	小柴見遺跡	長野市小柴見本村						中
41	池本宮跡	長野市松代町東条池本					平		91	赤出遺跡	長野市安茂里赤出						中
42	池ノ平宮跡	長野市松代町東条池本					平		92	本村遺跡	長野市小柴見本村						平
43	霞城跡	長野市松代町大室						○	93	九反遺跡	長野市小柴見九反						平
44	金井山城跡	長野市松代町東							94	芹山古墳	長野市鶴巻芹山						●
45	寺尾城跡	長野市松代町東寺尾						○	95	文化施設近跡	長野市鶴巻上平山						
46	松代城跡	長野市松代町松代城跡						○	96	南河原古墳	長野市高島田						●
47	石川桑原遺跡	長野市篠ノ井石川			前	中-後	前-中	奈-平	97	窪内古墳群	長野市篠ノ井小松原郷窪内						●
48	横田遺跡群	長野市篠ノ井横田				中-後	前-後	奈-平	98	湯沢尻古墳	長野市篠ノ井小松原郷湯沢尻						●
49	篠ノ井遺跡群	長野市篠ノ井篠ノ井			前-晩	中-後	奈-平	○	99	湯沢尻遺跡	長野市篠ノ井小松原郷湯沢尻						○
50	松崎遺跡群	長野市篠ノ井津崎山崎			晩	中-後	前-中	奈-平	100	岡田古墳群	長野市篠ノ井岡田岡田裏						後
50-1	山崎遺跡	長野市篠ノ井津崎							101	岡田遺跡群	長野市篠ノ井岡田岡田裏						後
50-2	殿庭敷遺跡	長野市篠ノ井津崎角内							102	寺内古墳	長野市篠ノ井井岡田寺内						後
50-3	堀崎小学校敷地遺跡	長野市篠ノ井津崎							103	寺内遺跡	長野市篠ノ井井岡田寺内					○	○
50-4	牧尾川原遺跡	長野市篠ノ井津崎川原							104	海邊北上古墳	長野市篠ノ井善徳正明寺北山						後
50-5	一本木遺跡	長野市篠ノ井津崎上町一本木							105	大平古墳	長野市篠ノ井市地蔵五明大平						後
50-6	伊勢宮遺跡	長野市篠ノ井津崎上町伊勢宮							106	新田遺跡	長野市篠ノ井岡田曾根						平
50-7	中条遺跡	長野市篠ノ井津崎上町中条							107	北石津古墳	長野市篠ノ井北石津						後
50-8	松島遺跡	長野市篠ノ井津崎上町松島							108	六部塚古墳	長野市篠ノ井北石津						後

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中近世	
109	駕籠石古墳	長野市篠ノ井有旅駕籠石				後			
110	上大久保1号墳	長野市篠ノ井岡田上大久保				後			
111	上大久保2号墳	長野市篠ノ井岡田上大久保				後			
112	有旅将軍塚古墳	長野市篠ノ井有旅南石津				●			
113	南石津古墳	長野市篠ノ井有旅南石津				後			
114	柳沢古墳群	長野市篠ノ井布施五柳沢				後			
115	尚の入古墳	長野市篠ノ井石川				後			
116	徳綱社古墳	長野市篠ノ井石川西入			中				
117	大和田古墳群	長野市篠ノ井石川				後			
118	城古墳	長野市篠ノ井石川城				後			
119	上田原1号墳	長野市篠ノ井石川			○	○	平		
120	宮下古墳群	長野市篠ノ井石川宮下				●			
121	関屋古墳群	長野市松代町豊栄関屋				●			
122	打穴遺跡	長野市松代町豊栄打穴沢				後	平		
123	稲葉遺跡	長野市松代町西桑畑				後	平		
124	母原山古墳	長野市松代町西桑畑母原山				●			
125	清野古墳群	長野市松代町清野				●			
126	飯倉家遺跡	長野市若穂保科山下			後・晩				
127	須奈古墳群	長野市若穂保科須奈				●			
128	長田平遺跡	長野市若穂保科須奈				●	平		
129	蘆花遺跡	長野市若穂保科蘆花			中	○	平		
130	八輪古墳群	長野市若穂保科八輪				中	○	平	
131	大谷谷遺跡	長野市若穂保科八輪			前	○			
132	町ノ入遺跡	長野市若穂保科赤野				後			
133	王子塚遺跡	長野市若穂保科田塚本				後			
134	けいし場遺跡	長野市若穂保科上和田				○	平		
135	所の輪遺跡	長野市若穂保科田小出				○			
136	加法中裏遺跡	長野市若穂保科内寿山				○			
137	寿山遺跡	長野市若穂保科内寿山				後			
138	長池遺跡	長野市若穂保科内田中				中・後			
139	仁工堂遺跡	長野市若穂保科内大梯			前	○			
140	大南古墳群	長野市若穂保科中組大豆皮				●			
141	清水原古墳	長野市若穂保科内組清水原				●			
142	大南遺跡	長野市若穂保科内			前	後	平		
143	覆田遺跡	長野市若穂保科内組覆田			中・後	前・中	平		
144	岩崎遺跡	長野市若穂保科内組岩崎				後	平		
145	藤遺跡	長野市若穂保科内組藤				後	平		
146	小町遺跡	長野市若穂保科内組牛池				後	中	平	
147	論地遺跡	長野市七二会論地			中				
148	麻駈遺跡	長野市小田切山田中							
149	川後遺跡	長野市小田切山田中			中				
150	下藤川遺跡	長野市小田切山田中							
151	宮ノ入遺跡	長野市松代町大室			革新				
152	海山B遺跡	長野市若穂保科内田中			中・後		○		
153	高野遺跡	長野市若穂保科内高野			後		平		
154	南条遺跡	長野市若穂保科内南条				○	平		
155	小島遺跡	長野市松代町大室小島					平	○	
156	北の輪遺跡	長野市若穂保科内北の輪				前	○		
157	前山田遺跡	長野市若穂保科内前山田					○		
158	築地遺跡	長野市篠ノ井岡田					平	○	
159	下下遺跡	長野市市川中島今里下					平	○	
160	長峰遺跡	長野市市川中島今里					○		
161	今里遺跡	長野市市川中島今里					○		
162	石川方田遺跡群	長野市篠ノ井石川他			○	○			
201	東畑遺跡	須坂市孤島・東畑			後		平		
202	井上・幸高遺跡群	須坂市井上・幸高			後		○		
203	井上氏城跡	須坂市井上御城						○	
301	土口遺跡群	更埴市南宮土口			後	中		○	
301-1	土口遺跡	更埴市南宮土口							
301-2	Hノ尾遺跡	更埴市南宮土口			後	中			
302	雨宮遺跡群	更埴市雨宮			晩	中・後	前・中	平	
302-1	岩崎遺跡	更埴市雨宮				中			
302-2	牛仁遺跡	更埴市嵐代牛仁			晩	中・後	前・中	平	
302-3	大宮遺跡	更埴市雨宮				後			
302-4	雨宮晩寺遺跡	更埴市雨宮						○	
302-5	灰塚遺跡	更埴市雨宮					前・後		
302-6	大日堂遺跡	更埴市雨宮							
303	嵐代遺跡群	更埴市嵐代			前・晩	中・後	前・中	平	
303-1	大内遺跡	更埴市嵐代			中・後	後	前・後	○	
303-2	城ノ内遺跡	更埴市嵐代				後	中・後	前・中	平
303-3	松ノ崎遺跡	更埴市嵐代松ノ崎				中		○	
303-4	町津遺跡	更埴市嵐代						平	
303-5	北中原遺跡	更埴市嵐代					前・中	平	
303-6	花井遺跡	更埴市嵐代					中	○	
303-7	大塚遺跡	更埴市嵐代					後	平	
303-8	馬口遺跡	更埴市嵐代						平	
303-9	藤津遺跡	更埴市嵐代				中・後			
303-10	古道遺跡	更埴市嵐代					後		
303-11	鮎川遺跡	更埴市嵐代						○	
303-12	新幹線地点	更埴市嵐代					後	中	○
303-13	高遠池地点	更埴市嵐代			晩	前・中	前・中	○	
304	栗佐遺跡群	更埴市嵐代栗佐				中・後	前・中	平	
304-1	北村遺跡	更埴市嵐代栗佐						前	
304-2	五輪倉遺跡	更埴市嵐代栗佐				中・後	前・中	平	
305	小島遺跡群	更埴市小島					後		
306	打沢遺跡群	更埴市打沢					後		
306-1	人込遺跡	更埴市打沢					後		
307	寂野遺跡群	更埴市寂野				中・後	後		
308	嵐代水遺跡	更埴市雨宮			晩	中	前・中	平	
309	池草遺跡群	更埴市雨宮生笠				中		平	
309-1	島遺跡	更埴市雨宮生笠				中		平	
310	大穴遺跡	更埴市森			前・中	中・後	後	平	
311	岡地水遺跡 (清水製鉄遺跡)	更埴市森					後	平	
312	更埴市雨宮遺跡	更埴市雨宮			晩	中・後		平	
312-1	町川遺跡	更埴市雨宮						平	
312-2	木舞寺遺跡	更埴市雨宮						平	
312-3	新幹線地点	更埴市雨宮						○	
312-4	高遠池地点	更埴市雨宮			晩	前・中			
312-5	鑿若寺遺跡	更埴市雨宮				○	○	○	平
313	土口北古墳群	更埴市嵐代土口					後		
314	壺平内墳群	更埴市嵐代土口					●		
315	土口古墳群	更埴市嵐代土口					後		
316	牛堂北古墳群	更埴市雨宮生笠					後		
317	倉科新築古墳群	更埴市倉科新築					中		
318	倉科北山古墳群	更埴市倉科北山					後		
318-1	北山遺跡	更埴市倉科北山					後		
319	大嶽古墳群	更埴市倉科大嶽					中・後		
320	竹尾内墳群	更埴市倉科北の尾					後		
321	矢ノ口古墳群	更埴市倉科矢ノ口					後		
321-1	矢ノ口遺跡	更埴市倉科矢ノ口					後		
322	杉山古墳群	更埴市倉科					中・後		
323	田端古墳群	更埴市倉科					後		
324	森古墳群	更埴市森大穴山					中・後		
325	中ノ宮遺跡	更埴市森					中		
326	岡地内墳群	更埴市森岡地					後		

第1章 調査の概要

番号	遺跡名	所在地	田石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世
327	大穴古墳群	更埴市森				後		
328	森將軍塚古墳群	更埴市森大穴山			中・後			
329	森將軍塚古墳	更埴市森大穴山			前			
330	有明山群塚古墳	更埴市小島東山			後			
331	小島古墳群	更埴市小島東山			後			
331-1	一蓮御神社古墳	更埴市小島東山			中			
331-2	東山神社古墳	更埴市小島東山			中			
331-3	お坊塚古墳	更埴市小島東山			●			
332	打沢古墳群	更埴市打沢虚空藏山麓			後			
333	打沢古墳	更埴市打沢			後			
334	棚塚古墳	更埴市打沢			中			
335	虚空藏古墳群	更埴市打沢虚空藏			後			
336	八幡遺跡群	更埴市八幡			後			

番号	遺跡名	所在地	田石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中近世
336-1	志川遺跡	更埴市八幡				後		
336-2	六反田遺跡	更埴市八幡				後		
336-3	よこまくり遺跡	更埴市八幡				後		
336-4	よこみぞ遺跡	更埴市八幡				後		
337	岡森遺跡	更埴市森岡森			中・後	○		
338	森小学校遺跡	更埴市森岡森			後			
339	三滝遺跡	更埴市倉科			後			
340	坂山古墳	更埴市屋代土口				●		
341	老の城古墳	更埴市屋代土口				●		
342	後崎山古墳	更埴市屋代土口				●		
343	古大穴群北西古墳群	更埴市屋代土口				●		
344	窪河原遺跡	更埴市南宮窪河原						○

○印は時期不明、●印は古墳で時期不明を示す。  
「前・中…」は「前期・中期…」 「奈・平」は「奈良時代・平安時代」を示す。

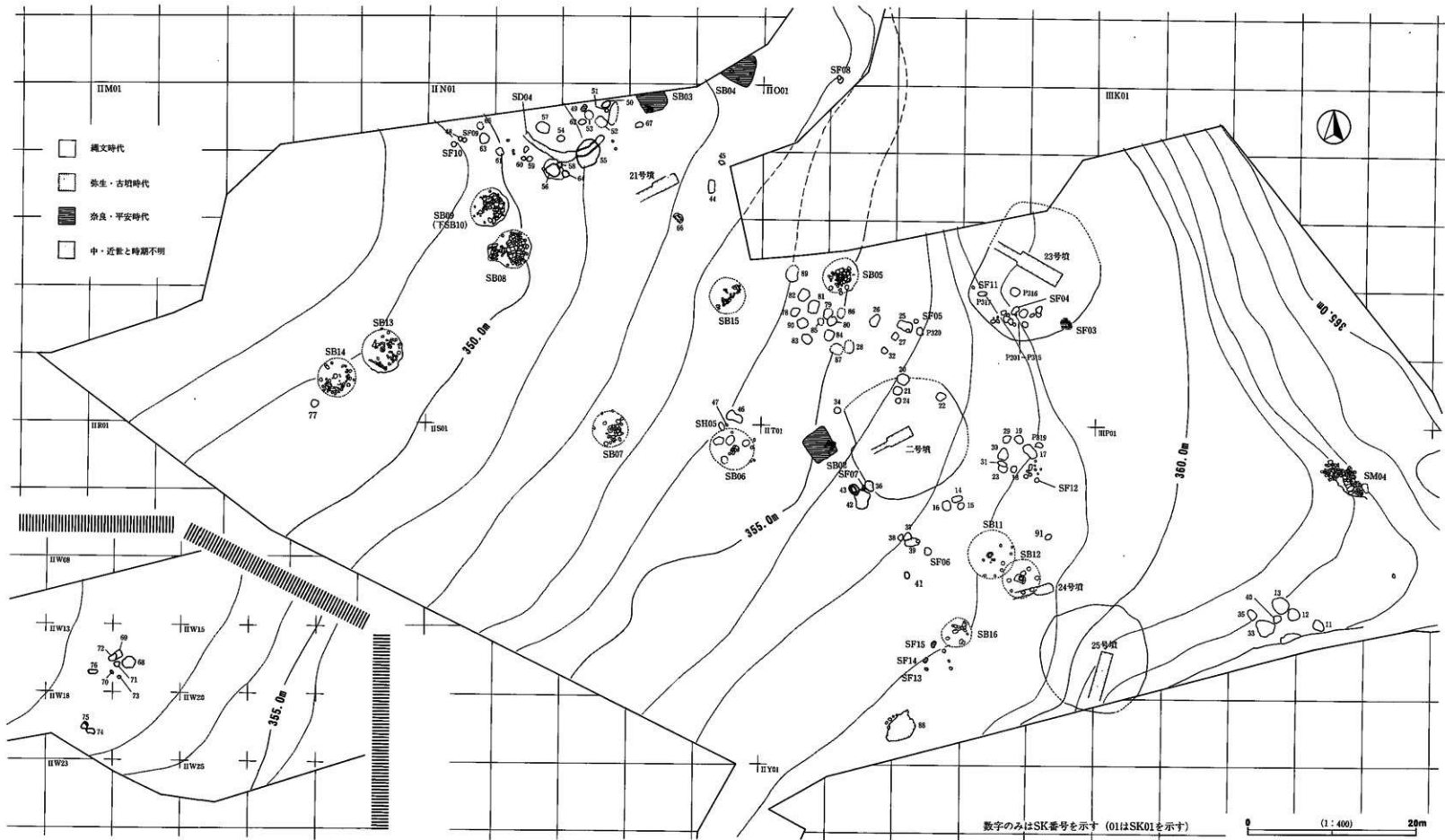


村東山手遺跡がある谷間





第1図 村東山手遺跡周辺の遺跡分布図



第4図 ①~③区遺構配置図

## 2 調査の概要

### (1) 調査範囲と調査方法

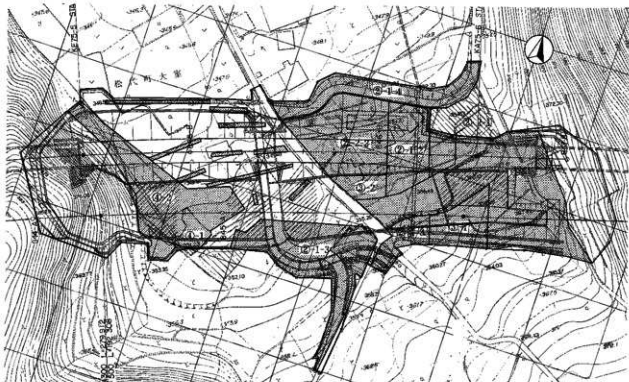
調査対象区は第2図に示した範囲である。発掘調査は1989年と1990年の2回に分けて行われ、1次調査(1989年度)は調査対象区の西側の大室第一トンネル坑口部分を調査区とし、他は2次調査(1990年度)の調査区とした。第3図に表土剥ぎを行なった調査範囲と調査区名を示した。1次調査では調査区名をA区とし、2次調査で①区～③区の名称を用いたが、報告書では1次調査の調査区を④区とした。

1次調査は表土剥ぎを行い、遺構が集中する④-1区を中心に調査を行なった。④-2区は遺構が検出されず、表土剥ぎのみで調査を終了した。

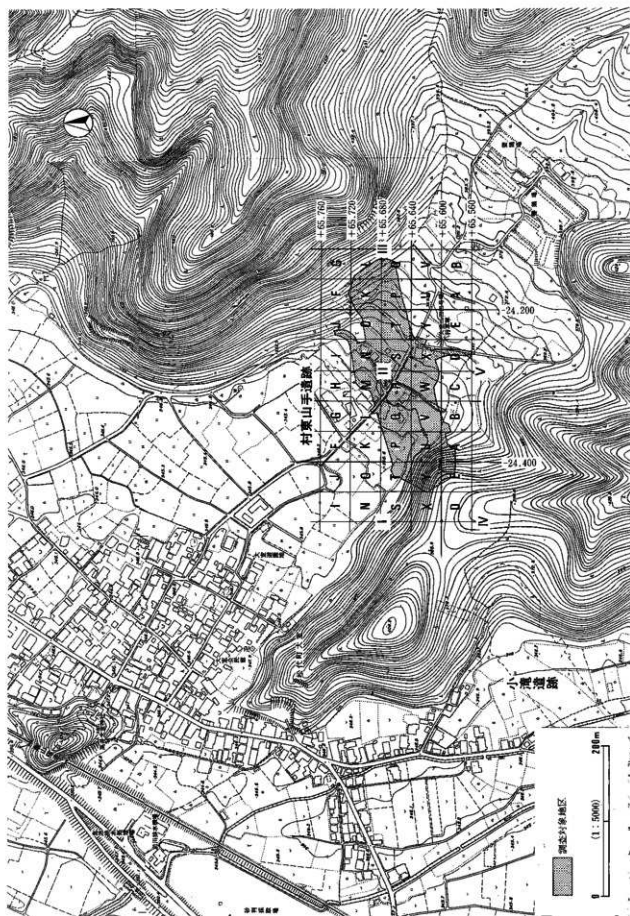
2次調査は工事工程の関係から分割調査となり、調査工程に従い調査区を①区～③区に分けた。遺跡全体に設定した試掘トレンチの結果を検討し、調査範囲を確定した。中央の道路の東側では全面表土剥ぎを行い、遺構を調査した。道路の西側は遺構・遺物が希薄であり、部分的に表土剥ぎを行い遺構を調査したが、トレンチ調査で終了した部分がある。

試掘トレンチ調査および調査区の表土剥ぎは重機により行い、その後人力による掘り下げを行なった。遺構は黒色土中に掘り込まれているものが多く、遺構検出が困難であった。竪穴住居址などは床面の敷石が出土して遺構と認識したものが多く、遺構覆土内の遺物が遺構外として取り上げられているものがある。遺構外の遺物の取り上げは、8m×8mのグリッド毎に一括して取り上げることを原則としたが、グリッド以外の任意の地区設定により取り上げられたものも多い。遺構の実測は、造り方測量と、空中写真測量とを併用して行なった。

調査区内の6基の古墳は明治大学考古学研究室により発掘調査が行われ、古墳の調査終了後に当センターが古墳の下部の調査を行なった。なお、古墳の整理作業は明治大学で行われたが、墳丘内より出土した縄文時代・弥生時代の遺物は当センターが整理作業を行い、本書に報告した。



第2図 調査区設定図



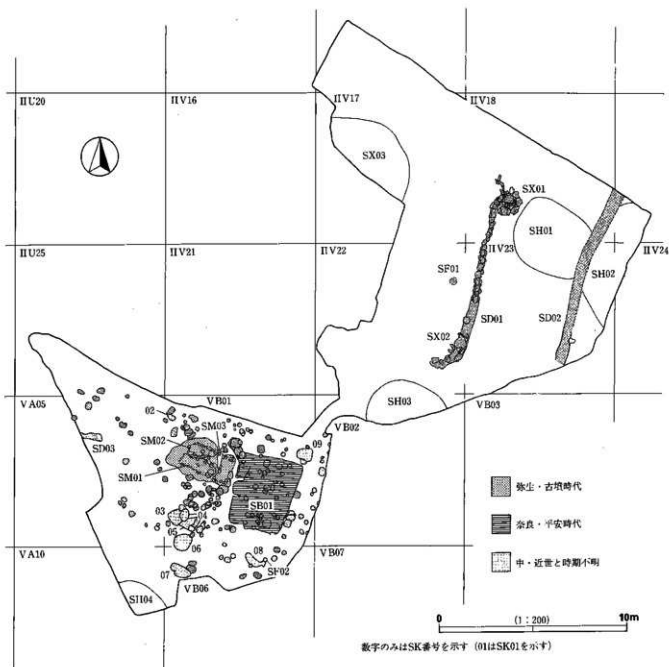
第3図 調査区とグリッド配置図

## (2) 発掘調査結果の概要 (第4・5区)

村東山手遺跡は、縄文時代後期前半の遺構・遺物を中心ではあるが、他の時期の遺構・遺物も少なからず見られる。

縄文時代では草創期～晩期の遺物が出土した。草創期、前期、晩期は少量の遺物のみで遺構は検出されなかった。早期には、完形の鶴ガ島台式土器を出土した土坑が検出され、同型式の土器も多数出土した。中期末葉には2棟の竪穴住居址、後期前半には10棟の敷石住居址、これらの時期の土坑も確認されている。また、後期の石棺墓などの墓構も数基検出された。

弥生時代では、後期箱溝式の水溝が3基確認され、ガラス玉と鉄剣が出土した。調査区内には竪穴住居址が確認されず、方形周溝墓と思われる溝や完形にちかい形で出土した壺など、墓に関わると思われる遺構・遺物が見られる。また、東海系(S字口縁甕)や北陸系の土器がわずかに出土している。いずれも



第5図 ④区遺構配置図

後期のもので弥生中期の遺物は1点も出土していない。

古墳時代では、調査区内に6基の古墳が確認された。そのうち5基はすでに前述の「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3—大室古墳群—」の中に報告されている。本書では、新たに古墳と認定したSM04と、土坑1基、古墳以外から出土した遺物を提示している。SM04の周りからは埴輪片が出土している。

奈良時代前半では古墳への追葬もしくは石室の再利用による埋葬が確認され、奈良時代末から平安時代前半では4棟の竪穴住居址が検出された。

中世・近世では遺構は検出されず、内耳鍋、カワラケなど少量の遺物が出土したにすぎない。

### (3) 調査経過 (調査日誌抄)

調査期間 平成元年9月1日～平成元年12月25日

平成2年4月4日～平成2年10月12日

(平成元年)

- 9月1日 機材搬入。
- 9月4日 重機によるトレンチ調査開始。
- 9月26日 集石状部分検出。
- 9月29日 明治大学による大室古墳群の調査開始。  
SB01(平安時代)半掘。
- 10月2日 弥生時代の鉄剣1点・ガラス小玉6点出土するが遺構のプラン未確認。
- 10月4日 SB01周辺にピット・土坑が多数検出され、柱竈も検出。
- 10月9日 SB01写真真撮影。
- 10月13日 集石写真真撮影。節内小学校4年生77名見学。
- 10月25日 集石内の溝(SD01)の掘り下げ。
- 10月26日 石野博信氏他見学。調査区内の道路付け替え。
- 11月14日 弥生時代の墓が3基確認される(SM01～SM03)。
- 11月15日 空撮・空測(株式会社共同測量に委託)を実施。
- 12月12日 集石部礫の片付け。
- 12月14日 礫層下遺構検出。
- 12月20日 検出面より下層に遺構が無いことを確認。
- 12月22日 器材撤収。
- 12月25日 明治大学による古墳の調査終了。

(平成2年)

- 4月4日 器材搬入
- 4月5日 発掘開始式。①区調査開始。表土剥ぎ開始。
- 4月9日 ①区谷部の遺物包含層の調査。林道切り廻し部分包含層掘り下げと遺構確認。
- 4月11日 ①区谷部人骨出土地点の壁面精査。尾根部住居址?の掘り下げ。
- 4月12日 ①区谷部人骨出土状態写真真撮影。
- 4月16日 基準杭(グリッド杖)設定(株式会社バスコに委託)。
- 4月17日 大室古墳の調査開始(明治大学考古学研究室)。
- 4月19日 大室23号墳下の遺構検出。
- 4月25日 林道切り廻し部分遺構実測(住居址?・平安時代焼

土址他)、地形図測量。

- 5月2日 林道切り廻し部分調査終了。
- 5月8日 ①区土坑群の調査。工事用道路部SB02床面より杯等出土。②区SB03検出・調査。
- 5月9日 ②区SB04検出・調査。
- 5月15日 敷石住居址(SB05)精査。
- 5月18日 ①区人骨実測を開始。敷石住居址(SB06)確認。
- 5月22日 ①区土坑群写真真撮影。
- 5月23日 ①区人骨取り上げを行う。頭骨が2つあり、8世紀から10世紀の遺物を伴う。
- 5月25日 SB05のがりより人骨片出土。
- 5月29日 ①区工事用道路部空掘。
- 5月30日 大塚初重教授大室古墳の調査に訪れる。墳墓(SM04)の調査開始。
- 6月4日 敷石住居址(SB06)検出。
- 6月8日 石棺蓋1基検出(N-9K)。
- 6月13日 SB06周辺玉砂利敷き遺構調査。SB07敷石部精査。
- 6月19日 N-1・6・7区で骨片を含んだ黒い落ち込みが認められ、後期土器片が出土。
- 6月28日 SB08床面から完形の柱口土器が出土。SB09敷石面検出。
- 7月3日 SB09より人骨出土(頭葬)。
- 7月11日 石棺蓋(SK66)より人骨出土。
- 7月12日 SK53より頸骨を含む人骨出土。
- 7月13日 ②-1区の面的調査開始。
- 7月17日 SB08全景写真真撮影。
- 7月20日 明治大学による大室古墳の調査終了。
- 7月23日 空撮・空測を実施(株式会社バスコに委託)。
- 7月26日 SB09・SK53・SK66の人骨取り上げ。
- 8月1日 SB10覆土掘り下げ。
- 8月2日 SB07敷石取り上げ。
- 8月8日 セソナ機による地形図作成用の空測(株式会社バスコに委託)。

8月20日	SB10完掘写真撮影。	9月5日	SB11・12完掘写真撮影。
8月21日	SB08・SB10空撮・空撮、②-1区空撮・空撮、 (株式会社バスコに委託)、③-1区(大室24・25号 墳下)掘り下げ開始。	9月12日	③-1区敷石住居(SB16)検出。
8月28日	SB11・12遺構検出。	10月4日	SB14・16空撮。
8月29日	SB08敷石取り上げ。	10月5日	空撮・空撮。
9月4日	SB13敷石部調査。	10月9日	SB05敷石取り上げ。
		10月11日	調査終了。
		10月12日	器材撤収。

### 3 発掘調査の方法

#### (1) 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する村東山手遺跡には「BMH」の略号を用いた。遺物、写真、図面他の記録類の注記などはこれによる。

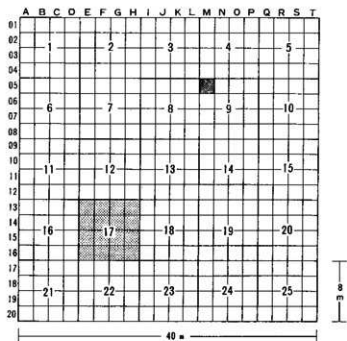
調査区内の大室古墳21号墳～25号墳・ニ号墳は「大室古墳群」の遺跡名を用い、別途調査・整理作業を行い、すでに報告書が刊行されている(『勸長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書13 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3—長野市内 その1—大室古墳群』1991)。

なお、墳丘に混入した古墳時代以外の遺物は村東山手遺跡の遺跡名(遺跡記号)を注記し、本書で報告している。

#### (2) グリッドの設定と呼称法

##### (第3・6図)

長野県埋蔵文化財センターが行う発掘調査のグリッドは、国土座標を利用し大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分して設定される。まず調査区全体にかかる200m×200mの区画を設定し、これを大々地区としI・II・III…とローマ数字で表記する。この大々地区を40m×40mの25区画に分割し大地区とする。大地区の呼称は北西から南東へAからYまでの大文字アルファベットを用いる。その大地区を8m×8mの25区画に分割し中地区とする。中地区の呼称は、北西から南東へ1から25の算用数字を用いる。例えば大地区IIAの北西角の8mグリッドは「IIA01」と示す。同じく大地区を2m×2mの400区画に分割して小地区とする。小地区は、大地区の北西角を起点とし、X軸上に西から東へA



(例) この大地区がG区の場合、 は中地区G17 は小地区GM05

第6図 グリッド呼称法

からTまでのアルファベット、Y軸上に北から南へ01から20の数字を付して、両者の組み合わせによりグリッド名を示す。例えば大地区IIAの北西角の2mグリッドは「IIA01」と示す。

第6図の「II L17」は大々地区が「II区」で、大地区が「L区」で、その中の中地区が「17区」の8m×8mのグリッドを示す。また、「II LM05」は大々地区が「II区」で、大地区「L区」の中の小地区



が「M05」の2m×2mのグリッドを示す。

村東山手遺跡では8m×8mのグリッド(中地区)を用いて調査を行なった。遺物の取り上げ、遺構図中のグリッド名は、全て中地区名を用いている。

### (3) 遺構記号

記録・注記等の便宜を図るために遺構名称は記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は基本的に検出時に決定するため、主として平面的な形態や遺物の分布状況等を指標としたもので、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。混乱を避けるため原則として遺構記号・遺構番号の変更は行わず、本報告書は発掘時に付した遺構記号・遺構番号を使用している。このため整理段階で遺構と認めなかった場合、遺構番号に欠番が生じている。

なお、本書で用いた遺構記号は当埋文センターで共通に用いているもので、以下のとおりである。

[SB] 2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。(竅穴住居址、竅穴状遺構)

[SK] 単独もしくは他の掘り込みと関係が認められないSBより小さな掘り込み。(土坑、落とし穴貯蔵穴、井戸、粘土採掘址等)

[SA] SBより小さな落ち込みや石が、列として配置されるもの。(構、築地)

[ST] SBより小さな落ち込みや石が一定間隔で方形、円形に配置されるもの。(掘建柱建物址、礎石を利用した建物址)

[SD] 帯状の掘り込み。(溝、河道他)

[SF] 単独で存在し、火を焚いたあとが面的に広がるもの。(火床、炉址)

[SH] 石が面的に集中するもの。(集石)

[SM] 方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり。(古墳、墳墓)

[SX] 以上の遺構記号及びSL(水田・畑跡)、SC(道路)の諸記号に該当しない不明遺構。

さらに、SB・ST内の掘り込み(柱穴等)にはPを付した。

## 4 整理作業の方法

### (1) 整理分析計画

村東山手遺跡では縄文時代の遺構・遺物が全体の9割以上を占める。弥生時代後期、古墳時代、奈良・平安時代では少ないながら注目すべき資料が出土しているが、本報告書では縄文時代の遺構遺物についての分析を計画した。

遺跡に残された遺構の大半は縄文時代中期末葉から後期前半(特に堀之内2式が中心)であり、出土遺物もこの時期のものが大半を占める。そこで①堀之内式土器に関わる型式学的分析、②堀之内式・南三十稻場式土器の胎土分析、③石器群の分析、④黒曜石の産地同定、⑤敷石住居址を中心とした遺構の分析を計画した。

②堀之内式・南三十稻場式土器の胎土分析では、肉眼観察および普光寺平の地質状況から同一型式内の胎土の差は認められないであろうとの予測が示された。肉眼観察による胎土分類が有効でないことが示されたため、顕微鏡観察によるデータの比較のみを行うこととし、中期の加曾利E式と圧痕隆帯文系の胎土の差、後期南三十稻場式と堀之内2式の胎土の差、堀之内2式の器種間における胎土の差、中期と後期土器の胎土の差、の4点をターゲットとして胎土分析を行うことにした。④黒曜石産地同定については、遺構内の一括資料においても同一時期の資料を抽出することが困難であることが明らかとなり、分析を断念した。また、⑤敷石住居の分析では、出土した敷石の石材、磨耗状況、遺構間の接合関係を検討することにより、各住居址の前後関係を探る計画であったが、時間的な制約のために十分な分析ができなかった。

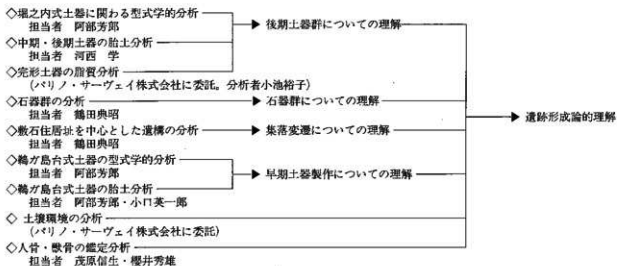
敷石の出土状況、磨耗状況などから、遺構間における敷石の転用は明らかであり、遺構内での敷石の接合が確認されていることから、遺構間で敷石が接合する可能性は高い。今後、別稿にて報告したいと考えている。

さらに、整理作業進行に伴い早期輪ガ島台式土器の良好な資料が抽出されたため、⑥輪ガ島台式土器の型式学的検討、および明治大学考古学研究室の協力により⑦輪ガ島台式土器の胎土分析を行うことになった。

遺物の基礎整理では、以下の作業を実施した。土器の接合は遺構内の接合にとどまり、遺構間の接合は行っていない。住居内遺物と当該グリッドの出土土器の接合は行なった。石器の接合関係は打製石斧についてののみ調査したが、他の石器、剃片は接合作業を行っていない。

観察・分析の結果は第3章にまとめて掲載したが、それぞれの関連性をフローチャートに示す。

なお、発掘調査に並行し、人骨を保存した土壌環境を検討するための土壌分析と、SB08・SB10の注口土器と小形深鉢の胎質分析を行なった。分析成果は本文中の該当項目で触れており、分析結果報告書は長野県埋蔵文化財センターで保管している。



## (2) 整理収納の方法

遺物への注記は、白色で書いたものと黄色で書いたものがある。白色の注記は発掘時の出土地点（遺構名、グリッド名など）と遺物取り上げ番号を示す。黄色の注記は整理時の整理番号を示す。土器の整理番号は実測、拓本などの資料化したすべてに付し、遺構ごとの通し番号とした。また遺構外の遺物の整理番号は、遺物の種類または時期によって以下の番号を用いた。石器・石製品、土製品・土偶、金属器の整理番号は出土地点に関わりなく、遺跡全体でそれぞれにNo1からの通し番号とした。

### ・遺構外出土土器の整理番号の原則

縄文時代草創期の土器	No601～No700
縄文時代早期・前期の土器	No001～No300
縄文時代中期前葉	No401～No500
縄文時代中期後葉・後期の土器	No001～No400
縄文時代晩期の土器	No501～No600
弥生・古墳時代の土器	No2001～No3000
古代土師器・須恵器	No4001～No5000
中・近世陶磁器	No5001～No6000

・石器・石製品、土製品・土偶、金属器の整理番号

石器・石製品 No.1～（遺構内の遺物を含む）

土製品・土偶 No.1～（遺構内の遺物を含む）

金属製品 No.1～（遺構内の遺物を含む）

整理番号を付した後に、異なる番号のものが抜合するなど、整理番号に欠番が生じている。

金属製品は、保存処理を施し収納した。遺物・記録類は当埋蔵文化財センター「整理収納システム要項」に従い整理収納した。なお、遺物類は整理番号を付し図化を行ったものとそれ以外のものを分け、それぞれを遺構単位に収納した。遺物記録類のすべては整理終了後、長野県立歴史館に移管する。



現地説明会風景

## 第2章 調査の成果

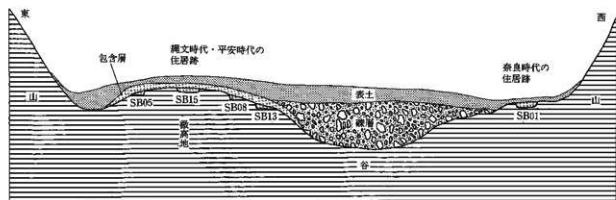
### 第1節 遺跡内の層序と微地形

#### 1 基本土層

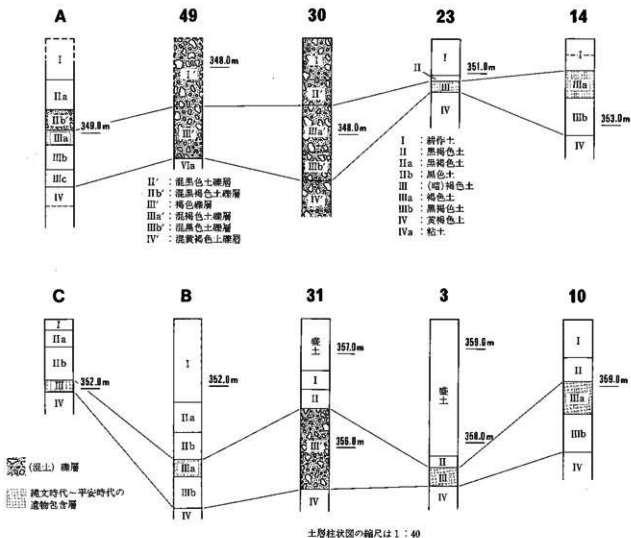
調査区は二つの尾根に挟まれた谷間の緩斜面に位置しており、谷奥より供給される土層と尾根からの崩落による堆積が見られる。そのため、調査区内における地層は均一ではなく、遺構が広がる微高地と谷状の低い部分では土層が異なり、部分的に礫層が広がるなど、複雑な堆積状況を示している。発掘調査時には、遺構・遺物が広がる地区の土層を基準としてI層（表土・耕作土）、II層（黒褐色土）、III層（暗褐色土）、IV層（黄褐色土）を基本層序とした（第8図土層第23地点）。整理段階では堆積土の厚い谷部分の地層を含め、I層（耕作土）、II a（黒褐色土）層、II b層（黒色土）、III a層（暗褐色土）、III b層（黒褐色土）、III c層（褐色土）、IV層（黄褐色土）の層名を付し、遺跡全体の土層を理解することとした（第8図土層A地点）。発掘調査時のII層がII b層に、III層がIII a層に相当する。遺物包含層はII b層とIII a層に相当し、縄文時代から奈良・平安時代までの遺物を包含する。また、II b層中には中世の遺物が見られる。なお、調査区全体に礫が多く、縄文時代遺構が集中する地区にも大小の礫が見られた。

#### 2 調査区内の微地形と遺構の広がり

表土剥ぎを行なった調査区内の地形測量は、表土またはII層を除去した状態で実施しており、縄文時代の微地形とは必ずしも一致しない。調査対象地区内55地点の土層観察により推定される、微地形区分を第8図に示した。地形区分は基盤層となるIV層より上層の堆積状況を指標として行い、①III a層のみが残存する範囲、②III a・III b層が残存する範囲、③III a～III c層が残存する範囲及び基盤層が谷状に窪み礫層が広がる範囲、④粘土層が堆積する範囲、の四段階に分けて理解した。①は遺構が広がる微高地、②は①よりやや低い部分で遺構がわずかに見られる、③・④は浅い谷部分である。特に④ではIV層上面に形成された粘土層が確認されており、III層形成以前（縄文時代以前）に調査区内に水辺が入り込んでいたことが推定される。縄文時代に調査区付近まで水辺が入り込んでいた可能性がある。



第7図 遺構立地概念図



第8図 基本土層と調査区内の微地形

これらの地形区分とは別にIII層形成以降の礫層の堆積範囲を示した。この範囲は谷地形におおむね重なっている。谷部分には縄文時代の遺構が掘り込まれるIII b層が堆積しており、上記に示した地形区分は縄文時代に成立していたことを示している。さらに谷奥から供給されたであろうII層以降の礫層が上記の地形区分にはほぼ重なっており、縄文時代以降微地形が変わることなく維持されていたことを示すものと考えられる。

調査区内における遺構分布の偏りは、後世に削られて消失したのではなく、縄文時代以降、ほとんどの遺構は東側の微高地上に形成されており、遺構が検出されなかった谷部には、もともと遺構がなかったものと考えられる。さらに、遺構が広がる微高地と東側の山との間にやや窪んだ谷状の地形には、遺物包含層が広がっており、縄文時代の遺構と遺物分布を考える上で注目される。

なお、低地から谷頭を見たときの横断面で、縄文時代における遺構立地条件の概念図を第7図に示した。

## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

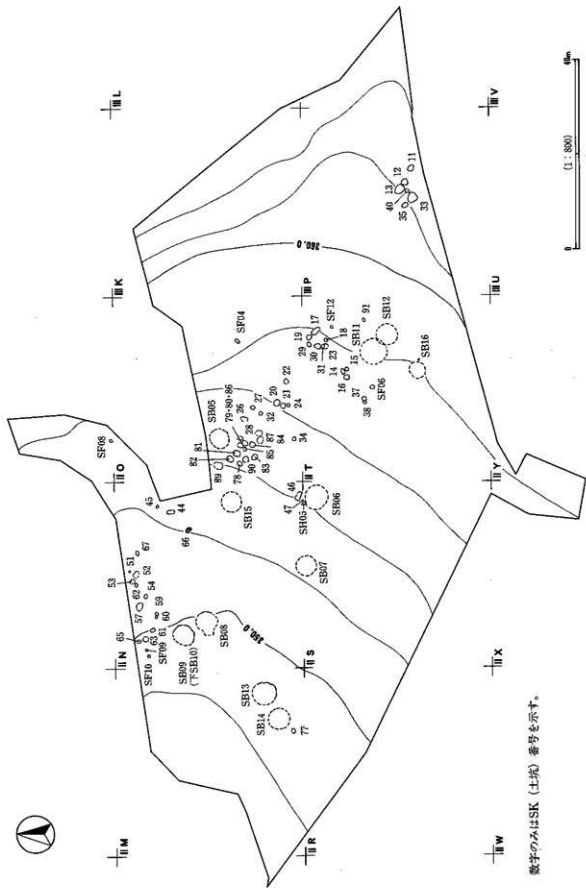
### 1 概要と器種分類

#### 出土遺物と遺構の概要

縄文時代の遺構・遺物は東側の微高地（第8図参照）に集中しており、谷部から西側の微高地には遺物が散見されるのみである。第9図に縄文時代遺構配置図を示した。遺構は早期の土坑1基、中期後葉から末葉では住居跡2棟、土坑3基、焼土坑2基、後期前葉から中葉では敷石住居10棟、土坑15基、焼土址2基、土坑裏1基が検出された。中期と後期の遺物集中が6箇所認められ、整理段階で遺物集中区と認識した。この他に縄文時代と思われる土坑41基が検出された。

土器は草創期～晩期まで出土しているが、中期末葉～後期前葉の土器が主体を占める。また、早期鶴ヶ島台式土器が比較的まとまって出土しており、長野県内における当該期の良好な資料である。草創期、中期前葉、晩期の土器は数十点にとどまる。この他に石器1721点、土偶11点、石製の玉類9点、ミニチュア土器などが出土した。





数字のみはSK（土坑）番号を示す。

第9図 縄文時代の遺構配置図



## 後期土器の器種分類

本遺跡では早期から晩期の土器が出土しているが、中期以前は明瞭な器種分化が認められない。後期以降に器種分化が顕在化することから、本遺跡で主体を占める後期前葉土器群について器種分類を行なった。

器形と文様帯の配置により、以下のように器種分類し、分析の単位とした。分類は深鉢、浅鉢、注口土器など従来の器種名を基本的に踏襲し、その細分を行なった。器種は深鉢A、深鉢B、浅鉢、注口土器、無文土器、その他に大別される。(第10図)

【深鉢A】 深鉢のうち、口縁部から胴部上半部に文様帯が配置されるもの。稀に、器面全体に文様が施文されるものがある。器形により以下のように細分した。

深鉢A 1類：所謂朝顔形の深鉢で、直線的もしくは外湾しながら底部から口縁に至るもの。

深鉢A 2類：胴部文様帯の下端部で胴部が山折れに屈曲するもの。

深鉢A 3類：S字状の曲線で胴部に括れがあるもの。文様帯が括れ部より上部に納まるものと、括れ部より下部にまで及ぶものがある。

【深鉢B】 深鉢のうち、胴部にS字状の括れもしくは谷折れの屈曲部があり、その下に文様帯が配されるもの。胴上半部から口縁にかけて無文のもの、沈線による口縁部文様帯が配されるもの、口縁から胴下半の文様帯に紐線文が垂下するものなどがある。口縁部文様帯の有無により以下のように細分した。

深鉢B 1類：沈線などの口縁部文様帯があるもの。

深鉢B 2類：口縁部文様帯がないもの。

【浅鉢】 器高に対して、口径が大きいものを浅鉢とした。器形復元できるものが少なく、破片では深鉢Bに誤認しているものもあると思われる。

【注口土器】 注口部の形状により以下のように細分した。

注口土器 1類：筒状の細長い注口部を持つもの。

注口土器 2類：円孔のみの注口部で筒状の注口を持たないもの。

【無文土器（無文様帯土器）】 文様帯が配されない土器で、器面調整と口縁部形態により以下のように細分した。ほとんどが無文であるが、縄文が施文されるものがわずかにみられる。厳密には無文様帯土器と呼ぶべきであるが、本書では無文土器と呼称した。器面調整の違いにより以下の5大別をした。

無文土器A類：凹凸のある指ナデ痕が顕著なもの。口唇部が丸い単口縁をA 1類、口縁部外面に稜を持つものをA 2類とした。

無文土器B類：ケズリ調整のもの。指ナデ調整の後にケズリ調整を行うものが見られる。口唇部が丸い単口縁をB 1類、口唇部が面取りされているものをB 2類とした。

無文土器C類：ナデ調整のもの。指ナデの凹凸は顕著ではなく、ミガキより粗い調整のものである。

無文土器D類：ミガキ調整のもの。口縁内面に稜があるものをD 1類、外面に稜があるものをD 2類とした。

無文土器E類：縄文施文のもの。

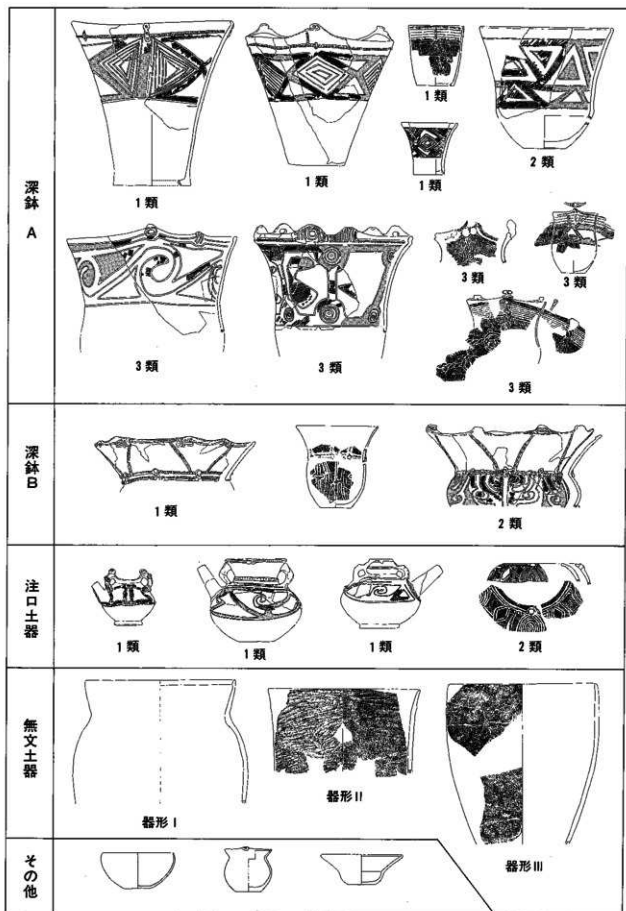


A類

B類

C類

D類



第10図 後期土器の器種分類 (縮尺1/8)

また、無文土器は器形がわかる資料が少なく、器形を分類の基準にすることができなかったが、わずかに復元されたものを見る限り、以下のような器形が見られる。

器形Ⅰ：胴部上半に括れがあり、口縁部はやや外に傾くもの。

器形Ⅱ：括れ部がなく、口縁部はほぼ直立するもの。

器形Ⅲ：括れ部がなく、口縁部が内湾するもの。

### 石器の概要と器種分類

縄文時代石器の総点数1721点である。その内訳は、石鏃313点、石鏃木製品174点、尖頭状石器2点、尖頭器5点、半月形石器1点、石錐49点、削器58点、搔器14点、刃器状剥片13点、石匙12点、ピエス・エスキュー148点、異形石器1点、不定形石器38点、2次加工を有する剥片 (re. fl) 311点、使用痕を有する剥片 (u. fl) 45点、打製石斧218点、局部磨製石斧4点、磨製石斧60点、石錘38点、特殊磨石21点、スタンブ形石器7点、凹石42点、磨石46点、敲石72点、石皿7点、礫器5点、石棒12点、石剣2点、軽石2点、研磨痕のある剥片1点である。原石26点、石核368点、剥片約7150点が出土した。

石器の分類については第2章2節7項(4)で述べる。

## 2 竪穴住居址とその遺物

縄文時代の竪穴住居址は、中期末葉2棟と後期前葉10棟が確認されている。中期のSB11とSB12が切り合い、後期のSB09とSB10がほぼ同位置に重複して構築されている他は、住居址の切り合いはみられない。確認された後期の10棟の住居址はすべて敷石住居である。なお、焼土など地床炉の可能性のある遺構も確認されており、敷石でない竪穴住居址の存在にも注意しなければならない。遺物は概して竪穴住居内で多く出土した。遺構外で遺物が特に多いところが存在し、敷石がない竪穴住居が存在した可能性もある。なお、敷石や石囲炉が確認されてから竪穴住居址と確認したものも多く、覆土と地山の土の区別が困難で、遺構の検出には条件が悪い遺跡であった。

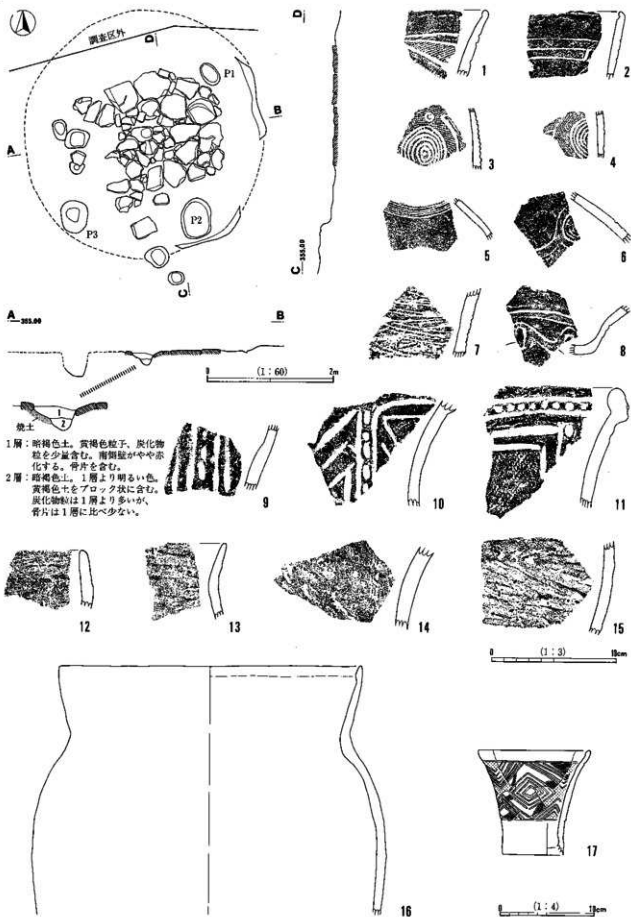
### SB05 (第11図)

調査経過と遺構の構造：1989年度の試掘で敷石の一部が確認された。1990年度調査で遺構の調査を行った。プランが不明確なため、敷石面より住居壁の検出に動めたが、部分的に立ち上がりを確認できたのみでプランが不明な部分が多い。なお、北側は調査区外のため未調査である。

敷石の状況とわずかに確認された壁から竪穴は直径4mの円形と推定される。敷石は炉の周辺のみに残存している。床面には地山の大型の礫も多く見られるが、図には敷石と思われる板状の石のみを示した。炉址は特別の囲みを持たず、敷石のない部分が掘り窪められているのみである。炉床は被熱により赤化し、炉内の覆土には少量の骨片が含まれる。柱穴は特定できない。竪穴内に7つのビットを確認したが、いずれも敷石面からの深さは浅く、配置に規則性は認められない。P1～P3が主柱穴の可能性ある。埋溝、周溝、敷石下の施設などは確認されない。

遺物出土状況：住居址覆土の大半は試掘調査のときに掘削したため、本調査での遺物は少ない。敷石面でも無文土器がつかれたように一箇所にまとまって出土した(第11図16・P L2)。

出土遺物：1・2・9～11・17は深鉢A、3・4・8が深鉢B、5・6が注口土器、12～16が無文土器である。11の口縁部は2条の浅い沈線間に円形の刺突列が巡る。9・10は胎土が11と類似しており同一個体の可能性がある。12・16は比較的丁寧な指ナデ、13・15は指ナデ痕を明瞭に残し、14はケズリ調整であ



A 355.00

検土

- 1層：暗褐色土。黄褐色粒子和炭化物粒を少量含む。層割れがやや赤化する。骨片を含む。  
 2層：暗褐色土。1層より明るい色。黄褐色土をアロク状に含む。炭化物粒は1層より多いが、骨片は1層に比べ少ない。

第11図 SB05と出土土器

り、無文土器の器面調整に数タイプ見られる。16は大形の無文土器で、口縁内部に指で撫でて作り出したような稜を持ち、本遺跡の無文土器では稀な器形である。器面はナデ調整であるが15のような明瞭な指ナデ痕は見られない。胎土には多量の鉱物粒が含まれている。17は表面が剥落し不明な部分があるが、三角文の内側と菱形文の外側にのみ細密なLRの縄文が施文される。胴下半部は内外面とも黒褐色で口縁部付近は内外面とも灰褐色を呈する。

この他、石鏃1点、石鏃未製品1点、不定形石器2点、2次加工を有する剥片5点、使用痕を有する剥片3点、打製石斧2点、磨製石斧2点、特殊磨石2点、敲石2点、石皿1点、石核8点、ヒスイ製の石製品1点(第92図25)、土製円板2点(第90図1・2)が出土した。

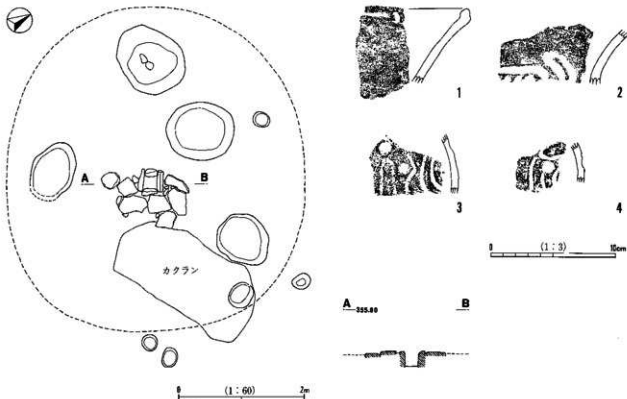
遺構の時期：床面の出土遺物および覆土中の遺物より堀之内2式の段階に廃絶されたと考えられる。

### SB06 (第12図)

調査経過と遺構の構造：表土除去後、わずかに掘り下げたところで、炉と敷石面とが検出され住居址と確認した。覆土がほとんど残存せず、炉の東側が大きく攪乱されているなど、壁面を確認することはできず、炉の位置と柱穴の配列から住居址プランを推定した。また、直行するトレンチにより掘り方を確認しようと試みたが、掘り方は明らかにできなかった。

柄鏡形となる根拠は見つけられず、竪穴は直径4.7m～5.2mの円形のプランと推定した。敷石は炉の周辺にわずかに残存しているのみである。炉は4枚の平石を用いた石囲炉。炉の覆土は住居内とはほぼ同じ茶褐色土で、白色砂粒と黄褐色土粒を多く含むが、焼土粒と炭化物はほとんど含まれない。炉の覆土上面に平石が落ち込んでいた。柱穴は特定できないが、推定プラン内に6箇所のビットが確認され、敷石面とビット底面の高低差は40cm～50cmである。

遺物出土状況：覆土がほとんどなく、遺物は極めて少ない。炉の東側の覆土より無文土器の大形胴部破



第12図 SB06と出土土器

片が出土し、その下より硬玉製の垂飾りが1点出土した。人の下顎の大白歯が2本出土したが、出土状況は不明である。

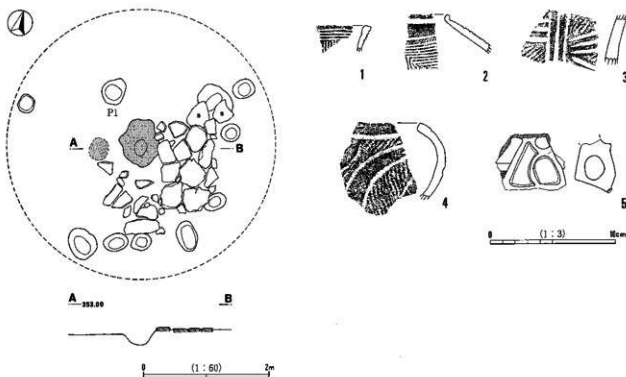
出土遺物：1～4は深鉢Bである。土器は図示したものの他、無文土器十数片と縄文施文土器5片が出土したのみである。この他、石鎌1点、打製石斧1点、土製円板1点(第90図3)、ヒスイ製の垂飾り(第92図24)が1点出土した。

遺構の時期：時期を判別できるものでは後期堀之内式併行期のものが中心で、これらの遺物が本遺構の廃絶時期を示すと判断した。堀之内1式から2式占段階に廃絶されたと考えられる。

### SB07 (第13図)

調査経過と遺構の構造：遺物の包含層を掘り下げたところ、敷石面を検出し住居址と認識した。住居周辺の包含層は非常に薄く、土層が流失しており、掘り込みは確認できなかった。住居が構築された場所には地山の礫が比較的少ないが、住居址の東と南側は地山に多くの礫を含んだ層が広がっている。

柄鏡形となる根拠は見つけられず、炉を中心とした直径4.2m前後の円形のプランと推定した。敷石は炉の東側を中心に残存しているが、西側の敷石は除去された可能性がある。床面に地山の自然礫が露出した部分があり、図中では「S」と記した。敷石の南側と東側縁が直線的に配置されており、方形に敷き詰められていたことが予想される。炉の東側と南側の敷石が使用時の姿を留めているとすると、炉を囲んで方形に敷き詰められた敷石の南側縁に一枚張出した敷石が置かれていたと考えられる。炉は残存する敷石に接しており、石囲いなどの施設は認められない。敷石面から約30cmほど掘り込んでおり、炉床は被熱して赤化している。炉の覆土には炭化物粒と焼土粒が含まれ、少量の土器が出土している。炉の西側隣の床面に少量の焼土が検出された。柱穴と思われるピットが9ヶ所確認された。また、南側の張出した敷石をはさんで左右対称にピットが見られるが、これらは出入口に関わる施設と推定される。敷石下にピットを1基検出した。



第13図 SB07と出土土器

遺物出土と出土状況：住居址の覆土は殆ど残っておらず、遺物は少ない。後期21片と中期末葉の土器片が数点と、後期と思われる無文の土器片が出土した。1は集合沈線が施文される南三十稻場式であろうか。2・5は注口土器である。5はP1より、他は覆土より出土した。土器は小片が多い。石器は2次加工を有する剥片1点、使用痕を有する剥片1点、石核1点が出土した。なお、P1より丸玉(第92図22)が出土した。

遺構の時期：後期の土器が相対的に多く、本遺構の廃絶時期は堀之内式期と判断される。遺物が小片であるため細別時期を判断することはできない。

### SB08 (第14~19図)

調査経過と遺構の構造：礫が少なく遺物を多く含むところを掘り下げたところ敷石が確認された。掘り方は東壁のみ確認され、他の部分では攪乱などにより確認できなかった。

張出部を持つ柄鏡形敷石住居で、竅穴は長軸5.2m、短軸4.5mと推定される。敷石は主体部と張出部とこれらをつなぐ連結部とから構成されており、主体部は銀杏葉形を呈する。連結部の北側の敷石が無い所は一部攪乱を受けており、主体部の石が、敷石抜き取られていると推定されるが、南側は縁辺が直線的になっており、住居が機能していたときの敷石の状況を示していると思われる。連結部は敷石部分が幅約40cm、長さ約80cmで、その側縁には平石を用いた一対の立石が設置されている。張出部は方形を意識したものと思われ、連結部の立石に対応して約50cmの間隔で角柱状の立石が一対設置されている。敷石はほぼ全面にわたり表面が摩滅する。また、主体部敷石は被熱で黒色化している。敷石と東壁面の間は30cm~40cm幅で帯状に敷石が見られない。

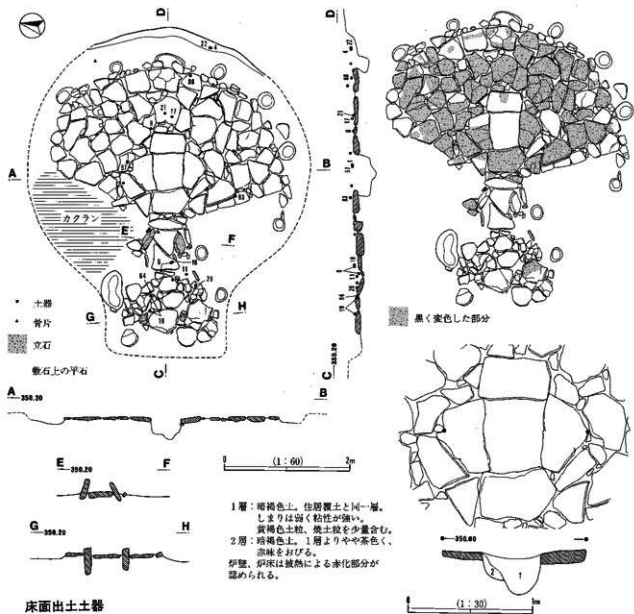
炉は敷石主体部の連結部寄りに位置する。特別の石垣は無く、4枚の敷石の側縁で囲った45cm×60cmの方形部分の床面を約25cm掘り下げている。炉覆土には焼土が少量含まれるが住居内覆土と類似する。炉床面と炉壁に赤く焼けた部分は確認されなかった。

柱穴は主体部敷石の側縁に沿って7基、連結部と張出部に3基が検出され、それぞれ直径20cm~30cm、敷石面からの深さ20cm~30cmである。主体部の柱穴は、80cm~100cmの間隔に配置されており、壁柱穴と想定される。敷石の北側の攪乱部分には壁柱穴は確認できなかったが、本来は東西の主軸に対し左右対称の位置に柱穴が存在していたと想定される。また、連結部と張出部に確認された3基は、出入口の施設に関わる柱穴と思われ、連結部の北側にも左右対称となる柱穴が1基想定されるが確認されていない。敷石下に埋塞などの施設は確認されなかった。

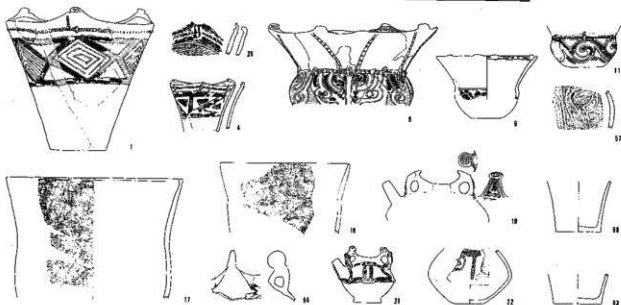
なお、セクションベルトを設定し東西方向の土層の観察を行なったが、図面作成後図面を紛失した。覆土は地山の礫を少量含む暗褐色土で、壁際にわずかに色調が異なる褐色の所謂三角堆積が認められた。

遺物出土状況：覆土より多量の土器が出土した。敷石面に接して完形の注口土器・骨片などが出土し、床面と床面付近の遺物出土地点を第14図に示した。遺構図の番号は土器の図版番号を示す。骨片は炉内や覆土からも出土しており、イノシシ・ニホンジカと鑑定された。詳細は第3章7節を参照していただきたい。

出土遺物：後期堀之内式を主体とする多量の土器が出土した。覆土中には中期後葉から末葉の土器も少なからず含まれ、早期・前期の土器も100片以上出土している。この他、ミニチュア土器1点(第92図18)、土偶2点(第91図5・第92図10)、土製円板4点(第90図4~7)、石鏃6点、削器2点、搔器1点、石匙1点、2次加工を有する剥片6点、使用痕を有する剥片2点、ピエス・エスキュー1点、打製石斧3点、磨製石斧5点、特殊磨石1点、磨石3点、凹石2点、敲石1点、石錘1点、石核5点、石棒小片1点が出土した。

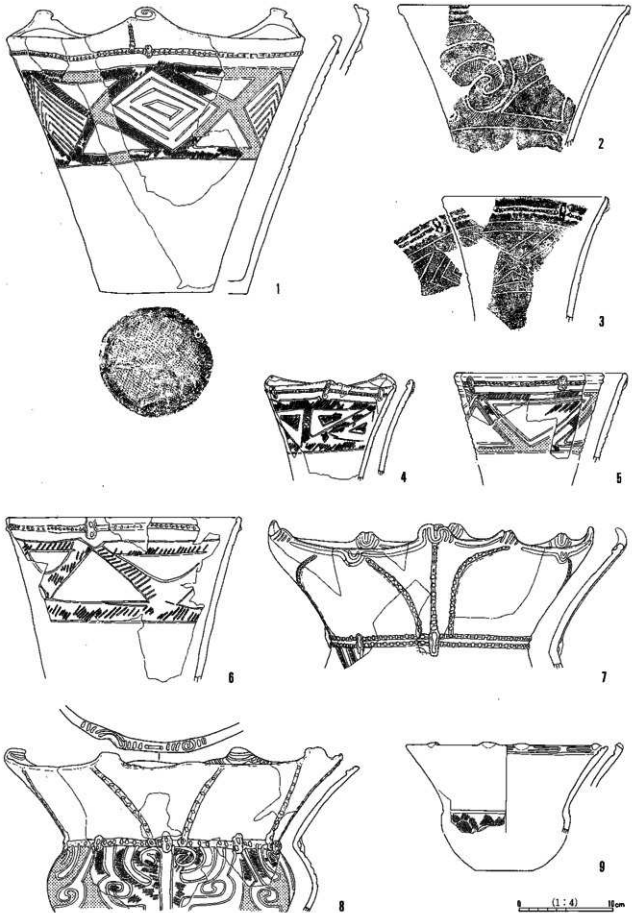


床面出土土器

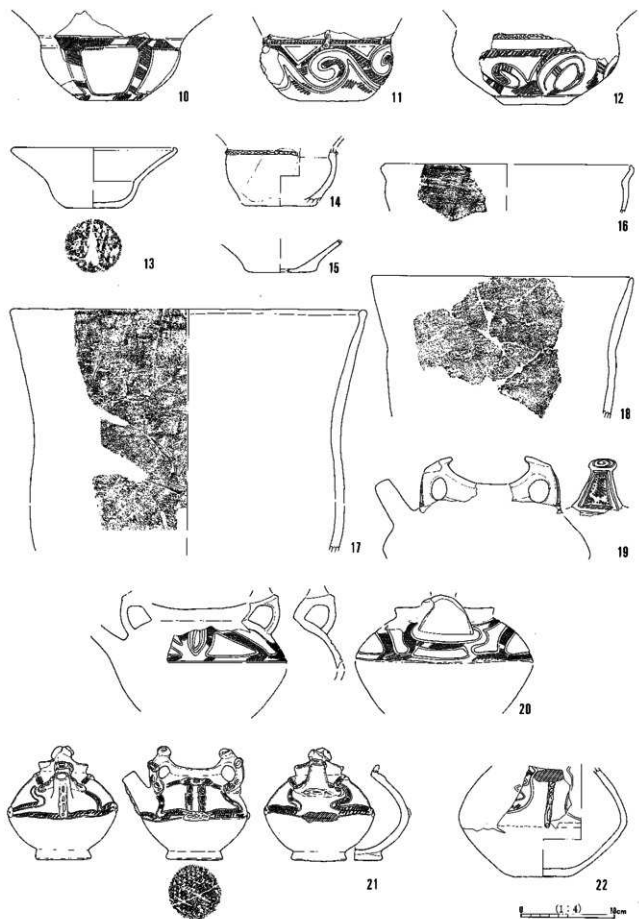


第14図 SB08

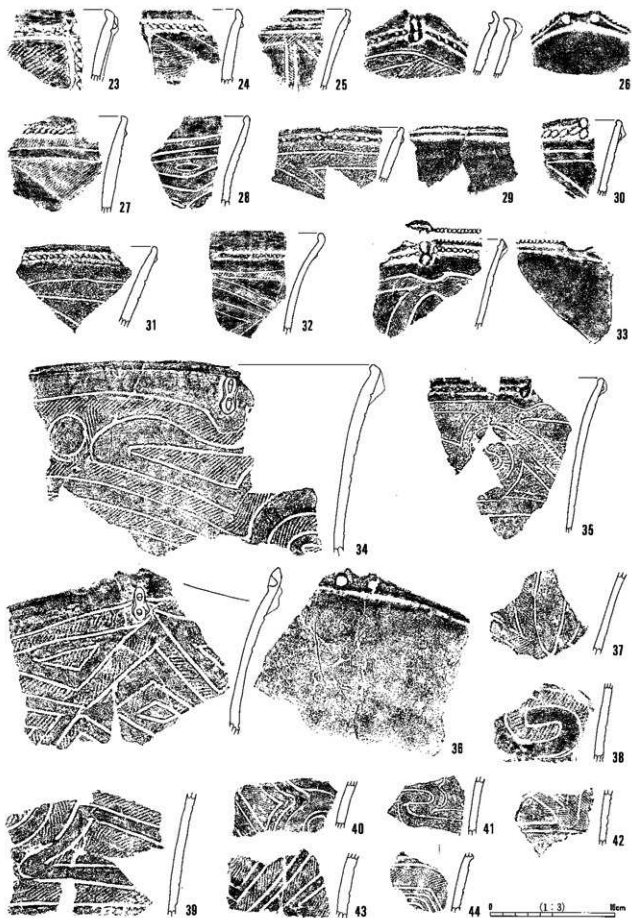




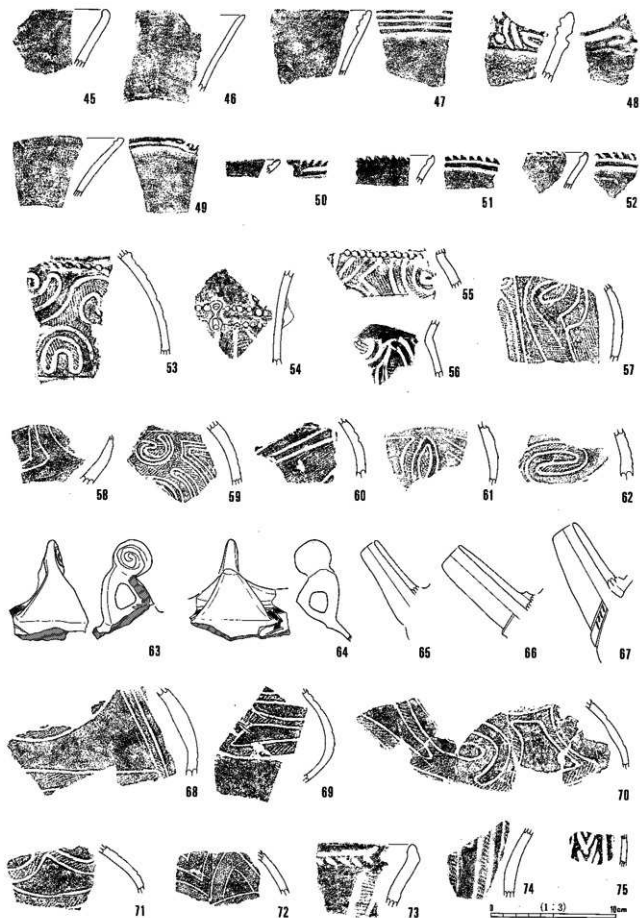
第15図 SB08出土土器(1)



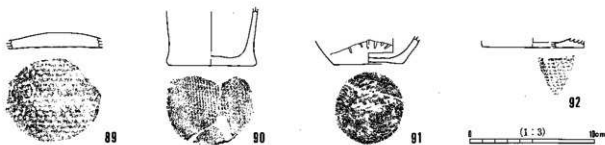
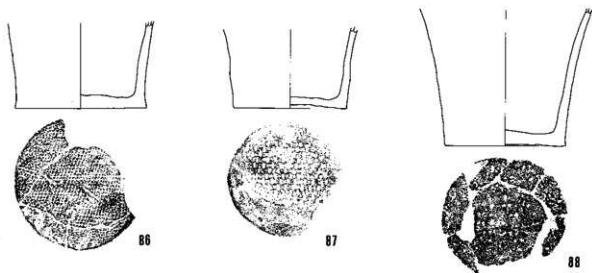
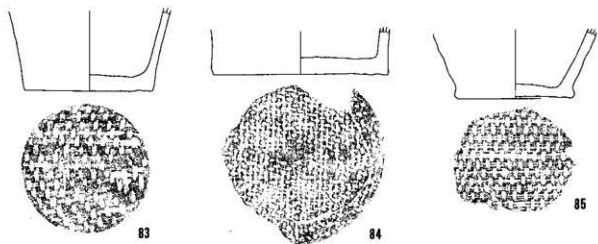
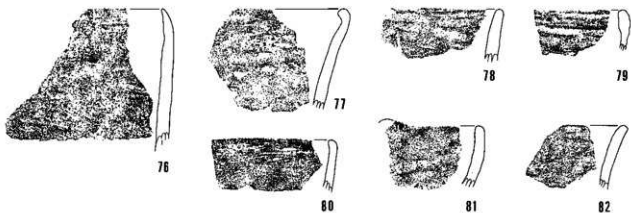
第16図 SB08出土土器(2)



第17図 SB08出土土器(3)



第18図 SB08出土土器(4)



第19圖 SB08出土土器(5)

第15～19図1～6・23～44・73～75は深鉢A、7～15・45～62・91は深鉢B、16～18・76～82は無文土器、19～22・63～72は注口土器である。

深鉢Aでは、1は朝顔形で、渦巻文を施した小突起を持つ、3単位の波状口縁である。波頂部の口唇部から垂下する短い紐線と口縁に巡る紐線の交点には円形の刺突があり、その右隣に「8」字貼付文が付けられる。文様帯は上下端がそれぞれ1本の沈線で区画され、菱形と三角形の沈線を組み合わせ、その間にLRの縄文が充填される。菱形の区画内は、菱形文あるいは矢羽状の沈線を充填する。底面には網代痕がみられるが、外周部分は擦り消されている。なお、1の口縁部の破片がSB09の人骨の横から出土している。2は連続する渦巻文の間に三角文を配したモチーフで、口縁部には指頭圧痕のような刻みの紐線が貼付される。4は3単位の波状口縁で、口縁部には刻みを施す紐線が巡り、その上に口縁の波状に対応して6つの貼付文が付けられる。貼付文には2ないし3個の刺突が施される。また、波頂部の内側にも円形の刺突が施されている。胴部の文様帯は上下端を沈線で区画し、その中に大小の三角文を組み合わせた文様を描き、LRの縄文を充填している。

また、深鉢A1類の口縁部には刻みを施した紐線が貼付されるもの(1～6・23～27・29～33・35)と、紐線がなく「8」の字の貼付のみ(28・34・36)の二者がある。33は口唇部に、26は口唇部内面に刻みが施される。73～75は深鉢A3類と推定され、73は口縁部の沈線下に太い斜めの刻みを施し口縁部文様帯とし、胴部は沈線間にLRの縄文が帯状に充填され、74とは同一個体の可能性がある。

深鉢Bでは、7・8の口縁部が大小一對の四単位の小突起で構成されている。8は頸部と上半部に刻みがある紐線の貼付後、胴下半部に渦巻状の沈線区画をしLRの縄文を充填する。文様は左右対称の文様構成と思われる。50～52は口縁内面の沈線と口唇部の刻みがあり、50は内外面とも赤彩されている。

21は小形の注口土器で、口縁部をわずかに欠損しているがほぼ完形である。2本の並行沈線の間にLRの縄文を充填し、沈線の交点と把手部と注口下部に刺突がある貼付文が付けられる。貼付文の上に縄文が施文されているところも認められる。底部は円盤状の粘土を貼付厚くしており、網代痕が認められる。また、注口部に赤色顔料がわずかに付着している。この注口土器(21)の脂質分析を行なったところ、用途は「コレステロールを主体とした動物性脂質と関連していたと考えられる。動物性脂質の中では、脂肪酸組成に高級不飽和脂肪酸がみられないことから、水産動物ではなく、陸上の哺乳類の可能性が高いであろう。」との結果がでた。なお、分析は小池裕子氏によって行われ、分析結果は埋蔵文化財センターで保管している。22は把手と注口部を欠損しているが、把手の剝離した痕跡が有り、注口土器と判断した。内外面ともミガキ調整がみられ、ミガキ調整は底部にも及んでおり、網代痕は見られない。把手の貼付部分より垂下する紐線が貼付される。図版作成後、第18図70が22に接合する事が判明した。

83～92に網代痕の底部のみを示した。83・84・86～88・90は深鉢A、91は深鉢Bである。

遺構の時期：出土遺物から本住居址の廃絶時期は堀之内2式と考えられる。

### SB09 (第20～23図)

調査経過と遺構の構造：SB08の北西側に近接している。検出面では多数の土器と骨片が認められた。本遺構を土坑と考え、輪郭が不明なまま掘り下げたところ、炉址と敷石を確認した。炉の北東を精査中人骨が検出され廃屋墓である疑いが出てきた。そこで人骨の横を精査し、敷石がない部分の掘り方を確認しようと掘り下げたところ、30cmほど下面から別な敷石(SB10)が検出された。上部敷石面(SB09)では掘り込みは確認されず住居のプランは不明である。住居の東側は調査以前に敷石面下まで掘り下げてあり、詳細は不明である。人骨はウレタンで固定し取り上げ、独協医大の茂原信生氏(現在京都大学霊長類研究所)に鑑定を依頼した。

炉とわずかな敷石を確認したのみで、住居の形状は不明である。炉を中心とした円形の住居が想定されるが、炉の北側の敷石縁辺が直線的に配されていることから、敷石は多角形であった可能性がある。柄鏡形であった可能性があるがその痕跡は確認できなかった。主体部推定プランの西側に扁平礫が比較的多く出土しており、張出部と思われるものがあるが、方形の炉から推定される主軸と45度のずれがあり、張出部と断定できない。床面はSB10の覆土中であるため識別は困難で、敷石の無い部分の床は確認できず、柱穴も見つけることはできなかった。炉は不整形な方形に礫を配したもので、内側の礫面は赤く焼けている。炉に用いられる礫は扁平なものではなく、敷石に用いているものとは趣が異なる。炉の覆土は焼土粒子と焼土塊を含んでおり、若干の骨片が認められた。周溝、埋葬などの施設は確認されなかった。覆土は骨片・炭化物を少量含み、粘性のある暗褐色土の単層である。

人骨について：炉の北東側に一体分の人骨が出土した。頭部から足先まで遺存状況は良好で、肋骨も一部残っている。仰臥屈葬で膝を曲げ、顔は炉と反対側を向いている。腰の部分には最大長28cmの分割された平石が置かれており、人骨との間に厚さ7cmの覆土が堆積している。人骨の下には概ね敷石はないが、下肢骨の下に1枚敷石が残る。頭骨の東側に大形の土器片が数点まとまって出土した(第20・23図1・2・64)。人骨に殆ど接して立てられているものもあり、頭を土器片で覆うなど、埋葬に伴う人為的な行為により残されたものと考えられる。この中の1点が足先から40cm北西の敷石上に出土した大形破片と接合する。これらの遺物の多くは加曾利B1式である。人骨と本住居址の関係であるが、人骨の出土レベルが敷石上面とはほぼ同じであること、人骨以外の場所でも敷石が抜き取られていると考えられること、前述の土器の接合関係などから、住居築絶直後に敷石を片付けてから埋葬されたと考えられることができる。しかしながら、SB09覆土内に墓塚が掘られた可能性を完全に否定できるわけではない。

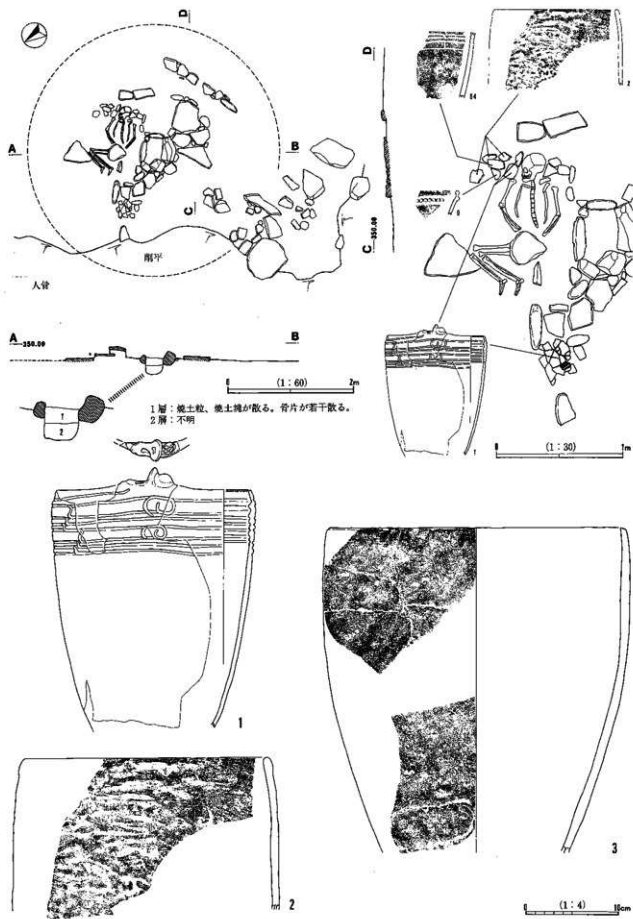
茂原氏の鑑定によると、人骨は壮年男性であろうと推定される。詳細は第3章6節を参照されたい。

遺物出土状況：住居址検出に至る過程で多数出土したが、床面近くから出土したものは多くない。住居址北西側より、底部を欠いた深鉢の大形の破片が床面につぶれた状態で出土した。人骨頭部の周辺にも大形の土器片が出土しており、これらの内1点が前述の深鉢と接合する(第20図1)。また、人骨周辺から出土した土器については、人骨を取り上げる際に出土したのを含んでおり、SB10の覆土中遺物をSB09として取り上げたものがある。したがって、SB09出土と報告したものの中に、SB10の覆土のものが含まれると考えたほうがよいであろう。土器は堀之内2式土器が主体となるものの、他の住居址に比べ加曾利B式土器がまとまって出土している。また、炉内と覆土からイノシシ・ニホンジカの骨片が出土している。詳細は第3章7節。

出土遺物：後期堀之内2式・加曾利B1式を主体とする多量の土器が出土した。覆土中には早期・前期・中期後葉から末葉の土器もわずかに含まれる。この他に、土製円板1点(第90図8)、石鏃2点、石鏃未製品1点、削器1点、石錐3点、2次加工を有する剥片5点、使用痕を有する剥片1点、ヒエス・エスキュー1点、打製石斧1点、磨石1点、凹石2点、石核3点、原石2点、石剣?1点が出土した。

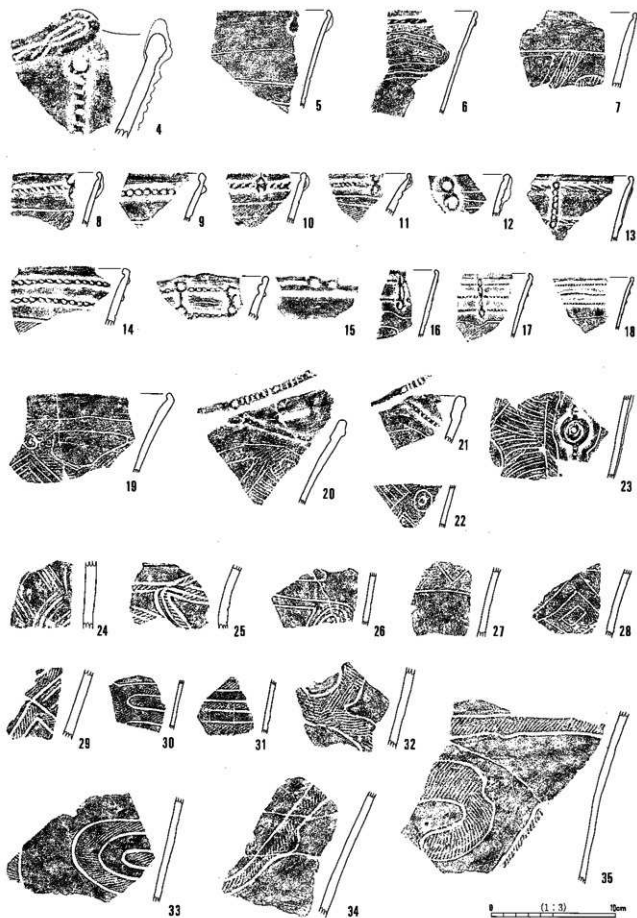
第20～23図5～35・43・54～57は深鉢A、4・36～42・44は深鉢B、2・3・45～52は無文土器、53は注口土器、72～80は底部である。堀之内2式が主体を占め、その他の型式のものでは、4が堀之内1式、43・54・55は南三十稻場式、56は堀之内2式から加曾利B1式並行、57は堀之内2式並行、1・58～67・71は加曾利B1式、69・70は加曾利B2式以降のものであろう。

深鉢Aでは、口縁部に巡る紐線の貼付が見られるものが多く、13～18は複数の紐線が貼付される。特に16～18は繊細な紐線で、器面は丁寧に磨かれ、器厚が3mm～4mmと非常に薄く、16・17は黒褐色、18は赤褐色を呈する。5・12・19には紐線の貼付がない。5は器面を丁寧に削り、沈線が引かれるのみで、縄文は施文されない。19～23は同一個体もしくは同じ系統の土器と思われ、口縁部に幅広の突起と縦と斜めの

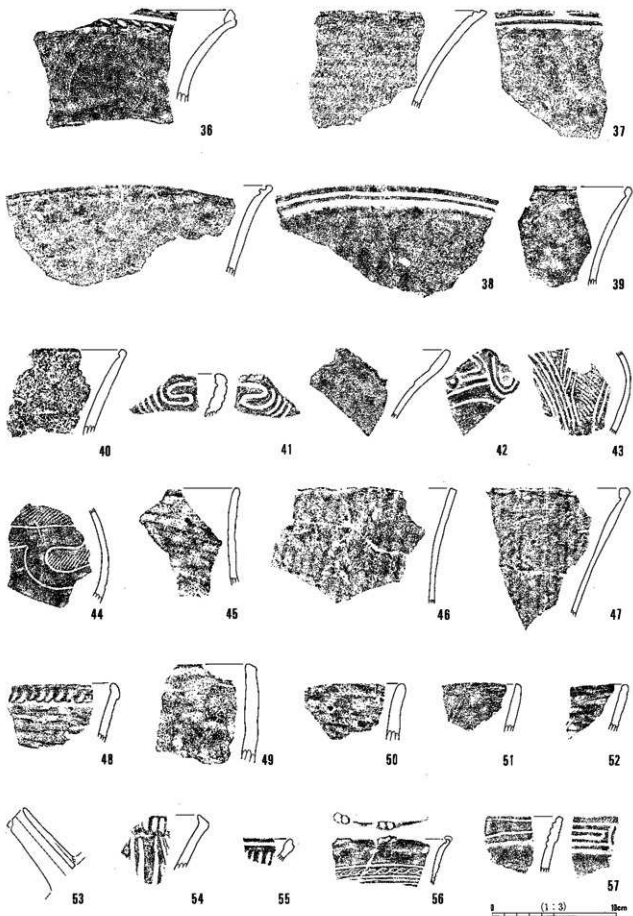


第20図 SB09と出土土器(1)

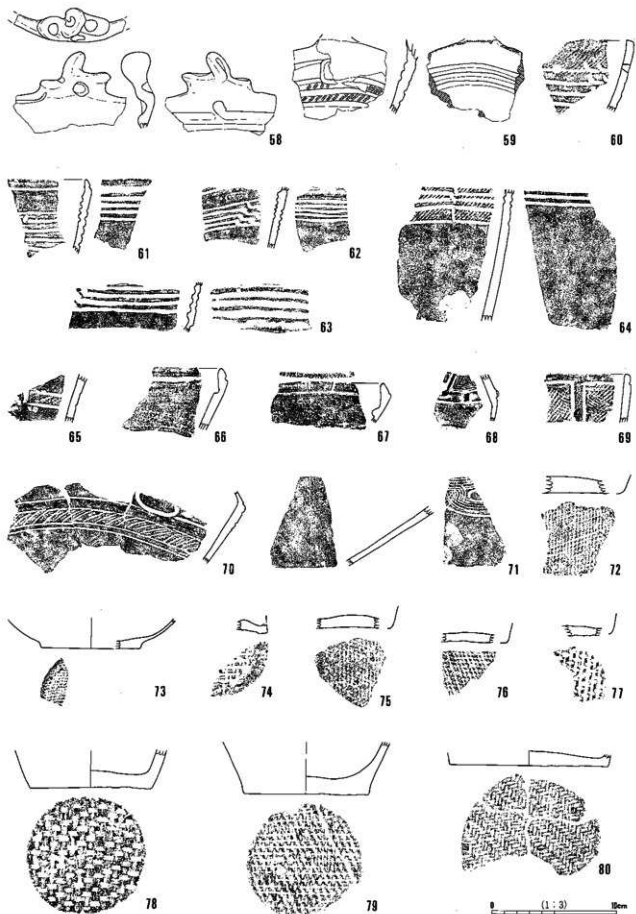




第21図 SB09出土土器(2)



第22図 SB09出土土器(3)



第23図 SB09州土土器(4)

紐線の貼付が見られる。また、SB10（第27図）の19～21と同一個体と思われ、SB09（第21図）19～23はSB10覆土中の遺物であった可能性がある。遺物集中区1（第53図）の16も同一個体と思われる。（PL19参照）

深鉢Bでは、36は口縁部の稜に棒状工具で刻みを施し、37・38は口縁内面に1条の沈線が引かれる。39・40は深鉢A類の口縁端部の形態に類似するが、口縁の傾きからB類と判断した。39の表面は丁寧なミガキ調整で、40は無文土器のナデ調整に似た器面調整である。

無文土器では、2・45・48・50・52に顕著な指ナデ痕が、3はミガキまたは丁寧なナデ、46・47・51にはケズリ痕が見られる。口縁端部は、47・52が内面に深鉢Aに類似した屈曲を持ち、46・47・51が口唇部に面取りをしている。3の口唇部は部分的に面取りが見られるが、必ずしも全体に面取りをしているものではない。これらの無文土器は堀之内2式、または加曾利B1式を構成する器種である。2・3は口縁がやや内湾しており、加曾利B1式の深鉢の器形に類似しており、他の無文土器に比べ新しい様相と考えられる。

加曾利B式では、1・58～65・69・70が深鉢、66・67・71が浅鉢、68は注口土器である。1は全体の4分の1が残存しており、底部を欠くが、3単位の突起を持つ。1・58・59・61・67の口唇部には細かな刻みが見られる。

遺構の時期：人骨の埋葬時期は加曾利B1式期である。住居の廃絶はこれと同時期もしくは堀之内2式期である。

### SB10（第24～29図）

調査経過と遺構の構造：SB09出土人骨の調査中、人骨の北東部に敷石が無いため住居の掘り方を検出しようとしたところ30cmほど下部で新たな敷石が検出され、住居址が重複することが判明した。炉の位置を比較すると、SB10の方が35cm南西にずれているが、敷石住居は大半の部分が重複しており、SB08の北西側に近接する。住居址北西側は、現存する石垣を重機で掘り下げたため、調査面が敷石面より下がってしまい住居址のプランが確認できなかった。

炉を中心とした直径6.4m前後の不整な円形を呈する。東側の壁は覆土と明瞭に区別された。張出部は確認されなかったが、削平された西側に張出部を持つ柄鏡形住居である可能性がある。北東側の敷石は比較的遺存状況が良いが、南西側半分が抜き取られたためであろう敷石は部分的に見られるのみである。敷石表面は黒色または赤色に変色している（第24図）。変色がまだらで、他住居からの敷石の転用を想定することができる。また、炉の北側で敷石面直上に重なっていた大形の板状の石をスクリーントーンで示した。本来敷石として用いられたものが、抜き取られた後住居外に持ち去られずに本住居址に残されたものであろうか。炉は住居址中央部にあり、4枚の敷石に囲まれた約50cm方形を呈すると考えられるが、南側の敷石が抜かれている。特別な石囲いは無く、中央部の窪みは40cm×45cmの円形で敷石面から深さ約20cmである。炉床は焼土化している。炉覆土は黒褐色土で、少量の焼土と炭化物を含み、下部ほど炭化物が多くなる。炉の形態はSB08に類似する。柱穴は壁際に8基巡る。いずれも直径20cm以下の小さなもので、深さも20cm前後である。周溝は認められず、埋塞等の床下の施設は確認されない。

敷石の敷き方から主軸は北東—南西方向であり、出入口は南西部に想定される。

遺物出土状況：覆土から比較的多くの土器が出土した。南東壁際の敷石面付近から小形の深鉢形土器（第26図12）とミニチュア土器（第92図14）が出土した。これら以外は床面から離れているものの、出土地点を明示したものは出土レベルが一定の面を為しており、覆土の形成過程のある一時期に遺棄または廃棄されたものと判断される。また、覆土中より骨片（図中▲印）が出土しており、イノシシとニホンジカ

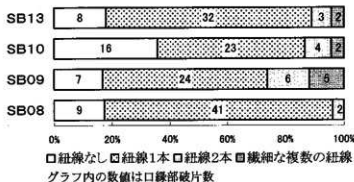
と鑑定された。詳細は第3章7節参照。

出土遺物：後期堀之内2式を主体とする多量の土器が出土した。覆土中には早期・前期の土器が100片以上混入しており、中期後半から末葉の土器もわずかに混入する。その他、ミニチュア土器1点（第92図14）、土製円板5点（第90図9～12）、石織17点、石織未製品1点、石錐1点、削器2点、不定形石器1点、2次加工を有する剥片11点、使用痕を有する剥片3点、切断面がある剥片4点、ピエス・エスキュー3点、磨製石斧2点、特殊磨石1点、磨石5点、石鎌5点、研磨痕がある礫1点、石核6点が出土した。

1～4・13～49は堀之内1・2式および南三十稲場式深鉢A、5～8・50～68は堀之内1・2式深鉢B、69～76は無文土器、78～80は注口土器、81・82は加曾利B1式である。

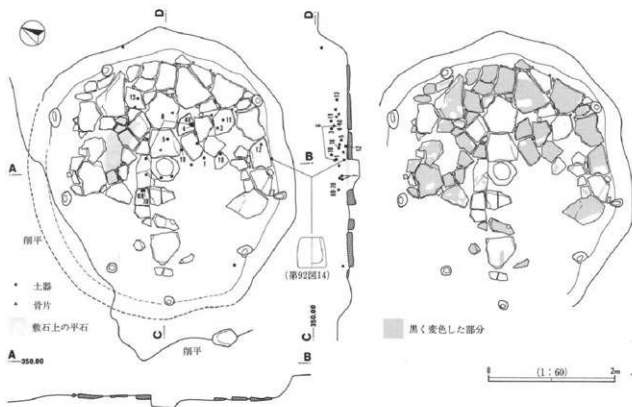
深鉢Aでは、口縁部に巡る紐線を貼付したものが多く、紐線が貼付されない個体（1・13～23）も他の住居に比べ多い。堀之内2式深鉢Aの紐線が貼付されない口縁破片数を住居ごとと比較すると、SB10が35%に対し、SB08が17%、SB09が16%、SB13は17%である（グラフ1）。2・4は深鉢A1類、1・41・42は深鉢A2類、3・46～49は深鉢A3類である。なお、本住居址は器形が明らかなものが多く、また、1・14は波頂を欠くが口縁部は波状を呈すると思われる。

1は胴下半部に屈曲を持つ器形で、2段に配置した三角文により文様が構成される。同一個体と思われる破片（拓本）には縦位の区画と円文の一部と思われる沈線が確認され、円文部に対応した波状口縁が推定される。2は底部から口縁に外反する所謂朝顔形の器形で、刻みがある紐線文上に2箇所刺突を沈線で結んだ「8」の字状貼付文が付く。胴部の文様帯は上下端をそれぞれ1本の沈線で区画し、その中を「X」字

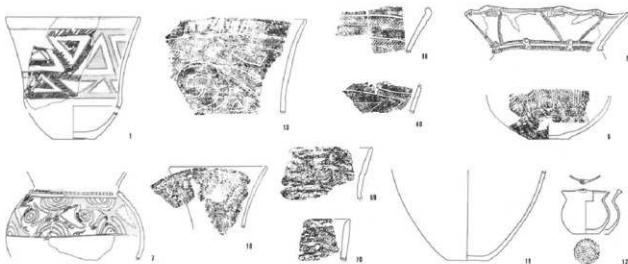
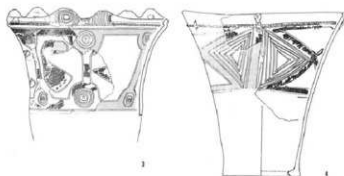


グラフ1

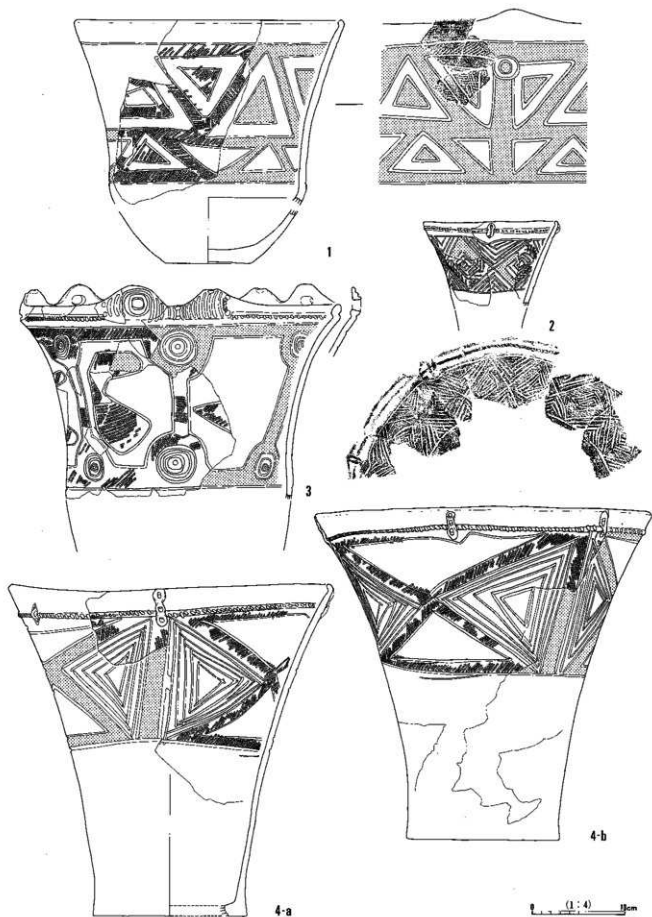
状の沈線を横に並べ、菱形と三角形を組み合わせた区画を構成する。菱形の区画内は、さらに小さな菱形状の沈線を重ね、その間にRLの縄文を充填し、三角形の区画内は矢羽状の沈線を充填する。3は胴部がやや膨らみ口縁に向かって外反する器形である。2つの小突起を一對とした3単位の波状口縁となり、一方の小突起には円孔が穿たれている。口縁部は1条の沈線と、斜めの刻みとで文様帯が構成される。胴部文様帯は上下端を沈線で区画し、さらにその中をLRの縄文が充填された縄文帯で縦の区画をし、区画内はそれぞれに異なった図形が描かれ、縄文が充填される。口縁の小突起に対応して胴部文様帯では、上下端に同心円文が配置されており、6単位で1周する構成になると推定される。4は所謂朝顔形の器形で、口縁には斜めの刻みを施した紐線が巡り、2つ又は3つの刺突がある貼付文が付けられる。胴部文様帯の上端は紐線、下端は1本の沈線により区画され、三角文の組み合わせにより文様を構成し、LRの縄文が帯状に充填され、三角形の区画内は重三角文となる。文様は横に向かい合った2つの重三角文を一単位として、三単位で器面を一周する。それぞれの単位は縦位の縄文帯で区画される。また、下書きと思われる細く浅い沈線が部分的に残っている。口縁の無文部と胴下半部と内面は磨かれており、口縁部では器面を削った痕跡も観察される。19～21は同一個体で、SB09の第21図19～23も同一個体と思われる。33・34・43～45は厚さ3mm～4mmと薄手で黒色または黒褐色を呈し、器面は丁寧なミガキ調整である。また、33・34の紐線は幅2mm以下の繊細なもので、他の紐線と区別できる。35は太い沈線間に縄文が施文されており、上記の繊細な紐線が型式変化したものと推定される。46は堀之内1式に比定され、外面に灰と思われる灰色のパウダー状のものが附着する。48の口縁部は指ナデ状の擬似的な沈線がみられ、沈線間にLR



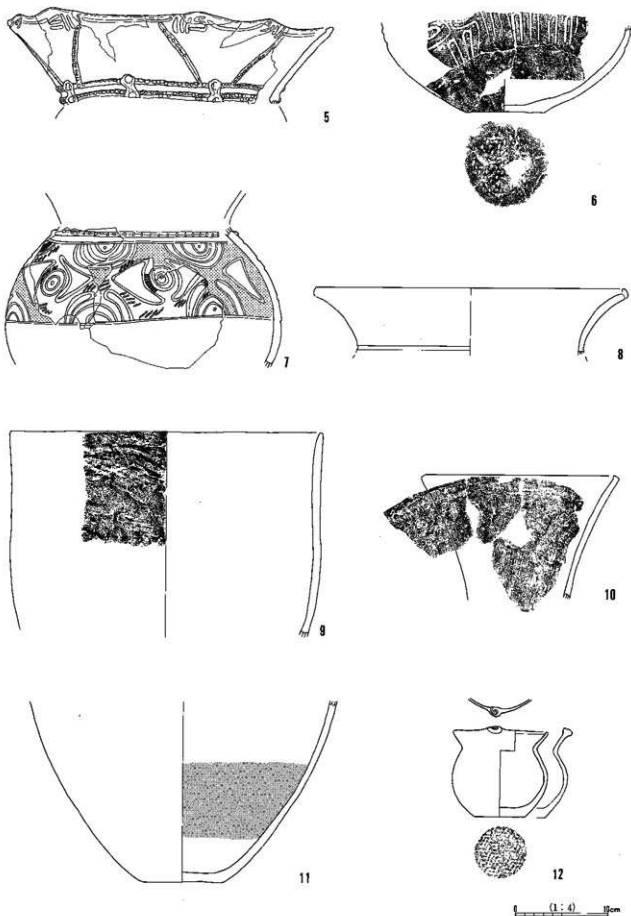
覆土及び床面出土土器



第24図 SB10

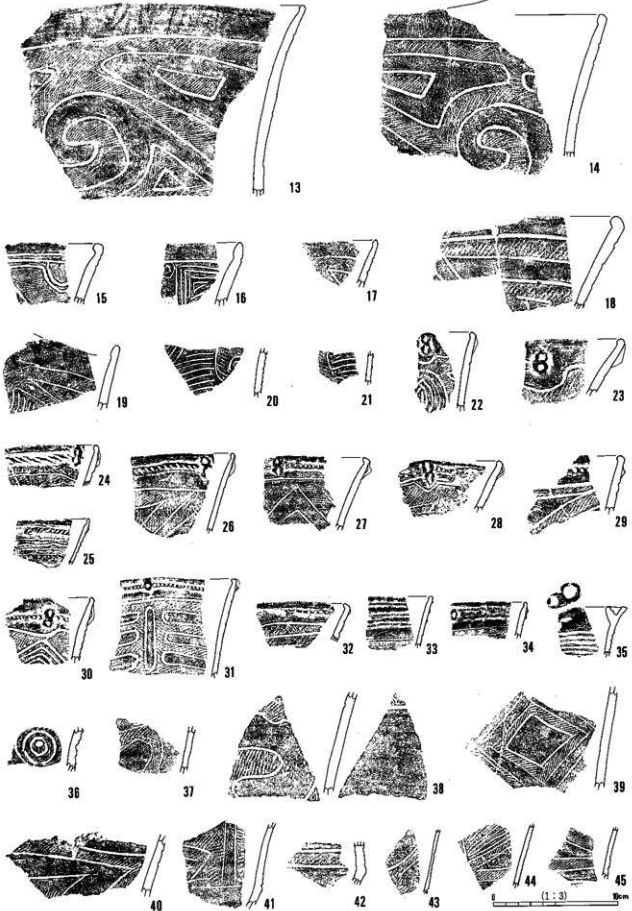


第25図 SB10出土土器(1)

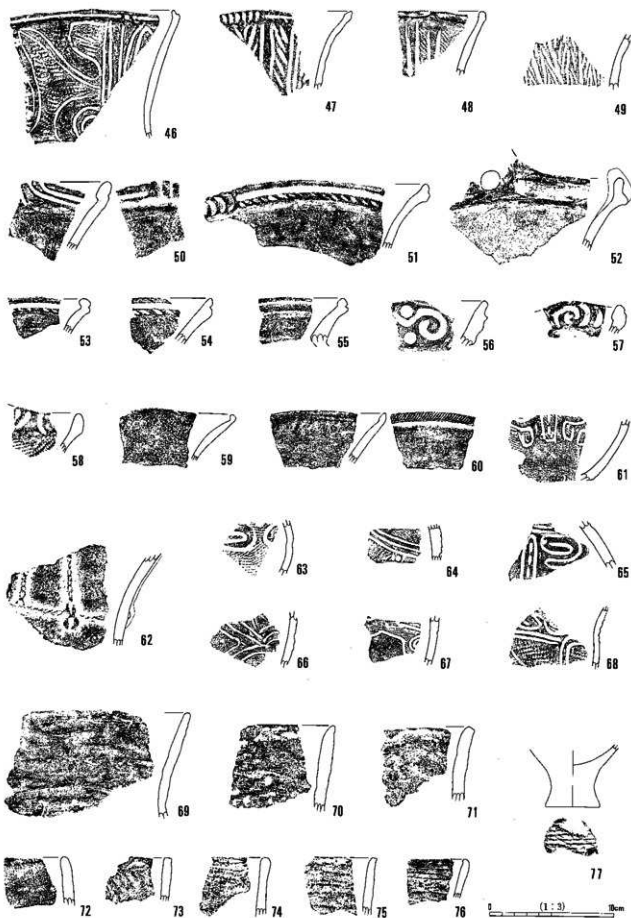


第26図 SB10出土土器(2)





第27図 SB10出土土器(3)



第28図 SB10出土土器(4)

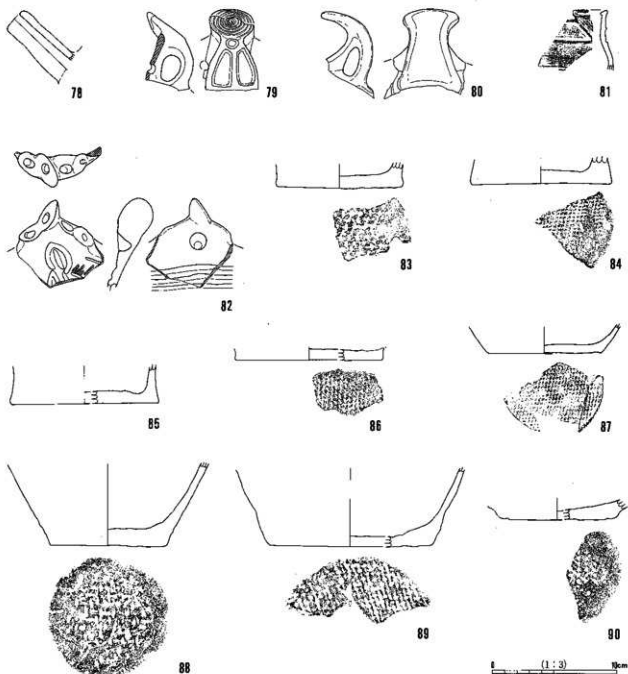
の縦位縄文が施文される。

深鉢Bでは、口縁部文様帯に沈線のみが巡るもの(5・50・52・55)と、沈線下の稜部に刻みが施されるもの(51・53・54)と、無文のもの(59・60)が見られる。

無文土器では、9・71・75が明瞭な指ナデ痕を残し、10・73はケズリ調整、69・70・72・74・76はナデ調整がみられる。10・71・73・75は口唇部が面取りされ、16は内面に屈曲があり深鉢Aの口縁形態と類似する。

78は注口土器の注口部で下面に赤色顔料が部分的に付着している。79・80は注口土器の把手で、79上面には渦巻文が描かれている。

その他の器種では12・77・81などがあげられる。12は器高9.2cmの小形深鉢である。床面より出土した



第29図 SB10出土土器(5)

もので堀之内2式に伴うものであろう。口縁部が一部欠損しているがほぼ完形で、全面にミガキ調整がなされ、底部に網代痕がかすかに残る。口縁部に渦巻文の突起が1つ確認されるが、欠損部に突起が付く可能性もあり、突起は1もしくは2箇所である。この小形深鉢の脂質分析を行なったところ、用途は「動物性・植物性両者の食物が関係していたと考えられる」との結果がでた。なお、分析は小池裕子氏によって行われ、分析結果は長野県埋蔵文化財センターで保管している。81は薄手で黒色を呈し、器面は丁寧なミガキ調整である。

底部では、83～86が深鉢A、87・90が深鉢B、88・89が無文土器に対応するであろう。特に、89は粗いケズリ調整と指ナデ痕が認められ、無文土器の器面調整と一致する。

遺構の時期：覆土形成過程では堀之内2式の土器が見られる。これらの遺物は床面から10cm～20cm浮いているが、本住居址廃絶後それほど時間が経過したとは考えられないことから、廃絶時期は堀之内2式期と考えられる。

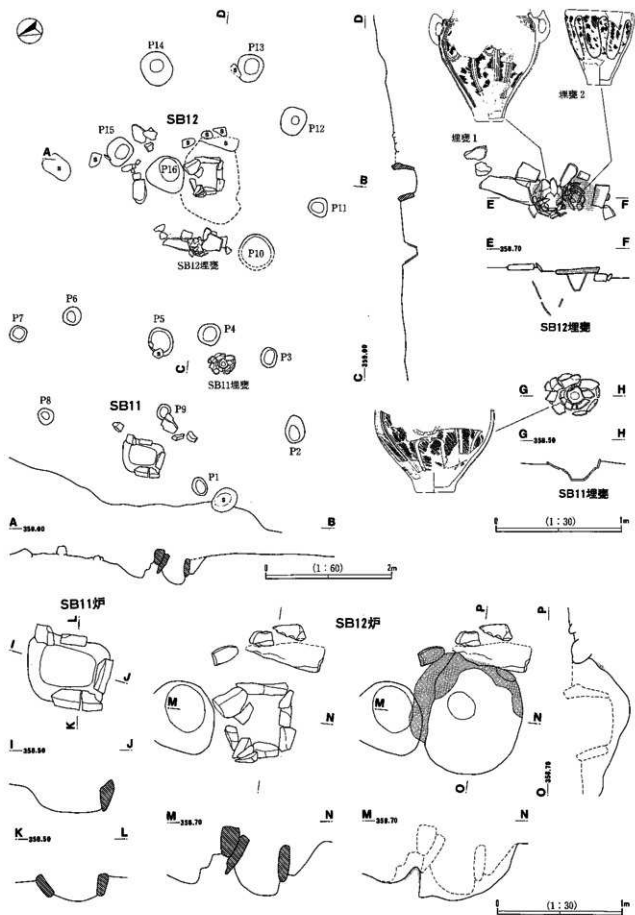
### SB11・12 (第30・31図)

調査経過と遺構の構造：炉と埋甕が検出され住居址と判明したが、住居のプランは不明である。炉が2基、埋甕3基が検出されたため、2棟の住居が重複したものと理解し、北西側の炉と埋甕をSB11、南東側の炉と埋甕をSB12とした。遺構プランは確認できなかったため、柱穴の位置と遺物出土状況から住居址の範囲を推定した。なお、SB11の炉の北西側はトレンチにより床面下まで掘削されている。いずれも炉と埋甕と柱穴と敷石の残骸と思われるわずかな扁平礫が残されているのみである。自然礫と敷石の区別が明確ではなく、明らかに敷石ではないもののみ図中にSと記した。なお、調査時のピット番号が不明となり、SB11・12のピットに整理段階で任意の通し番号を付けた。

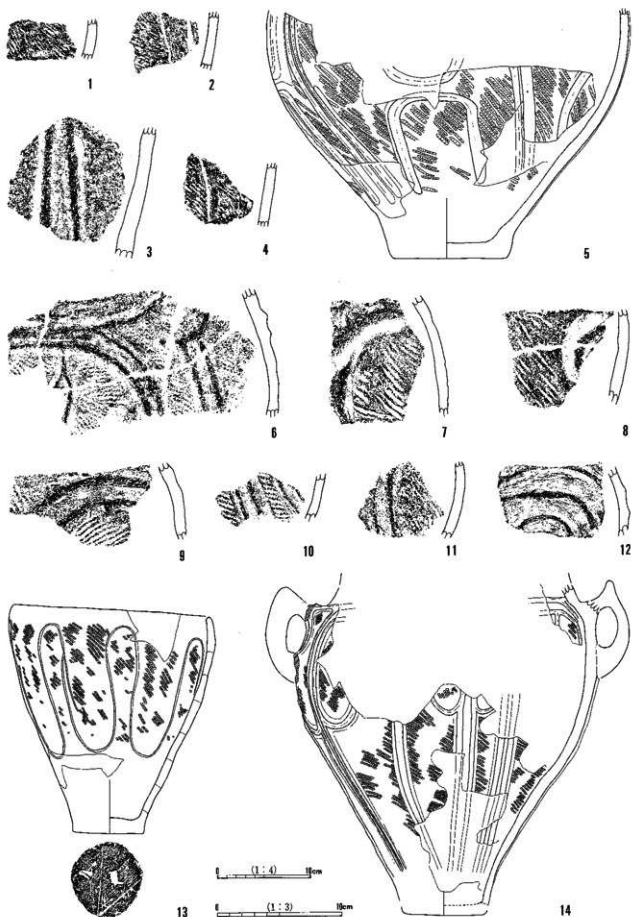
土層観察により2棟の新旧関係を確認することはできず、また埋甕がどちらの住居に所属するかは確認できていない。両住居が柄鏡形住居であった場合、埋甕の所属が逆転する場合も考えられる。本報告では調査中の呼称に従い炉と埋甕と柱穴の記述をすすめる。

SB11の炉は床面を約20cm掘り込んで、板状の石を立てた石囲炉である。石は一部抜き取られているが、炉の掘り方が方形を呈しており、石をすべて設置した時の上面での内寸はおおよそ45cm×50cmとなる。炉の覆土は良く締まった黒褐色土で小礫を含むほかは特に混入物は認められない。炉の北側約1.5mのところに埋甕が1基確認された。胴下半から底部が正位に埋設されている。炉を中心とした推定住居範囲内から9基(P1～P9)のピットが確認されたが柱穴は特定できない。P4とP5以外は深さ10cm未満の浅く小さなものである。P5は深さ14cmと比較的深く柱穴の可能性がある。

SB12の炉は厚さ15cm～20cmの扁平な石を立てて四角に囲んだ石囲炉である。炉の掘り込みは床面より40cm～50cmで、炉石上面での内寸は約30cm×40cmである。炉石はあまり焼けておらず、底部付近の土が硬く焼けていた。炉の覆土は黒褐色土の単層で、焼土を多く含み、小礫と黄褐色土ブロックが混入している。また、炉石を取り外したところ、炉石の外側に現存した石囲炉とは別の焼土が確認され、この焼土は炉の北側に接するピット内にも広がっている。このことから、炉の造り替えがあったものと判断した。なお、炉の周辺に確認された掘り込み範囲を破線で示したが、新旧2つの炉の構築の際の掘り方と思われる。また、前述の焼土のあり方から、炉の北側に接するピットも炉の構築に関わるものと思われる。炉の北西側と北東側に敷石の残存部と思われる数枚の扁平な石が検出された。また、北西側の敷石部には2基の埋甕が確認された。埋甕1は敷石の間に検出され、埋甕2は蓋石で覆われていた。蓋石は表面がゴツゴツしており、敷石とは異った趣きの石である。埋甕1は口縁部と底部を欠いているが、埋甕2は口縁から底部まで残存しておりほぼ完形である。いずれも正位に埋設されている。2つの埋甕の新旧関係は土層の観察



第30図 SB11・SB12



第31図 SB11・SB12出土土器(1-4・6-12は1/3、5・13-14は1/4)

からは判断できなかったが、両者の位置関係から同時埋設、または埋設2が後に埋設されたものと判断される。また、埋設の周辺および埋設内より多量の黒曜石とチャートの破片が出た。炉を中心とした推定住居範囲から柱穴と思われる深さ6cm～30cmのピットが6基（P10～P15）確認された。

遺物出土状況：埋設以外の出土土器は少なく、住居址のプランと切り合い関係が不明であり、覆土中の遺物がいずれの住居址に含まれるかは明らかでない。SB12埋設周辺及びSB11とSB12との重複部分に黒曜石とチャートの破片が多量に出土し、SB11床下とSB12覆土より石鏃未製品と石核が多量出土したことが注意される。

出土遺物：出土遺物は少なく、中期から後期の土器が主体となる。SB11覆土および掘り方として取り上げた遺物のうち無文以外の時期が判別できる土器片は中期後葉15点、後期前葉15点である。SB12は中期後半44点、後期前葉20点である。他に、早期後半の条痕文系土器、縄文後期、弥生後期、古代の遺物が混入する。土器以外には、石鏃16点、石鏃未製品30点、半月形石器1点、石錐3点、石匙1点、削器2点、搔器2点、不定形石器1点、2次加工を有する剥片18点、使用痕を有する剥片3点、切断面のある剥片4点、ピエス・エスキュー3点、打製石斧12点、磨製石斧1点、磨石2点、敲石14点、石錘3点、石核19点、原石1点が出土した。

第31図5はSB11の埋設である。胴上半部は失われており、底部は残存している。地紋に無節斜縄文(L)が施文され、1本又は平行した2本の隆帯による逆U字文などが配される。土器は脆く、器面の摩滅が著しい。13はSB12埋設2で口縁部をわずかに欠損するがほぼ完形である。大きな波状の沈線を巡らせた後、その間を幅2cmほどのLRの縄文を縦位施文している。波状沈線の及ばない口縁部と胴下部に縄文は施文されない。底部にはV字状の圧痕もしくは条線が見られる。14はSB12埋設1で樽形の双耳が付く器形である。口縁部と底部と把手を欠損している。口縁部には幅広の無文帯があり、胴部は縦位のLRの縄文と2本または1本の隆帯で文様を構成している。

遺構の時期：両住居に伴う埋設は中期末加曾利EIV式併行であることから、後期前葉の土器は混入と考えられる。いずれの住居も埋設の時期より中期末加曾利EIV式併行期に使用された住居である。

### SB13 (第32～34図)

調査経過と遺構の構造：立地地点が浅い谷に面した低い斜面上であったため、遺構は無いと考え遺物包含層として掘り下げたところ、敷石と炉が検出され住居址と確認した。覆土と地山の区別は困難で、南側と東側の立ち上がりは不明瞭で、敷石の広がり、わずかな色調の違い、礫の混入の少なさなどにより地山と覆土を識別した。住居址西辺は攪乱されており検出できなかった。

竈穴のプランは不明瞭であるが、直径約5mの円形を想定できる。張出部は確認できなかったが、SB08の柄鏡形住居を参考にし、地形の傾斜と張出部とに相関関係があるとすれば、攪乱された西側に張出部を想定することが可能である。敷石の多くは抜き取られたものと思われるが、南縁に直線的な縁辺が認められ、敷石が多角形に配置されていた可能性を示唆している。また、炉の北東側に縦に立った扁平な石が1点確認され、その傍らに斜めに傾いた扁平な石が認められた。炉址は長径55cm、短径45cm、深さ12cmの楕円形の掘り込みで炉床全面が焼けていた。炉内には2個体の胴下半部から底部(48・55)が設置されており、いずれの土器にも灰と思われる灰色のパウダー状の付着物が認められる。炉の覆土は黒褐色できめが細かくボソボソして締りが悪く、焼土塊が多く含まれる。柱穴と思われるピットが8基確認された。いずれも壁際にあり、壁柱穴と考えられる。北壁付近の床面に注口土器(49)が口縁部を上にして埋設されていた。出土レベルが床面下であるため埋設と考えたが、掘り込みを確認することはできなかった。

遺物出土状況：比較的多量の遺物が出土しているが、敷石が出土するまで住居址と認識できなかった

め、大半の遺物の出土状況は不明である。49の注口土器は住居北側の床面に半分埋もれて出土したもので、胴上半部の1/2が欠損しているが、割れ口がすべて新しく、発掘調査中に失われた可能性がある。これに対し注口部分の割れ口は古いもので、埋設時に注口部分は欠けていたものと思われる。56は敷石上部につぶれて出土した。

出土遺物：堀之内2式を主体とした多量の土器が出土した。早期・前期の遺物の混入はなく、縄文中期と弥生後期と古代の土器を若干混入する。土器の他には、ミニチュア土器1点、(第92図17)、土製円板2点(第90図13)、ヒスイ製の石製品1点(第92図27)、石鏃6点、石鏃未製品2点、石錐1点、2次加工を有する剥片2点、切断面のある剥片3点、ピエス・エスキーユ1点、打製石斧1点、特殊磨石1点、磨石2点、凹石5点、敲石2点、石核10点が出土した。

第32～34図1～10・12～15・17～27・56は深鉢B、11・16・29～36は深鉢A、37～40は無文土器、41～44・49～54は注口土器である。

深鉢Aでは、口縁に紐線を貼付するものとしめないものがあり、1本の紐線貼付のものが主体を占める(SB10グラフ1)。2は波状口縁とも思われるが、器形のゆがみかもしれない。6は口縁内面に斜めの刻みを施し、その下に1条の沈線を引いている。内面の刻みは本遺跡では稀な例である。12は南三十箱場式と思われ、口縁部文様帯は沈線と稜部の刻みにより構成され、胴部文様帯は縦位の沈線が引かれる。56は深鉢A3類で、口縁部が1/3残存しており、2個1対の波状の突起がある。胴部文様帯は、渦巻文を横に連ね、その間に三角形の区画を挿入する。右側の拓本資料は同一個体と思われる胴部破片で、縄文を充填する部位が場所により逆転していることが伺われる。胎土は全体に橙褐色を呈し、二次焼成によるものと思われる表面の風化が他の土器に比べ著しい。本住居址出土の11・42・49・51が同様な色調や風化の度合いを示している。

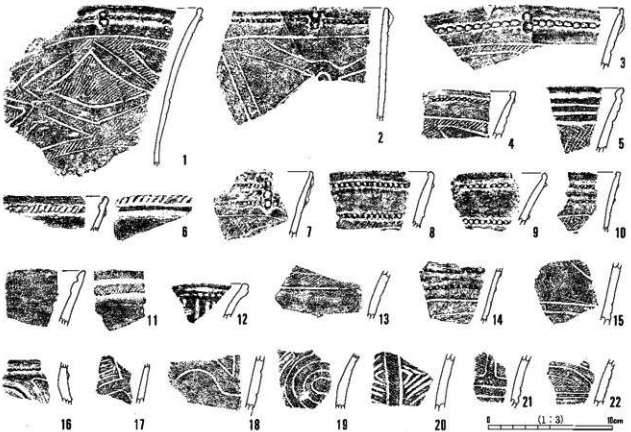
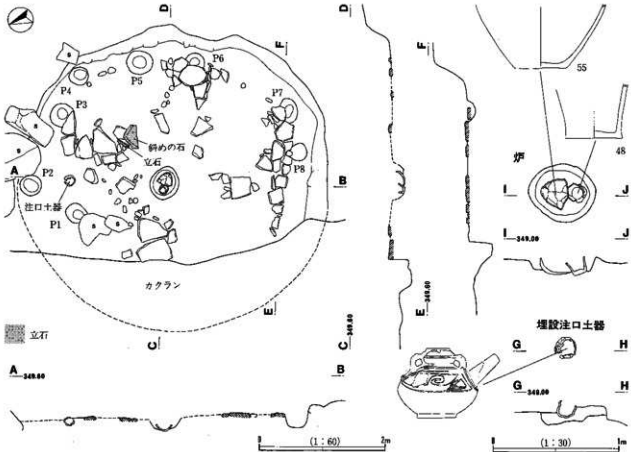
なお、46～48・55は深鉢Aの底部であろう。55は炉内より出土したもので、粗いミガキ調整で無文土器であるかもしれないが、胎土が56に類似しており、深鉢A3類の底部の可能性もある。底部に明確な網代痕は認められない。

深鉢Bでは、口縁外面に沈線があるものとなないものが見られ、沈線がないものが多い。また、口縁外面に沈線がないものの中に、内面に沈線があるもの(30)がわずかに見られ、これらは浅鉢の可能性もある。31は他と胎土が異なり、色調は内部が黒く外面は褐色をおびた灰白色である。33と36は同一個体の可能性があり、いずれも外面に炭化物が付着する(スクリーントーン部)。

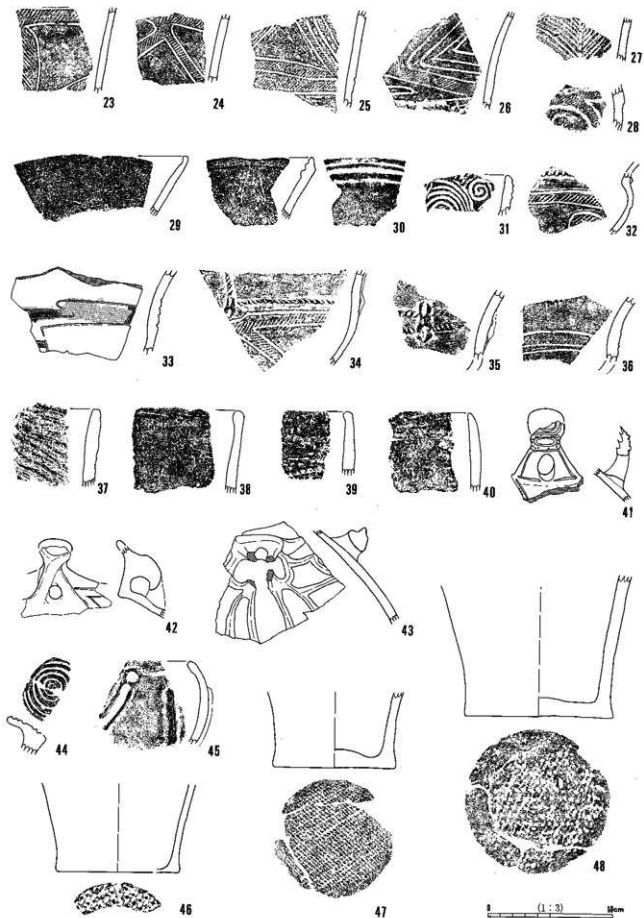
注口土器は他の住居址に比べ出土点数が多い印象を受ける。器形復元ができる3個体(49～51)はいずれも口縁部形態・把手の形状が異なる。41～44は注口土器の把手部であるが、前述の3個体と異なった形状・文様である。49の胴部文様帯は渦巻文と三角文の組み合わせで構成され、注口の反対側に「8」字貼付文が一つ付く。底部は高台が貼り付けられており、その中側に網代痕が見られる。50は横走する4本の細隆帯間に楕円形沈線と直径1mmほどの小さな刺突列が見られる。51は口縁部に刻みのある紐線が貼付され、頸部から胴上部に二重の低隆帯が巡る。頸部の低隆帯には円形の刺突が、胴部の低隆帯には縄文が施文され、後者はそのまま把手へつながる。胴部には充填縄文による文様が注口部を中心に左右対称に描かれる。縄文はLRの単節縄文である。表面の摩滅が著しく、縄文が不明瞭な所があるが、平行沈線の間は縄文が施文されていたものと思われる。

なお、28は縄文部分が低隆帯状に盛り上がっており、器形も不明である。遺構の時期：出土遺物より後期前葉堀之内2式期に廃絶された遺構と判断した。

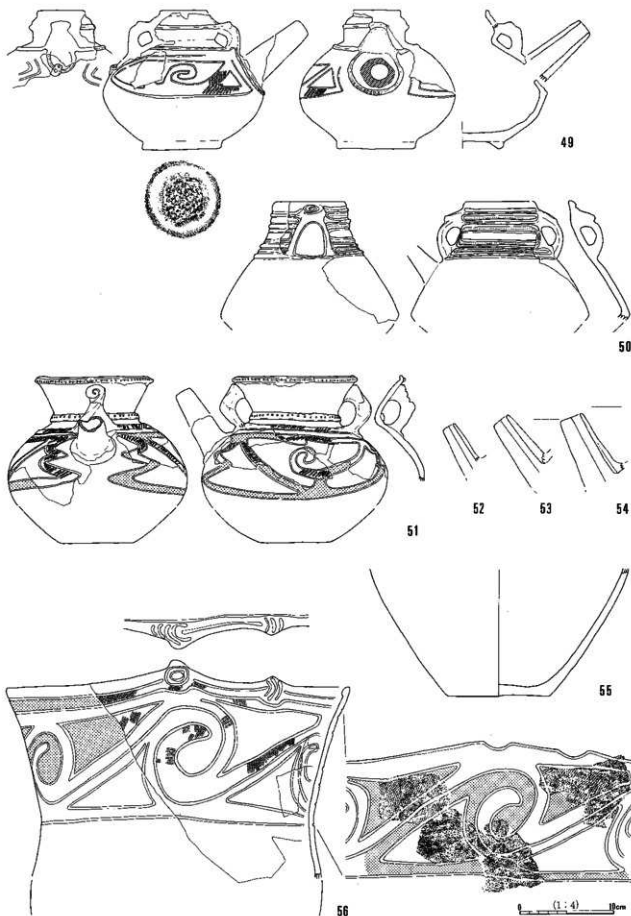




第32図 SB13と出土土器(1)



第33図 SB13出土土器(2)



第34図 SB13出土土器(3)

## SB14 (第35図)

調査経過と遺構の構造：遺物が集中していたが掘り込みは確認できなかったため、全体を掘り下げたところ、敷石と炉と思われる焼土が検出され、住居址と認識した。遺構の壁は確認できず、柱穴の配列より住居址のプランを推定した。

掘り方は確認されなかったが、直径約4.5mの円形のプランと推定される。張出部は確認できなかったが、柱穴の配列とSB108の地形との対応関係から推定すると、北側に張出部を想定することができる。覆土は大小の礫を含む暗褐色土で、他の住居址に比べ焼土を多く混じる。敷石は住居址南側に多く残存しており、これらは周縁部の敷石で、直線的で多角形に配置されていたものと思われる。地山には礫が含まれており、人為的な敷石でない地山の礫にはSの字を記した。炉址は深さ30cm、直径40cm前後の円形で内面は硬く真赤に焼けている。覆土は褐色土で焼土粒と焼土塊を多く混じる。炉内より大形の胴部上半部破片が出土し、二次焼成により器面は脆く、赤褐色に変色している(第35図6)。出土状況が不明なため明言はできないが、SB13の炉に見られるような炉に埋設された土器と思われる。柱穴と思われるビットが18基検出され、敷石の外側に円形に配列されている。15cm～20cmの深いものと、10cm前後の浅いものがほぼ交互に配置されている。

遺物出土状況：出土遺物は少なく、第35図6は炉体土器と思われ、1が床面から出土した。他は出土地点不明である。

出土遺物：堀之内2式を主体とした土器が出土したが、小破片が大半を占める。縄文時代早期・前期・中期と弥生時代後期の土器を若干混入するのみである。土器の他には土製円板1点、石鏃2点、石錐1点、2次加工を有する判片1点、磨石2点、石錘1点、石核1点が出土した。

第35図1～6は深鉢Aである。1は補修孔と思われる焼成後の穿孔が見られる。3は胴部に屈曲部を持つ深鉢A2類である。6は胴部にわずかにびれがある深鉢A3類で、欠損があるため明言できないが、文様帯は垂下する1本の隆帯により3単位の区画され、充塞縄文による文様が展開する。文様帯の上下を区画する沈線は垂下する沈線のところで途切れる可能性もあるが確認できない。文様帯の上下端部には同心円文もしくは渦巻文が配置されている。器面の風化が著しく、二次焼成を受けたと思われる。

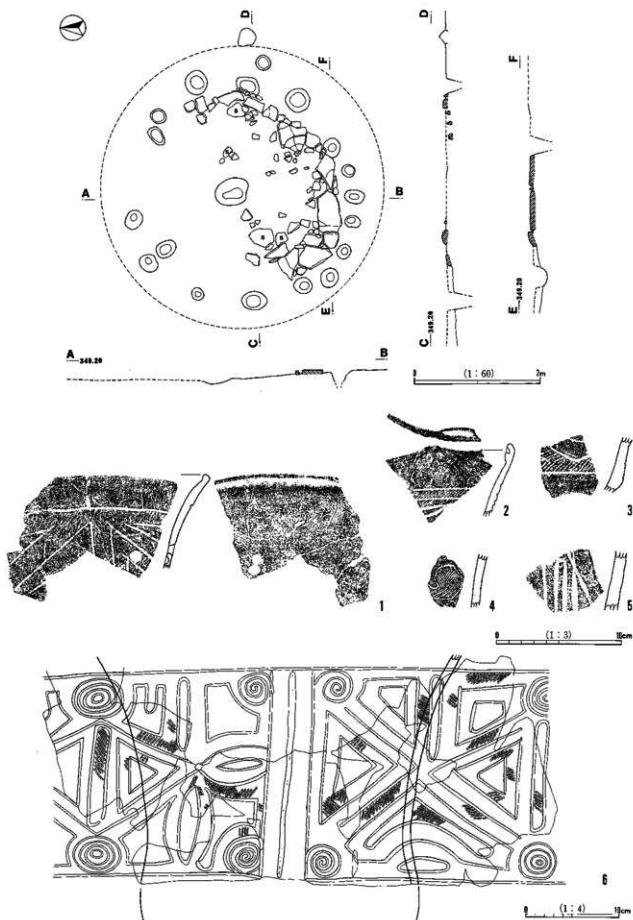
遺構の時期：炉に埋設された土器と床面出土の土器より、本住居址の廃絶時期は後期堀之内2式の時期である。

## SB15 (第36図)

調査経過と遺構の構造：敷石を検出し、住居址と認識した。本遺構は前年度の試掘調査で掘り下げた地点であり、覆土はわずかに残されていたのみである。竪穴のプランは不明であるが、炉址と思われる少量の焼土が認められる窪みを中心に円形のプランを想定し示した。南東側を暗渠と思われる溝で破壊されており、溝際敷石が引きずられるように溝に落ち込んでおり、敷石面は溝側に傾斜している。

敷石に接した窪みに焼土が確認されたが、炉址と断定できない。暗渠により破壊された部分以外の敷石は住居址廃絶後に抜き取られ、部分的に残存している状態であると思われる。柱穴と判断できるビットは確認できなかった。

遺物出土状況：覆土が殆ど残されておらず、出土遺物は少ない。遺物の多くは敷石上面とその西側から出土している。敷石東側の溝に落ち込んだ暗褐色土からほぼ完形の鉢形土器(第36図16)が出土した。調査時には床面の土器が覆土とともに溝内に落ち込んだものであろうと考えた。しかし、他の出土遺物がすべて堀之内式であり、加曾利B式はこの鉢形土器の他には出土していないことから、16は本遺構には伴わず、加曾利B1式期の遺構が覆土中に掘り込まれていたものと考えた方が妥当であろう。

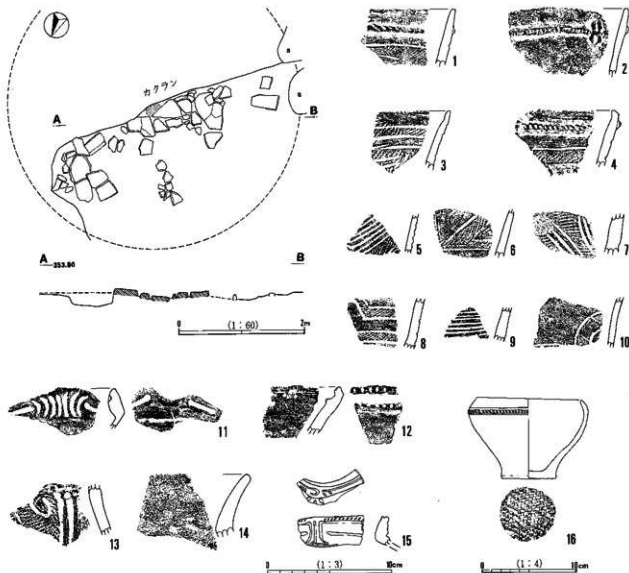


第35図 SB14と出土七器 (1~5は1/3, 6は1/4)

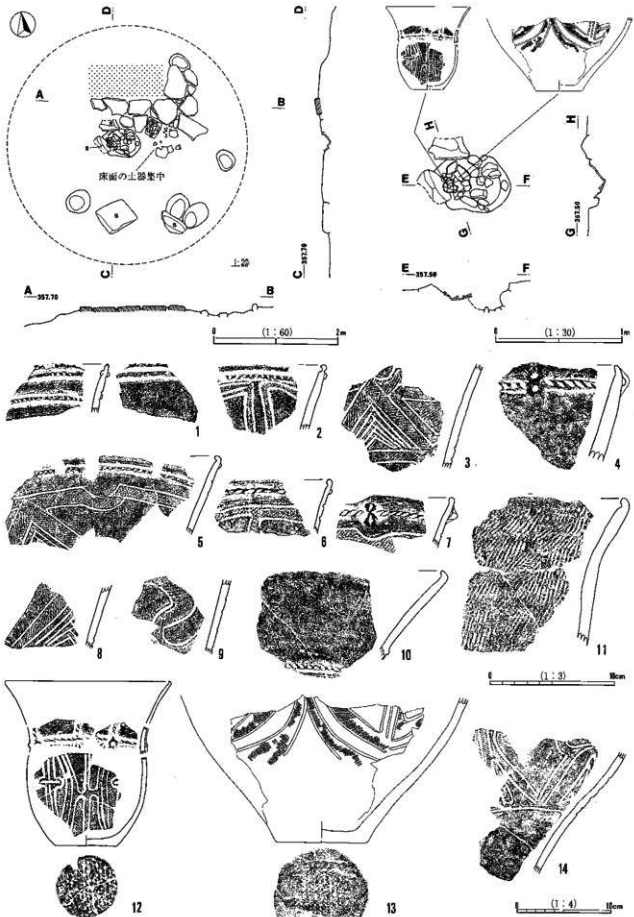
出土遺物：堀之内2式を主体とした土器が出土した。出土点数は少なく、縄文前期・中期の土器と須恵器片をわずかに混入する。土器の他には、土製円板1点(第90図14)、石鏃2点、石錐1点、削器1点、不定形石器2点、使用痕を有する剥片1点、切断面のある剥片1点、ピエス・エスキュー1点、打製石斧3点、敲石1点、石核2点が出土した。

第36図1～6・8・9は深鉢A、11～13が深鉢B、14は無文土器、15は注口土器であろうか。深鉢Aでは2が他と異なり胴部に文様も持たず、紐線の刻みが細く鋭い。また、1・2は口縁内部の屈折が見られない。いずれも本遺跡では稀な例である。15は口縁の平面形状が方形に近く、口縁部と口唇部に刻みが見られる。16は加曾利B1式の鉢形土器で、口縁をわずかに欠損するがほぼ完形である。口縁付近の2条の沈線間に縄文がわずかに観察される。底部には網代痕が明瞭に認められる。

遺構の時期：加曾利B1式の鉢形土器の所屬が不明確であるが、本遺構に伴うとすると、住居の廃絶時期は加曾利B1式期となる可能性もある。しかしながら、周辺の遺構外の遺物を見ても加曾利B式は見られず、本住居が加曾利B1式土器登場以降に使用されていたとするには疑問が残る。堀之内2式に廃絶された住居と考えておきたい。



第36図 SB15と出土土器(1～15は1/3、16は1/4)



第37図 SB16と出土土器(1~11は1/3、12~14は1/4)

## SB18 (第37図)

調査経過と遺構の構造：敷石を検出し住居址と認識したため、堅穴のプランは確認できなかった。わずかに検出されたピットの配置から直径4mほどの円形のプランを想定した。敷石周辺は住居確認前に床面の高さより深く掘り下げられており、張出部の有無も確認できていない。なお、地山には多数の礫が含まれており、自然礫と判断したものは平面図に「S」と表記するか、もしくは図より省いてある。

敷石は炉の北側に残されているのみである。残存する敷石の北側の縁線が逆L字状に区画された部分があり、その区画内は地山のレベルが他の敷石の無い部分より高くなっている。長野県諏訪郡原村の大道上遺跡7号住居（平出一治1985）では長方形の板材が敷かれている部分には敷石が見られない例があり、図中スクリーントーンで示した部分はこれに類するものと推定される。炉は長軸60cm、短軸36cm、深さ20cmの楕円形の地床炉で、東半分は被熱により赤色化している。西半分には2個体の深鉢の底部から胴下半部（第37図12～14）が設置されており、その上部でわずかに焼土が検出された。この炉体土器はいずれも1/2～1/3ほど失われており、底部と胴部の一部に灰と思われる灰色のパウダー状のものがわずかに付着する。炉の覆土は焼土と炭化物を殆ど含まない粘性の強い暗褐色土である。住居址推定範囲より5基のピットを検出したが、柱穴は特定できない。

遺物出土状況：住居址覆土がわずかであったため、本住居址に所属する遺物は少ない。また、一部残っていた覆土からの遺物も比較的少ない。12～14は炉体土器で13と14は同一個体である。4～11は炉付近の敷石上面にまわって出土したものである。

出土遺物：堀之内2式を主体とした土器が出土した。縄文時代早期・前期の遺物の混入はなく、縄文時代中期と弥生時代後期と奈良・平安時代の土器を若干混入するのみである。土器の他には、石鏃2点、石鏃未製品1点、不定形石器1点、2次加工を有する剥片2点、打製石斧2点、磨製石斧1点、磨石1点、石核2点、敲石2点が出土した。

第37図1～9は深鉢A、10・12～14は深鉢B、11は無文土器である。1は口唇部に刻みがあり、口縁内面に1本の沈線が引かれ、外面は2本の紐線が巡る。2も口縁内面に1本の沈線が見られる。4は刻みがある紐線と「8」字貼付文が見られるのみで、胴部文様が見られない。11は横位の無節Lの縄文である。

遺構の時期：敷石上面出土土器より本住居址の鹿絶時期は堀之内2式期と考えられる。

## 3 土坑とその遺物

縄文時代と認定される土坑は59基検出され、このうち時期が明確であるものは、早期1基（SK20）、中期3基（SK33・37・77）、後期15基（SK18・30・38・44・47・57・61～63・65・78・83・87・89・90）である。その他の土坑は土器小破片が少数出土したものあるいは出土遺物が無い土坑で、覆土から縄文時代と判断した土坑もある。また、SK52・53・62からは獣骨または人骨が出土している。以下に出土状況など詳細な記載が必要なものについて列記し、他は第2表と第48～50図に概要をまとめた。

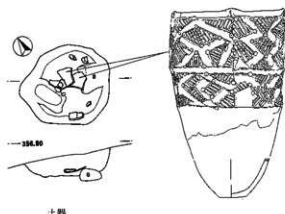
## SK20 (第38・61図)

遺構の構造：II O23グリッドに位置する。直径60cm×70cmの不整な楕円形を呈し、検出面より15cm～20cmの深さである。土坑底面の北西部部分には一段深い部分があり、南東側には地山の石が露出している。底面より5cm離れてほぼ完形の土器が押しつぶされた状態で出土した。なお、この土器にはSK13出土の口縁部破片が接合した。覆土の詳細は不明であるが、暗褐色土の単層で焼土粒と炭化物を少量含んでいる。

出土遺物：第61図89はほぼ完形に復元される鶺鴒台式土器である。器高約30.0cm、口径18.0cm、底径



4.5cmである。口唇部は内そぎ状で、胴部上半に2段の段部を持ち、底部はやや丸みのある平底である。口縁部は6単位の小波状となるが、その間隔は一箇所狭いところがあり、等間隔ではない。胴上半部の文様は、上端を浅い沈線で、下端を段部で区画された2段の文様帯で構成されている。口縁部には幅1cmほどの無文帯がみられる。6個の波頂部からは2段の文様帯を貫いて細隆起線が垂下し、器面全体が12の長方形に区画され、それぞれに独立した異なったモチーフを描いている。12の小区画内は浅い直線の沈線で幾何学的なモチーフでさらに区画され、その交点に竹管による円形の刺突を行い、沈線または竹管の押しきり沈線を充填する。沈線による幾何学的なモチーフの区画は三角形、菱形、横長の長方形などであり、沈線の外側が盛り上がり、細隆起線のように見える所もある。前述の文様帯を貫き垂下する細隆起線も、両脇を浅い沈線を引くことにより低い隆帯のように見えるものであり、貼付したり、つまみ上げた隆線ではない。工具は直径6mm前後の竹管を用いたものと思われる。無文部および内面に明確な条痕は見られないが、内面に条痕をすり消したと思われるものがわずかに観察される。胎土には繊維を含み、金雲母、石英などの鉱物が多く見られ、器面は脆い。色調は褐色から暗褐色である。



第38図 SK 20

このほかに別個体の鶴が島台式の破片数点と剥片5点が出土した。

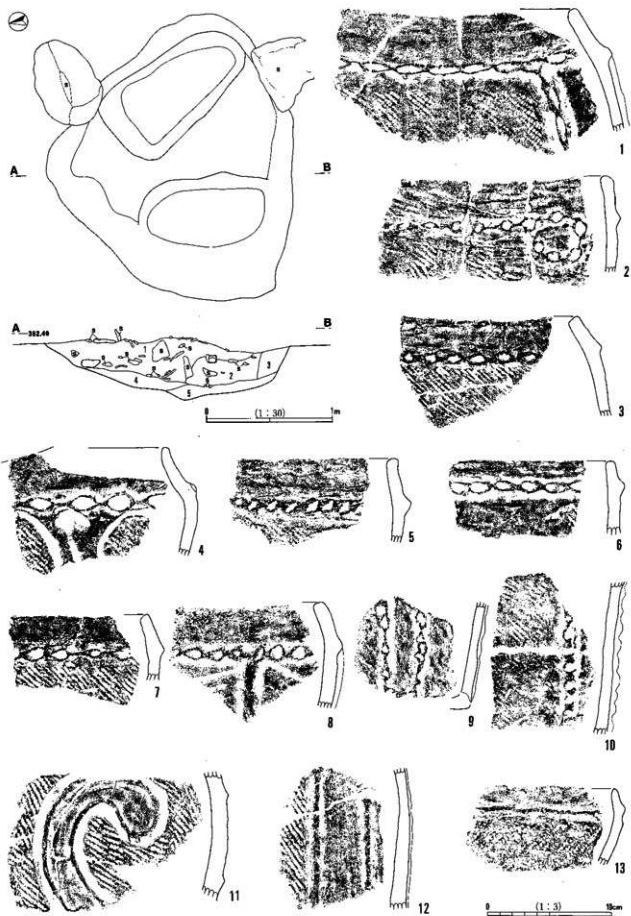
遺構の時期：縄文時代早期後半の鶴が島台式期である。

### SK 33 (第39~41図)

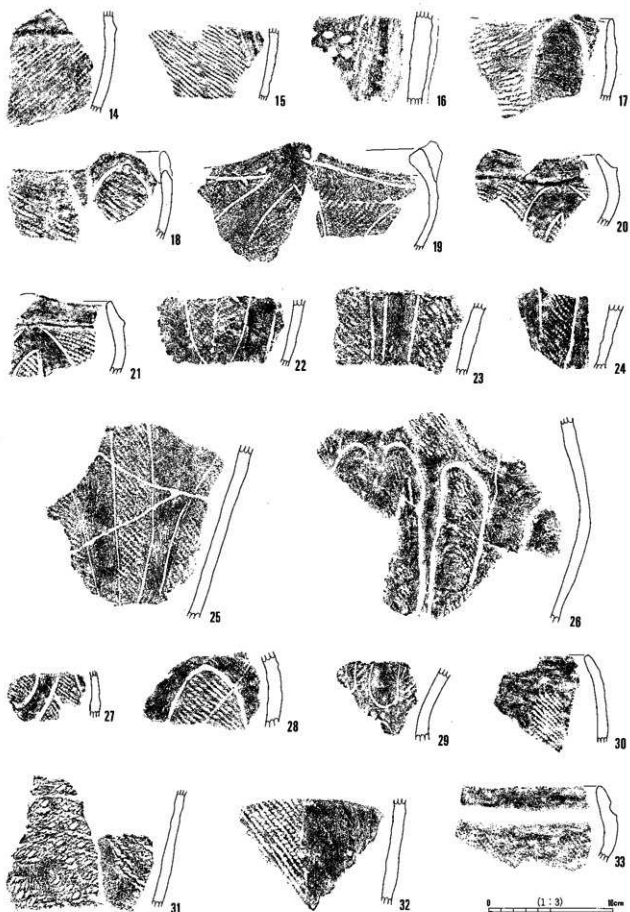
遺構の構造と遺物出土状況：II P 13・18グリッドに位置する。東西約2.3m、南北約2mの不整な円形を呈する。底面に2ヵ所わずかに深くなるところがあり、最も深い所で、検出面より50cmである。検出面より多量の土器片が出土しており、覆土全体に遺物が見られ、礫も多く含まれる。土器はすべて破片であるが大形の破片が多く、接合により器形復元ができる個体も認められる。土器は1層・2層中に多く含まれており、1層上面に分布の中心が見られる。1層から4層は暗褐色土、5層は暗黄褐色土で、いずれも大小の礫を含む。

出土遺物：縄文時代中期末葉を主体と大量の遺物が出土した。出土土器の総量は48kgである。縄文時代早期・前期・後期、弥生時代後期、平安時代の土器をわずかに混入する。土器の他には、石鏃3点、石鏃未製品7点、刃器状剥片5点、2次加工を有する剥片4点、ピエス・エスキュー1点、打製石斧18点、磨製石斧1点、特殊磨石1点、磨石1点、敲石1点、石核8点が出土した。詳細な出土状況は不明であるが、多くの遺物は1層中に含まれていた。

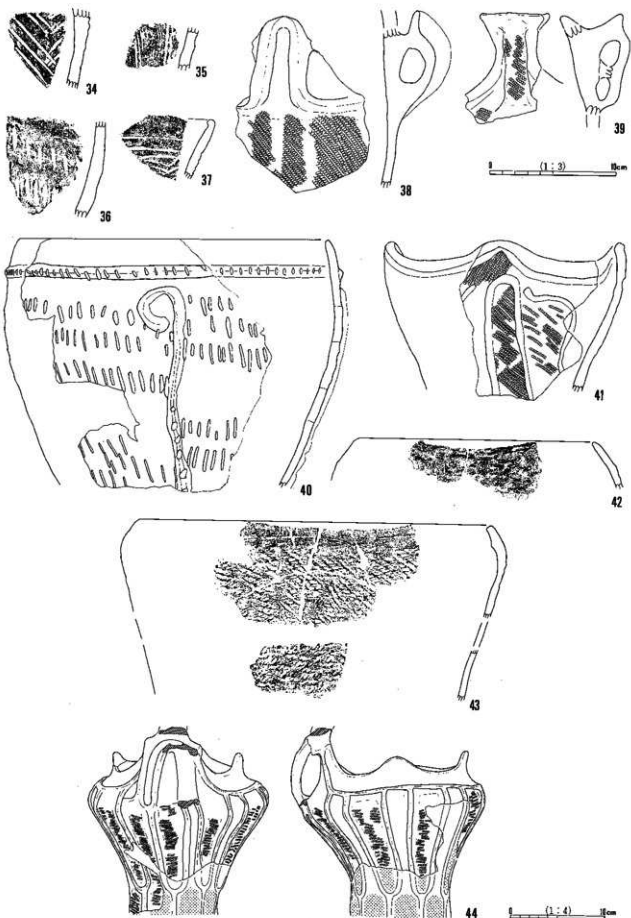
中期の土器は圧痕隆帯文が見られる土器と、加曾利E式が見られ、1~10・36・40は圧痕隆帯文系土器(綿田1983・1988)、11~30・32・38・39・41・44は加曾利E式である。31・43は大粒のLR単節縄文で、同一個体と思われる。35は歯状工具による条線がみられ、本遺跡では出土例が少ない。38は双耳壺の把手である。40は圧痕隆帯に雨垂状沈線が付けられており、曾利系または唐草文系の影響であろう。隆帯には鋭利な工具による刻みのような圧痕があり、1~9の圧痕隆帯とは趣を異にする。44は4単位の波状口縁で、1箇所に二本の橋状把手が付くが、上端は欠損している。口縁部は隆帯で区画された無文帯があり、胴部は微隆起帯で区画し、LRの縄文を施した後、微隆起帯の縁をなでる。胴部上半の区画は



第39図 SK 333と出土土器(1)



第40圖 SK 3 3 出土土器 (2)



第41図 SK 3 3出土土器(3) (34~39は1/3、40~44は1/4)

交互に無文部を残し、胴部下半は全区画に縄文が施文されたものと推定される。37は後期堀之内式の深鉢Aである。

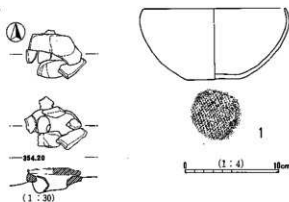
遺構の時期：縄文時代後期以降の土器がわずかに出土しているが、いずれも遺構の上部より出土しており、後世の混入と考えられる。出土遺物より加曾利EIV式期（長野県史編年中期後葉IV期）である。

#### SK47（第42図）

遺構の構造：IIN25・IIS05グリッドに位置する。

約20cm×40cmの不整形な方形の掘り込みの縁に10cm～20cm大の礫をまばらに配置し、その上に蓋のように平石が置かれていた。土坑の北西隅には完形の楕形の土器が伏せた状態で出土した。他に出土遺物はない。覆土は暗褐色土の単層で、やや砂質である。

出土遺物：1は口径15.5cmの楕形の土器である。器面は丁寧に磨かれた無文であり、暗褐色から褐色である。底部に目の細かい網代痕が見られる。後期堀之内2式から加曾利B1式併行のものであろうか。



第42図 SK47と出土土器

#### SK52（第43図）

遺構の構造：IIN03グリッドに位置する。試掘トレンチの壁面で落ち込みを確認した。南西側はトレンチにより削平されたため詳細は不明である。方形のプランが想定され、残存部では一辺約140cmで、深さ60cmである。底面には地山の礫が露出している。覆土は3層に分層され、2層上部から1層にかけて大きな礫がまとまって出土した。1層には骨片が検出され、3層上部より形状を留めた獣骨がまとまって出土した。2層に黄褐色土がブロック状に混じっていることから短期間での埋め戻しが行われたものと思われる。骨はすべてニホンジカで頬骨・上顎骨が出土した。骨以外に出土遺物は見られない。なお、骨の詳細については第3章7節の報告を参照していただきたい。

遺構の時期：出土遺物無く、覆土の特徴より縄文時代の遺構と判断した。

#### SK53（第43図）

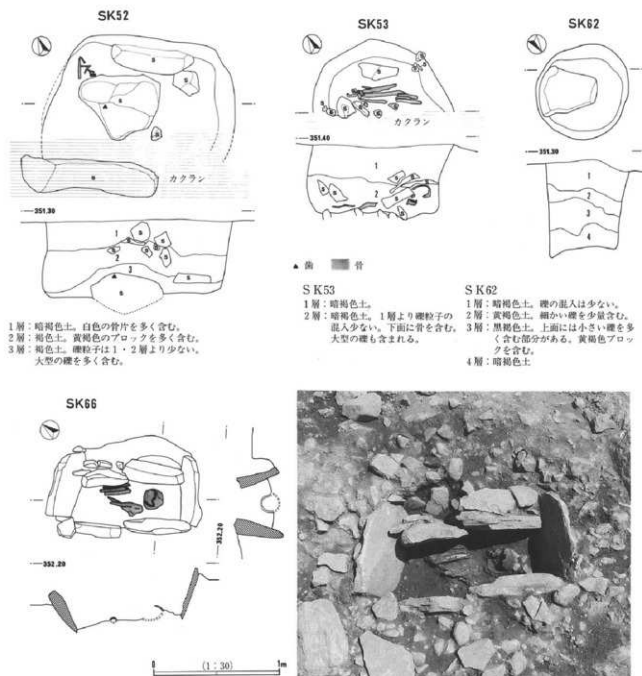
遺構の構造：IIN03グリッドに位置する。南西側は試掘トレンチにより削平されており、全体の形状は不明である。セクションラインでの差渡し110cm、深さ約50cmである。覆土は2層に分層され、下層に大形の礫と骨が出土した。土坑底部中央から出土した人骨は脛骨・腓骨・大腿骨・下顎骨であるが、遺存状況が悪く、埋葬形態を確認することはできないが、屈葬であろうと推定された。なお、骨の詳細については第3章6節を参照していただきたい。

出土遺物と遺構の時期：骨のほかに、前期初頭の土器4片と時期不明無文土器2片が出土しているが、いずれも小片であり、遺構に伴うものではないと考えられる。覆土の特徴より縄文時代の遺構と判断した。

#### SK62（第43図）

遺構の構造：IIN03グリッドに位置する。

北東側は大部分が試掘で削平されており、わずかに底面を残すのみである。残存部より直径70cmの円形、深さ70cmと推定される。覆土は4層に分層され、3層中には黄褐色土ブロックが含まれており、短期間で



第43図 SK 5 2 ・ 5 3 ・ 6 2 ・ 6 6

の埋め戻しを想定させる。土坑底部には大きな礫があり、その直上の4層中より獣骨が集中して出土した。獣骨の鑑定はできなかった。試掘トレンチの対峙する壁面には、SK 5 2 ・ SK 5 3 があり、近接もしくは重なる位置関係にある。

出土遺物と遺構の時期：堀之内式土器1片、後期無文土器1片が出土したのみである。出土遺物と覆土の特徴から縄文時代後期の遺構と判断した。

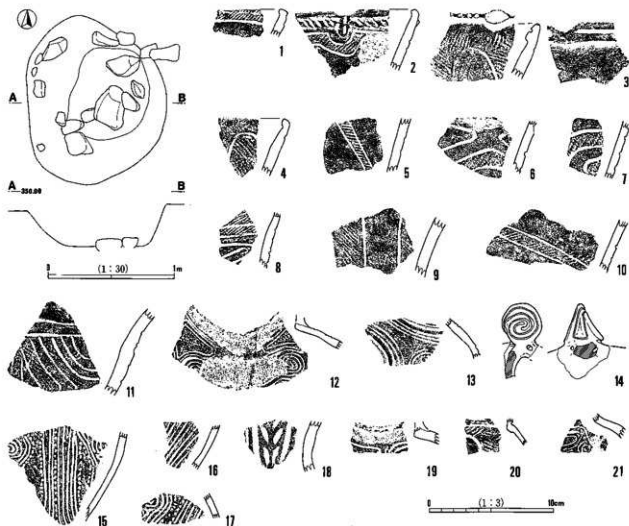
**SK 6 3** (第44図)

遺構の構造：II N 01 グリッドに位置する。長径130cm、短径110cm、深さ69cmの不整な楕円形を呈する。覆土は暗褐色土の単層で柔らかい土である。骨粉を多量に混じており、炭化物をわずかに含む。覆土下部に人頭大の礫が数点出土した。地山にも大きな礫が含まれており、人意的なものか否か判断できない。

出土遺物：ほとんどが後期前半の土器であるが、前期初頭の土器を数点混じる。土器の他にビエス・エスキュー1点、スタンプ形石器1点、敲石1点が出土した。他に、イノシシの上顎骨が1点出土した。

第44図2～10・15～18は深鉢A、11は深鉢B、12～14・19・21は注口土器である。1・20は器形不明である。2の口縁部は「8」字貼付文の上を内側に押し窪めている。3は逆U字状の沈線で区画した後、区画外にL Rの縄文を施文する。口唇部は細かな刻みと、内面の沈線が途切れる所が深んでいる。3・4・9は胎土と縄文が類似しており、同一個体の可能性がある。これらは、中期末から後期初頭の文様要素を示しているが、口縁部形態から判断して、堀之内式に並行するものであろう。12は注口土器の把手が刺されたもので、2～3本の並行沈線による区画内に、縄文と十字の円形刺突列が見られる。13は沈線と並行した低隆起線間に縄文と刺突列が見られる。12・13とも集合沈線と刺突列により文様が描かれており、15～17に共通する文様要素を持つ。19・21にも並行沈線と刺突列が認められ、12・13と同系列の文様構成をなすものと思われる。また、21は第45図13（SK65）と胎土と文様が酷似しており、同一個体と思われる。15～17は同一個体と思われ、集合沈線と刺突列が特徴的な土器で、第45図15（SK65）と同一個体であろう。ちなみに、本遺構出土の小破片が第45図15と接合する。18は矢羽状の太い沈線が見られ、口縁部付近の破片である。15～18は南三十稻場式であり、本遺構出土土器は堀之内2式を主体とする。

遺構の時期：出土遺物より堀之内2式の時期と判断される。

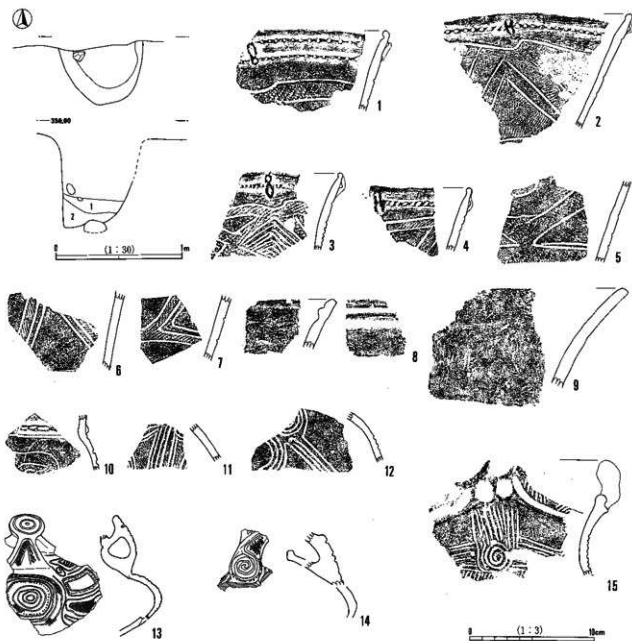


第44図 SK63と出土土器

SK65 (第45図)

遺構の構造：IIN01グリッドに位置する。北側は調査区外であるが、短径68cm、深さ37cmの楕円形と推定される。覆土の詳細は不明。

出土遺物：遺物は土器のみで石器は出土していない。第45図1～7・15は深鉢A、8・10は深鉢B、9は無文土器、11～14は注口土器である。10の頸部には棒状工具の端部による刺突列がある紐線が貼付される。11～14は並行沈線の区画内に縄文と刺突列が施されており、SK63の第44図I2と同一個体と思われる。13は胴部を楕円形に割りぬき、袋状の突起を貼り付けている。割りぬき部は注口部を含めて4箇所と推定され、上面形はおよそ方形になる。類例は中野市栗林遺跡第7号配石に見られる。15は南三十稻場式土器の大形破片で、SK63出土の破片と接合する。本遺構で堀之内1式は出土せず、すべて堀之内2式であることから、上越地方との土器の平行関係を考える上で重要である。



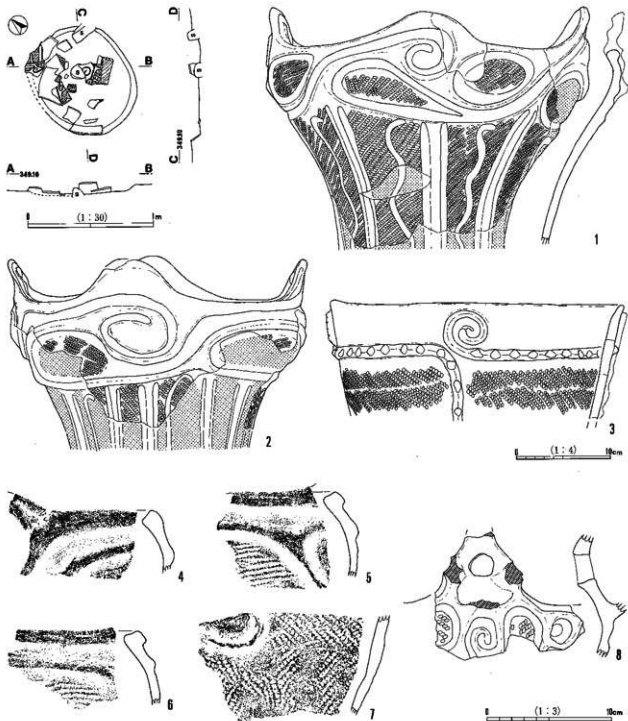
第45図 SK65と出土土器



## SK 77 (第46図)

遺構の構造と遺物出土状況：IIM24グリッドに位置する。90cm×80cm、深さ10cmの楕円形を呈する。覆土は暗褐色土の単層で、炭化物をわずかに含み、締りがなく柔らかい。土坑底面よりわずかに浮いて大形の土器破片が面をなして出土した。出土状況より1～8は埋没時の一括遺物であり、1～3は1/2以上の残存率である。

出土遺物：図示した遺物の他に土器小片約50点、ピエス・エスキューユ1点、磨製石斧1点、凹石1点、石鏃未製品1点が出土した。縄文時代後期、弥生時代後期の土器片が数点出土しているが、図示した土器以外は小破片で混入したものであろう。



第46図 SK 77と出土土器 (1～3は1/4、4～8は1/3)

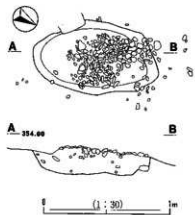
1・2は4単位の波状口線のキャリバー形深鉢である。1の口縁部文様帯は隆帯と幅広の沈線により構成され、渦巻文と楕円文を組み合わせた横に流れるようなモチーフを描く。また、波頂部内面に幅広の沈線で蕨手状の渦巻文が描かれる。胴部文様帯はRLの地文縄文に垂下する2本の平行沈線と蛇行沈線で構成されており、2本の並行沈線間は無文である。2の口縁部文様帯は指ナエによる沈線と隆帯とで描かれる。楕円文から伸びる渦巻文を入り組ませた構成となっており、楕円文内はLRの縄文を縦位または横位に施文し、その周りをナデ消す。胴部文様帯はLRの縦位の縄文と垂下する蕨手文状の沈線により構成される。さらに、縦位区画の一つおきに垂下する蕨手文が描かれていると推定される。波頂部の裏側には沈線による渦巻文が描かれており、その一端が口唇部の沈線へと伸びている。3は口縁部の蕨手状渦巻から横に伸びる圧痕隆帯が1/4周し垂下する。この圧痕隆帯は4単位に配置されている。胴部には隆帯貼付後RLの縄文が横位に施文される。縄文は密接ではなく無文の空間が認められる。4～6は2と同一個体で接合する。7は渦巻状と思われる隆帯の一部が見られる。地文はRLの縄文で、破片上部では横位に、下部では縦位に施文する。8は三又の橋状の装飾が見られ、その下に蕨手文が垂下しているのであろう。同一個体と思われる口縁を合わせると、口縁の約1/2が残されている。

遺構の時期：出土遺物より、本遺構は中期加曾利EⅢ式併行期であると考えられる。

#### SH05 (第47図)

遺構の構造：基本土層Ⅲ層下部からⅣ層上面で小礫のまとまりが検出された。礫は直径3cm～4cmのものが多く、50cm×80cmほどの範囲に敷き詰められている。本来の礫面は方形で、北隅の礫が攪乱されたようにも見うけられる。敷き礫の下方には土坑があり、敷き礫の範囲が土坑にはほぼ重なっていることから関連する施設と判断した。礫は平坦に敷き詰められており、所謂玉砂利で地山の礫とは異なる。土坑は100cm×60cmほどの楕円形で、約20cmの深さである。覆土は暗褐色土の単層で、底面付近で5mmほどの褐色土粒を含む。焼土・炭化物は見られない。

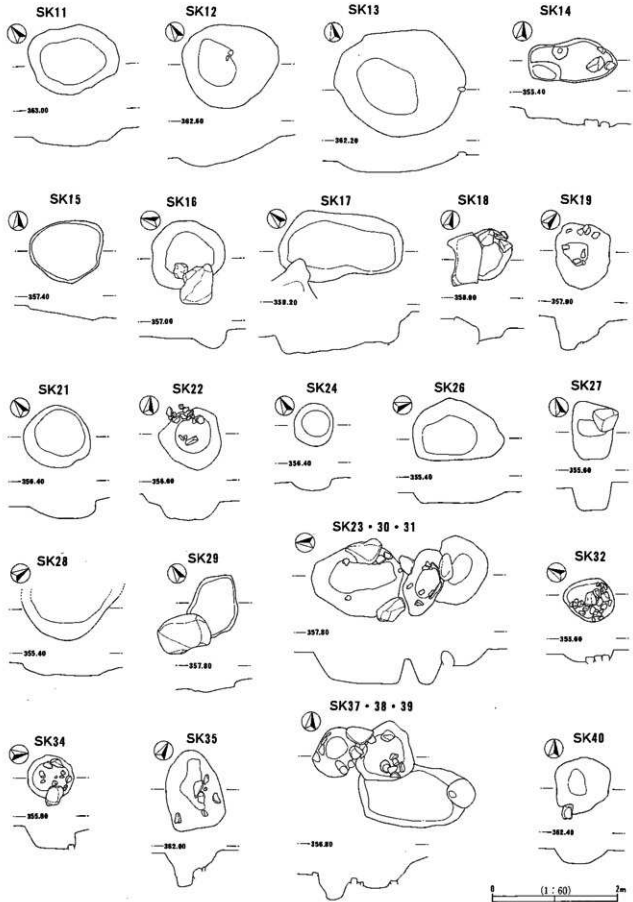
出土遺物と遺構の時期：礫面で遺物は見られない。なお、調査時の記録によると土坑覆土中より縄文時代後期の土器片が少量出土したとあるが、整理段階で遺物は確認できなかった。また覆土中に小骨片が1点出土した。覆土の特徴と調査時の遺物観察から縄文時代後期の遺構と判断した。



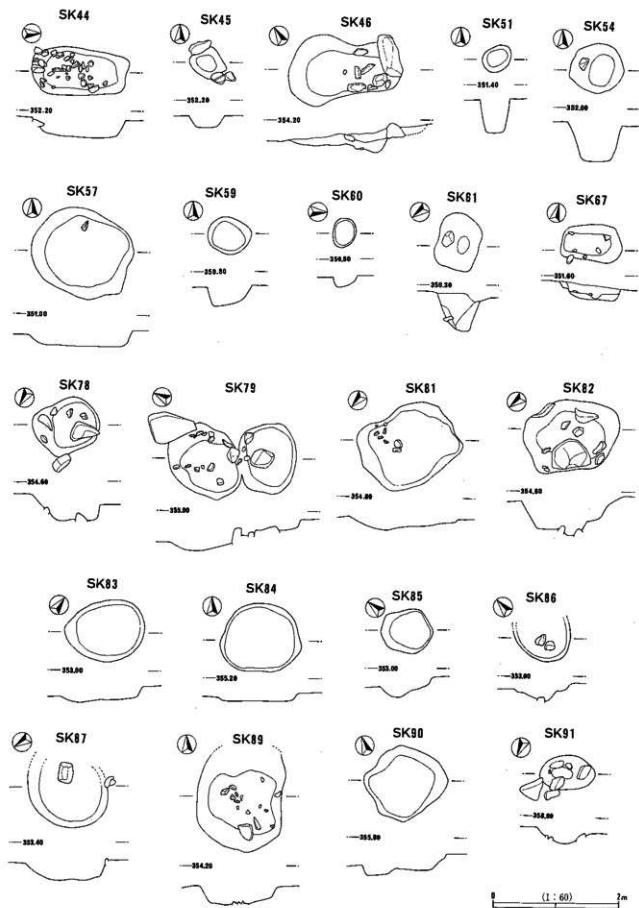
第47図 SH05

#### その他の土坑 (第48図～50図、第2表)

本遺跡では89基の土坑が検出され、その多くは縄文時代の所産である。出土遺物が無く、覆土のみから時代を判断したものもあるが、58基が縄文時代の土坑と思われる。縄文時代に属する土坑は住居址が集中する東側の微高地上に限られる。これらの土坑は中期から後期が中心となるが、早期後半から前期中葉と思われる土坑も見られる。断定はできないが、SK13・SK43・SK53・SK78は早期から前期の可能性があり、特にSK13は鶴ヶ島台式の時期に比定される可能性が高い。SK61は加曾利B1式期と思われ、後期の土坑では新しい時期のものである。晩期の土坑は確認されない。



第48図 縄文時代の土坑 (1)



第49図 縄文時代の土坑（2）

SK13



SK18



SK30



SK37



SK38



SK44



SK57



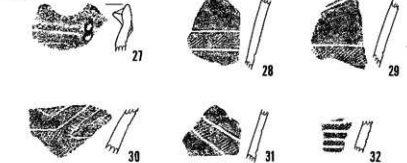
SK61



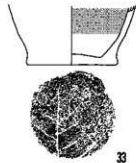
SK79



SK89



SK90



0 (1:3) 15cm

第50図 縄文時代の土坑出土土器

第2表 土坑一覧表

遺構名	位置	形状	時期	出土遺物	縦×横(cm)	深さ(cm)	備考
SK02	VB01	楕円形	不明	土師器甕	67×45	33	
SK03	VB01	不整長方形	不明	なし	100×77	14	
SK04	VB01	楕円形	不明	なし	72×48	27	
SK06	VB01	不整円形	不明	青磁	93×87	22	
SK07	VB06	楕円形	不明	なし	63×45	17	
SK08	VB06	長楕円形	不明	なし	97×30	10	
SK09	VB01	長方形	不明	弥生後期・土師器	83×60	37	
SK11	III14	楕円形	縄文	なし	145×110	28	
SK12	III13	楕円形	縄文	なし	152×132	18	
SK13	III13	楕円形	縄文	鴨ヶ島台式3片、中期1片	210×165	35	
SK14	II T08	楕円形	縄文	なし	140×65	10	
SK15	II T08	不整円形	縄文	なし	115×100	11	
SK16	II T08	不整円形	縄文	縄文土器4片	120×110	45	
SK17	II T04-06	長楕円形	縄文	縄文土器11片	195×100	28	
SK18	II T04	楕円形	縄文後期	堀之内式1片、後期無文5片	85×50	36	
SK19	II T04	楕円形	縄文	縄文土器3片	100×85	54	
SK20	IO23	楕円形	縄文早期	鴨ヶ島台式の完形土器	141×135	30	
SK21	IO23	不整円形	縄文	なし	105×100		
SK22	IO23	不整円形	縄文	縄文土器6片他	100×95	33	
SK23	II T04	楕円形	縄文	なし	110×(80)	24	
SK24	IO23	不整円形	縄文	なし	65×63	16	
SK25	IO18	長方形	平安	土師器杯・甕他	170×95	24	
SK26	IO17	楕円形	縄文	なし	145×98	12	
SK27	IO17	不整方形	縄文	なし	87×65	36	
SK28	IO17	不整円形	縄文	なし	155×(150)	17	
SK29	II T04	楕円形	縄文	なし	100×75	14	
SK30	II T04	楕円形	縄文後期	中期2片、後期3片、無文・縄文19片	145×115	47	
SK31	II T04	長楕円形	縄文		100×65	40	
SK32	IO17	楕円形	縄文		82×70	7	
SK33	III13-18	不整三角形	縄文中期	縄文中期土器多量・上部より縄文後期4片、弥生土器・平安時代土師器須臾器数点。	215×190	34	
SK34	IO22	不整円形	縄文		73×71	21	
SK35	III13	楕円形	縄文		125×93	29	
SK36	II T02	不整円形	弥生後期	弥生土器3片、縄文早期・中期・後期土器	133×112	30	
SK37	II T08	不整円形	縄文	縄文38片、早期3片	93×90	34	
SK38	II T08	長楕円形	縄文後期	縄文後期	80×48	42	
SK39	II T08	長楕円形	弥生後期	弥生土器(甕・高杯)、縄文早期後期	182×100	27	
SK40	III13	不整円形	縄文	なし	90×80	12	
SK41	II T13	不整円形	不明	なし	80×65	96	片面に石が積まれている。
SK42	II T07	不整三角形	不明	堀之内式か中袋1袋、弥生後期1片、縄文早期4片	240×170	18	
SK43	II T02	長楕円形	不明	繊維を含む縄文又は無文15片、縄文後期1片、平安土師器1片	145×100	63	
SK44	II N10	長方形	縄文	堀之内式7片、後期無文22片、縄文中期1片、弥生後期1片	150×72	14	
SK45	II N10	不整方形	縄文	なし	50×45	19	
SK46	II N25	不整楕円形	縄文	なし	180×75	18	
SK47	II N1-III5	楕円形	縄文後期	小形鉢形土器	60×50	10	
SK48	II N01	不整円形	不明	堀之内式3片、無文6片	55×54	16	
SK49	II N03	楕円形	平安	縄文早期11片、平安土師器甕、杯各1片	(140)×(100)	37	
SK50	II N03	楕円形	不明	なし	(105)×75	33	
SK51	II N03	楕円形	縄文	なし	47×38	52	
SK52	II N03	方形	縄文	なし	(145)×(110)	53	
SK53	II N03	楕円形	縄文	前期初頭4片、時期不明無文2片	(115)×(90)	68	
SK54	II N02-03	円形	縄文	時期不明縄文土器8片	80×75	68	

遺構名	位置	形状	時期	出土遺物	縦×横(cm)	深さ(cm)	備考
SK55	II N03-08	楕円形	不明	編織を含む縄文3片、後期11片、無文約20片	350×270	17	
SK56	II N07	不整楕円形	不明	編織を含む縄文4片、中期後半5片、中期末1片、後期7片、無文約40片、埴輪片、土師器杯1片	280×235	46	SK58・64に切られる
SK57	II N02	楕円形	縄文後期	編織土器5片、縄文中期末1片、後期12片、無文土器20片	160×130	31	
SK58	II N07	楕円形	不明	なし	80×65	52	SK56を切る
SK59	II N07	楕円形	縄文	時期不明の縄文土器1片	65×57	35	
SK60	II N07	楕円形	縄文	なし	48×40	19	
SK61	II N02	楕円形	縄文後期	縄文前期1片、中期1片、埴之内式1片、加曾利B1式4片、後期無文土器10片	90×65	68	
SK62	II N03	円形	縄文後期	埴之内式1片、後期無文土器?	75×70	44	
SK63	II N01	不整円形	縄文後期	縄文後期多数、編織を含む縄文4点	130×110	69	SK65の土器と接合
SK64	II N08	円形	不明	なし	75×72	72	SK56を切る
SK65	II N01	長楕円形	縄文後期	埴之内式27片、後期無文10数点、早期1片	-×68	37	
SK66	II N09	長方形	縄文	無文土器4片	120×60	30	石椁蓋
SK67	II N04	楕円形	縄文	縄文中期末から後期初頭1片	95×55	23	
SK68	II W14	楕円形	不明	なし	165×134	17	
SK69	II W14	不整三角形	不明	なし	(100)×92	11	
SK70	II W14	楕円形	不明	なし	45×35	13	
SK71	II W14	不整円形	不明	なし	68×66	10	
SK72	II W14	不整楕円形	不明	なし	105×74	29	
SK73	II W14	不整円形	不明	なし	46×43	2	
SK74	II W18	長楕円形	不明	なし	100×57	12	
SK75	II W18	楕円形	不明	なし	90×73	12	
SK76	II W13	長楕円形	不明	なし	144×77	25	
SK77	II M24	不整円形	縄文中期	縄文中期多数、縄文後期9片、弥生後期2片	90×80	10	
SK78	II O16	楕円形	縄文後期	縄文中期後半8片、後期3片、縄文中期-後期の無文12片	100×79	28	
SK79	II O17	楕円形	縄文	縄文早期後半4片、中期1片	130×105	26	
SK80	II O17	楕円形	縄文	なし	112×90	20	
SK81	II O16	楕円形	縄文	なし	155×120	9	
SK82	II O16	楕円形	縄文	なし	152×110	48	
SK83	II O16	楕円形	縄文後期	縄文早期1片、中期1片、埴之内式5片、後期無文約20片	127×97	26	
SK84	II O17	楕円形	縄文	なし	125×109	13	
SK85	II O16	不整円形	縄文	編織土器6片、中期1片、時期不明4片	75×70	19	
SK86	II O17	楕円形	縄文	なし	(110)×90	19	
SK87	II O17	楕円形	縄文後期	輪ガ島台式4片、編織を含む縄文1片、埴之内式5片(すべて小片)	147×(125)	29	
SK88	II T23	楕円形	古墳	高杯、帯籠	370×260	45	
SK89	II O11	楕円形	縄文後期	縄文早期後半14片、編織を含む縄文6片、埴之内式9片、後期他無文約50片	(180)×135	52	
SK90	II O16	楕円形	縄文後期	縄文早期1片、中期2片、後期7片、中期後期の無文土器約30片	120×110	34	
SK91	II T10	楕円形	縄文	なし	85×55	24	

SK01・05・10は欠番

#### 4 石棺墓とその遺物

##### SK66 (第43図)

遺構の構造：平石を長方形に囲んだ石棺墓である。床面で長軸85cm、短軸45cm、検出面からの深さ約30cmである。厚さ5cm～10cmで約40×50cmの鉄平石6枚を用いており、隙間を覆うように小形の平石が置かれている。東側の長辺の石は掘り方から離れて内側に傾いていることから、土圧により平石が内側に押し込まれたものと思われる。床面に特別な施設は確認されなかった。石棺内からは人骨が出土したが、遺存状況は良好ではない。発掘時の所見では、南東側の頭蓋骨は上を向いており、顔面部分は残存していない。頭蓋骨の北西側に大腿骨、脛骨、橈骨がまとまって出土した。石棺の規模から、埋葬もしくは再葬の可能性が考えられる。覆土は暗褐色土の単層で、小礫を含み、やや砂っぽく締まりがない土である。

出土遺物：成人人骨が出土した。土器は縄文時代中期～後期の無文の土器小破片が4点、二次加工を有する剥片1点、剥片3点が出土したのみで、いずれも覆土に混入したのと思われる。なお、出土人骨の詳細については第3章の茂原信生氏の報告を参照していただきたい。

遺構の時期：出土遺物と覆土の特徴から縄文時代と判断され、善光寺平では石棺墓が縄文時代後期加曾利B式以降に確認されており、本遺構は縄文時代後期加曾利B式以降のものと思われる。

#### 5 焼土址とその遺物

##### SF04 (第51図)

II O19グリッドに位置する。60cm×45cm、深さ20cmの楕円形を呈し、壁面と底面が焼けて赤色化した焼土坑である。周辺に15基のピットが集中しているが、焼土坑との同時性は特定できず、配置に規則性は認められない。本遺構が住居内の炉である可能性もあるが、竪穴の掘り込みあるいは床面は確認されず、柱穴も特定できなかった。覆土中に土器片が重なって出土しており(第51図1・2)、いずれも中期末葉(加曾利EIV式)であり、遺構の時期は中期末葉と判断される。

##### SF06 (第51図)

II T08グリッドに位置する。95cm×80cm、深さ14cmの不整な楕円形を呈する焼土坑である。検出面でドーナツ状に焼土が確認されたが、焼土の状況が不明な点が多く、火床面がどこであったか確認できない。覆土は2層に分層され、1層は焼土粒を多量に含む暗褐色土、2層は焼土がブロック状に詰った赤褐色土で、部分的に褐色土を含む。いずれも炭化物は含まれない。出土遺物は少なく、覆土の状況から縄文時代の遺構と判断したが、詳細な時期は不明である。

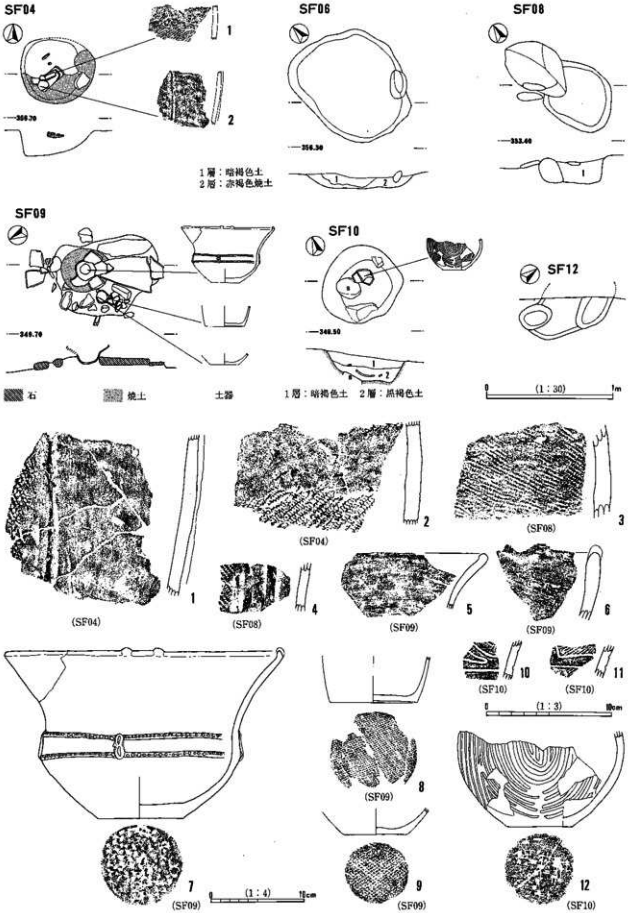
##### SF08 (第51図)

II I21グリッドに位置する。60cm×50cm、深さ17cmの楕円形を呈する。焼土の範囲は図示できないが、壁面と底面が焼けて赤色化した焼土坑である。敲石2点と中期の土器が出土しており(第51図3・4)、形状と規模の類似から、SF04と同じ性格の遺構であろう。遺構の時期は中期末葉と考えられる。

##### SF09 (第51図)

遺構の構造：II N01グリッドに位置する。80cm×60cmの火床面に、ほぼ完形の深鉢B(第51図7)が設置されており、その周囲に板状の石が敷かれている。敷石住居の炉の可能性もあるが詳細は不明である。





第51図 焼土址と出土土器 (1~6、10・11は1/3、7~9・12は1/4)

周辺より、打製石斧1点と土器とニホンジカの後頭骨が出土した。

出土遺物(第51図5～9)：7は深鉢Bで、わずかに欠損するがほぼ完形である。口縁には2個1対の瘤状の小突起が付く。胴部に刻みがある2条の紐線と、5個の「8」字貼付文が巡っている。底部には縄代痕が確認されるが、全体に押しつぶされており、縄代の編み方は解読不能である。紐線よりも上部の器面の風化が進んでおり、二次焼成による劣化であろう。また、灰と思われる白いパウダー状のものが部分的に付着している。特に上半部に付着が著しい。8・9は底部に細かな縄代痕が認められ、部分的に灰と思われる白いパウダー状のものが付着する。8は深鉢A、9は深鉢Bの底部と思われる。これらの他に打製石斧が1点出土した。

遺構の時期：焼土に設置された土器より、堀之内2式の時期の遺構と判断した。

#### S F 1 0 (第51図)

II N 01グリッドに位置する。直径60cm～65cm、深さ10cmの円形の焼土坑である。壁面と底面が焼けて赤褐色化しており、底面には深鉢Bの胴下半部の大形破片が出土した。

出土遺物：第51図12は土坑底面より出土したもので、胴下半部の1/2が残存している。弧状の幅広の沈線を重ね、波紋状の文様が器面全体に展開する。破片は二次焼成を受けたため、灰褐色に変色したのもあり、灰と思われる白色のパウダー状のものが付着している。他に、中期2片、後期堀之内式破片が出土した。

遺構の時期：出土遺物より後期前葉と判断される。

#### S F 1 2 (第51図)

II T 05グリッドに位置する。75cm×40cm(推定)、深さ19cmの不整な楕円形を呈する。焼土が確認された遺構であるが、焼土の状況が不明な点が多く、火床面があったか否か確認できない。出土遺物は少なく、覆土の状況から縄文時代の遺構と判断したが、時期は不明である。

## 6 遺物集中区とその遺物

遺物集中区は整理段階で認識したものである。遺構外の遺物の取り上げは8m×8mのグリッド単位で行われており、特に遺物が集中するグリッドを遺物集中区とした。その結果、中期に3箇所、後期では5箇所の遺物集中区を認識した(第52図)。ただし、遺物集中区2と遺物集中区3では中期と後期の集中グリッドが重複しているため、視覚的には6箇所の遺物集中区になる。認識の手順は、各時期の土器片数が相対的に多いグリッドを遺物集中区と認識し、石器点数も土器と同様に多いことを確認した。中期では50点、後期では100点以上のグリッドを遺物集中の目安とした。なお、第7表に出土地点別の土器点数を示したが、中期と後期の数値は無文または縄文のみの土器片を除き、時期比定可能な有文土器を数えた。また、古墳墳丘出土など、グリッド単位で取り上げられていない遺物が多量にあることを確認しておきたい。また、住居址があるグリッドでは住居址確認前の出土遺物はグリッド単位で取り上げているため、住居址覆土中の遺物も含まれていると考えられるが、機械的に遺構外のグリッド毎の遺物とした。

遺跡全体の包含層の残存の状況や調査精度の違いにより、本来の分布密度と異なることが十分考えられるが、ここで認識した遺物集中区を分析の単位として捉えておきたい。これらの集中区には、遺物廃棄ブロックと捉えられるものもあろうが、全ての集中区についてそれを検証するためのデータを得ることはできなかった。

## 遺物集中区1 (第52図、第53～55図1～73)

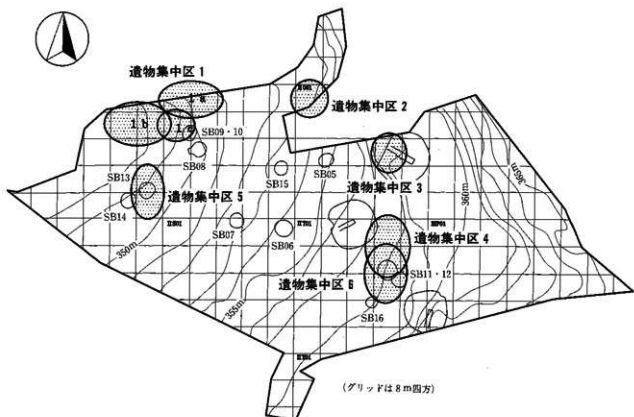
SB09・10の北側と西側に帯状に遺物が多いグリッドが連なる。これらを遺物集中区1とし、便宜的にa・b・cの3群に区分した。これらのグリッドからは後期以外の土器も出土しているが、土器の集中は後期に限られるため、本項では後期土器のみ提示し他の土器は遺構外の遺物の項で提示した。主体は堀之内2式土器であるが、他の集中区に比べ加曾利B1式が比較的多く出土していることが注意される。

遺物集中区1aはIIN01・IIN02グリッドを中心とし、後期の土器が集中する。当該グリッド内にSF09・10、SK63・65などの後期の遺構がある。上記2グリッドの出土遺物は土器(中期・後期)36kg、石器・石核53点である。

遺物集中区1bはIIM09・IIM10グリッドを中心とし、後期の土器が集中する。該当グリッド内に遺構は認められない。上記2グリッドの出土遺物は土器(中期・後期)43kg、石器・石核64点である。

遺物集中区1cはIIN06グリッドを中心とし、後期の土器が集中する。SB09があるグリッドのため、本来SB09の覆土内の遺物を含むと思われるが、その区分は不可能であるため、SB09確認以前の出土遺物は遺物集中区の遺物として取り扱った。上記1グリッドの出土遺物は土器(中期・後期)25kg、石器・石核16点である。

出土遺物(第53～55図1～73)：1・5～13・16・17・44～48は深鉢A、14・15・18～29・31は深鉢B、3・30・32～42は注口土器、43は浅鉢で後期前葉。2・49～57は無文土器で後期前葉～後期中葉。62・63は深鉢Aの底部である。4・64～73は後期中葉加曾利B1式である。58～61は器種不明であるが、後期初頭～中葉の土器と思われる。58は節歯状工具による細い条線が見られる。59は単節縄文の上に格子目状の沈線が引かれており、波状口縁である。60は楕円状の区画と縦位の波状沈線が描かれ、波状口縁の可能性があり、口縁部形態は異なるが、北陸地方の後期初頭に類似したモチーフが少数みられる<sup>(31)</sup>。61は格子



目状の沈線が見られる。

深鉢Aでは、5～7の口縁内面の沈線が本遺跡では稀な例である。11は4条の沈線間のLR縄文と、変形した「8」字貼付文が見られる。12は2条の併行沈線間に鎖状沈線が見られ、比較的厚手大形で褐色を呈しており、本遺跡より出土する鎖状沈線を施した土器の大半が薄手で黒褐色を呈するのと趣を異にする。16はSB09・SB10のものと同一個体と思われる（PL19参照）。44～48は深鉢A3類に分類され、南三十稻場式に比定されるものである。46～48は黒褐色～灰褐色で第45図15（SK65）と胎土・色調が似ており、同一個体の可能性がある。

深鉢Bでは、口縁部に沈線があるものと、ないものが見られる。前者では18～20・22のように1条の沈線とその下にキザミを施すものが大半であるが、21のように2条の沈線とその上下にキザミを施した例も見られる。

注口土器では、3は口縁部に内径9mmほどの短い注口を有する。32～34・37のように竹串状の細い工具で突いた刺突列を特徴としたもの、35の帯状の充填縄文や、39・40の沈線のみでモチーフを描いたもの、36の細隆起線が見られるものなどがある。38は沈線の区画内外に棒状工具による円形刺突が充填される。

無文土器の器面調整では、2は指ナデのみ、49～52は指ナデもしくはケズリ調整後ナデ調整をしたもの、53はケズリ調整のみ、54～56は全面にナデまたはミガキ調整がなされる。なお、51・52は口縁形態が深鉢Aに類似しており、本遺跡の無文土器の中にわずかに見られる。54は小突起状の波状口縁である。

#### 遺物集中区2（第52図、第55図74～89）

II O01グリッドを中心とし、中期と後期の土器集中である。グリッド内に遺構は認められない。該当する1グリッドの出土遺物は、土器（中期・後期）34kg、石器・石核38点である。

出土遺物（第55図74～89）：74～76は中期後葉から末葉、77は中期前葉、他は後期前葉の土器である。78～80は深鉢A、81・82・84・85は深鉢B、86から88は注口土器である。78は胴下半部に屈曲がある深鉢A2類、80は深鉢A3類である。84は頸部から口縁部が短い、文様帯が頸部以下にあり、頸部には「8」字貼付文が見られる。87・88は注口部の接合法が明瞭に観察される。

#### 遺物集中区3（第52図、第56図90～112）

II O14グリッドを中心とし、後期の遺物が集中する。該当グリッドには大室23号墳が重なっており、墳丘から多量の土器が出土した。墳丘内の遺物は古墳築造時に移動しているため、集中区の遺物からは除外した。なお、墳丘よりも下層から出土し「23号墳下」と注記された遺物は遺物集中区3に含まれると理解した。なお、後期以外の土器は遺構外の遺物の項で提示した。該当1グリッドおよび23号墳下として取り上げた出土遺物は、土器（中期・後期）29kg、石器・石核50点である。

出土遺物（第56図90～112）：90～92・94～103は深鉢A、104～108は深鉢B、109～112は注口土器、93は無文土器である。いずれも後期前葉で、112のみ後期中葉であろう。

深鉢Aでは、90・94・95・101・102はA1類、他はA3類で胴部にくびれがある器形と思われる。90～92は丁寧に磨かれた薄手の黒褐色を呈する小形の深鉢で、特に90・92は残存率が高く器形を復元できる。90は口縁部に、浅い刻みがある4本の細い紐線が走り、その上に円形の刺突がある細長い貼付文が見られる。胴部文様帯は上下端が沈線で区画され、半円文と三角文を組み合わせ、その間をLRの縄文で充填する。文様は貼付文と対応して4単位で一周する。全体に黒褐色で、器厚が2mm～4mmである。91は胴部がくびれ、器厚は2mm～3mmと非常に薄く、口唇部に上面が平坦な8字状の小突起が付く。突起は1つしか残存していないが、3単位の波状口縁の頂部に小突起が付けられていると推定される。また、小突起直下

に直径5mmほどの丸い孔が貫通している。口縁部には8条の沈線が引かれ、沈線間に斜めの細い刻みのようなものが観察される部分もあるが、器面の状態が悪く判然としない。波頂部に対応する位置で沈線は区切られ、鎖状沈線が垂下する。胴部では2列の鎖状沈線が円文と絡み合い横位に展開する。器面は丁寧に磨かれており全体に黒褐色で、胴下半部が一部褐色である。92は胴部がわずかにくびれ器厚は2mm～3mmと非常に薄く、口唇部には8字状の小突起が付く。口縁部に、刻みがある3本の細い紐線が巡り、小突起に対応する位置に突起が3つある細長い貼付文が見られる。胴部文様帯は上下端が沈線により区画され、三角文と半円文を組み合わせ、その間LRの縄文で充填している。底部には網代痕が見られる。胴部と底部は接合しないが、出土地点と胎土の類似から同一個体と判断した。96～98・100は口縁内面の形状が特異で、幅広の有段部を持つ。本遺跡では類例が少なく、遺構外の第66図45などが類例であろう。101は口縁に瘤状に連なる突起が見られ、円孔が貫通している。刻みがある2本の紐線と「8」字貼付文が見られ、胴部にはLRの縄文が施文される。口縁内面には2条の沈線が引かれ、深鉢Aでは稀な例である。103は縦位の綾杉状沈線がみられる南三十稻場式であろう。

#### 遺物集中区4 (第52図、第57図113～123)

II T04・II T09グリッドを中心とした後期の土器の集中を遺物集中区4とする。II T04グリッドにはSK18・SK30などの土坑が存在する。中期の土器が集中する遺物集中区6と中心をずらして重複する部分があるため、該当グリッドには中期の土器も多い。中心となるII T04グリッドの出土遺物は、土器(中期・後期)13kg、石器・石核24点である。

出土遺物(第57図113～123)：113～115は沈線の区画内に無節の縄文が施文される。116は深鉢Aの口縁部であろうか、117・118は深鉢A3類で南三十稻場式、119～123は深鉢Bで、拓本では見ずらいがいずれも口縁部には沈線と沈線下の刻みがある。123は頸部の「8」字貼付文とそこから垂下する紐線文が貼付される。

#### 遺物集中区5 (第52図、第57図124～135)

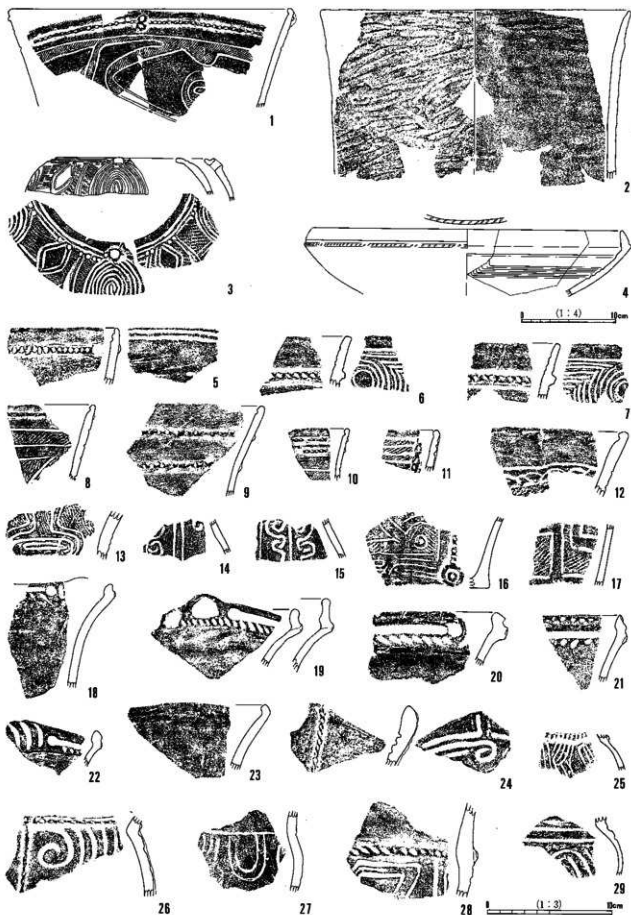
II M20・II M25グリッドを中心とし、後期が集中する。該当グリッドにSB13が存在するため、SB13の覆土内の遺物を含むと思われるが、遺構外の遺物との区分は不可能であるため、SB13確認以前の出土遺物は遺構外の遺物として取り扱った。該当する2グリッドの出土遺物は土器(中期・後期)23kg、石器・石核23点である。

出土遺物(第57図124～135)：124～130は深鉢A、131～133は深鉢B、134は無文土器である。135は深鉢Aの底部と推定される。

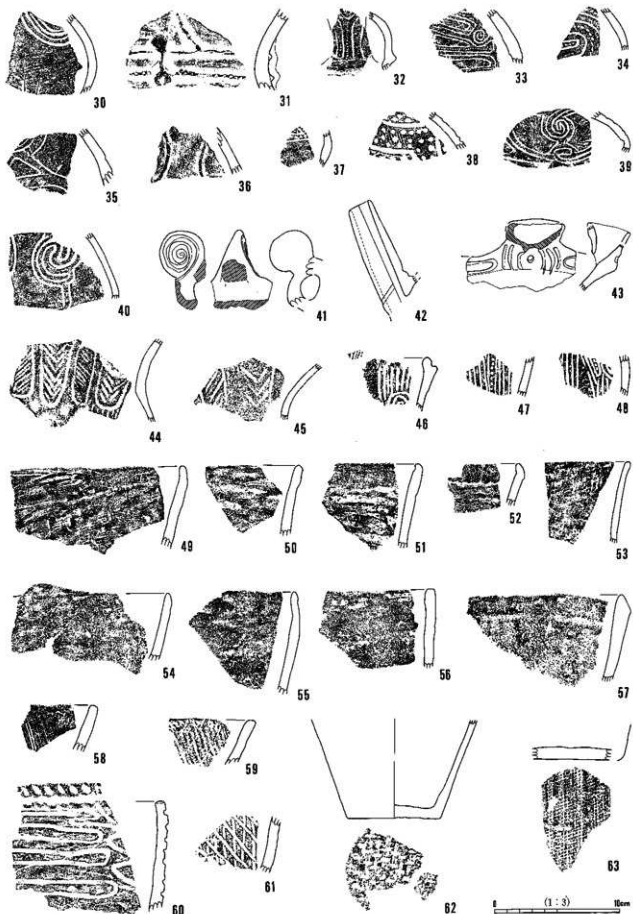
129は9条の沈線が巡る薄手の小形の深鉢である。131は口縁内面に幅広の有段部がある稀な例である。132は口縁から斜めに垂れる紐線が貼付され、その脇に焼成前の円孔が穿たれている。134は口縁部がやや内湾する器形で、器面はナデ調整であるが、部分的に指ナデ痕を残す。

#### 遺物集中区6 (第52図)

II T09・II T14グリッドを中心とした中期の土器の集中を遺物集中区6とした。出土点数はII T14グリッドで破片数は300点を超えているが、中期の土器の重量は少なく、小片が多いため、特に資料提示はしない。該当グリッドには中期の竪穴住居のSB11・12があり、覆土内の遺物が多く含まれたものと判断される。また、遺物集中区4と中心をずらして重複する部分があるため、該当グリッドには後期の土器も多い。中心となるII T14グリッドの出土遺物は、土器(中期・後期)10kg、石器・石核57点である。

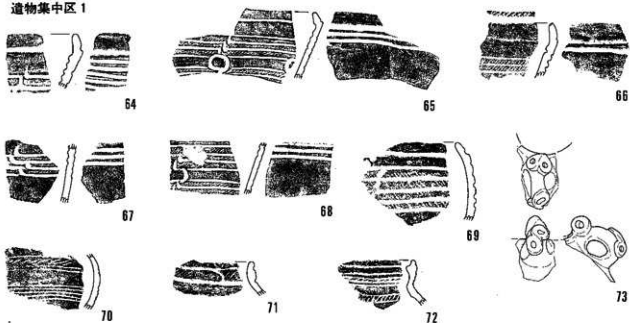


第53図 遺物集中区1出土土器(1) (1~4は1/4、他は1/3)

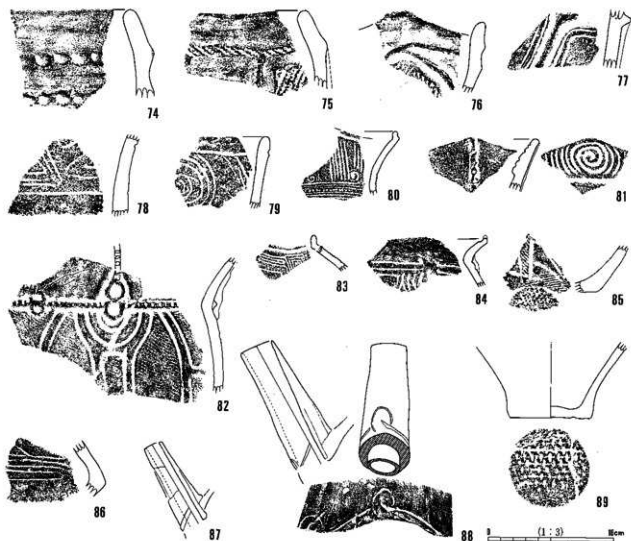


第54図 遺物集中区1出土土器(2)

遺物集中区 1

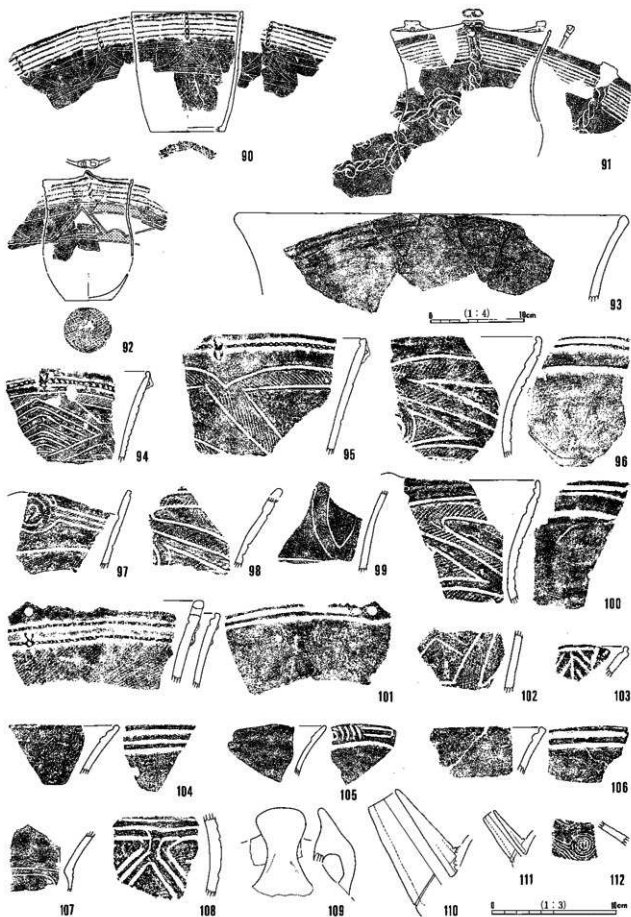


遺物集中区 2



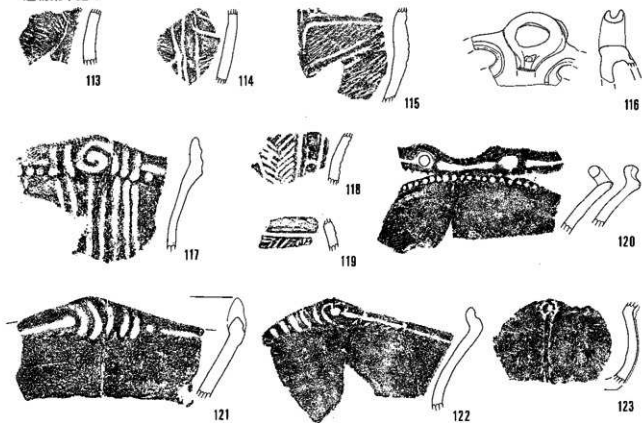
第55図 遺物集中区 1・2 出土土器



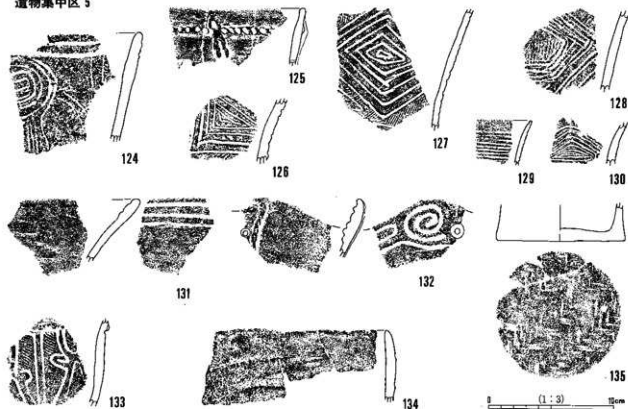


第56図 遺物集中区3出土土器(90~93は1/4、他は1/3)

遺物集中区 4



遺物集中区 5



第57図 遺物集中区4・5出土土器

## 7 遺構外の遺物

## 1) 草創期の遺物 (第58図1~21)

草創期に比定される土器は12片で、調査区北側の40mほどの範囲にまとまっている。縄文のみの小破片であるため、全て抽出できたとは言えない。石器は神子柴型石斧4点、尖頭器3点が出土している。石器の分布範囲は土器に比べ広範囲で調査区全体に及ぶ。この他に明確に時期比定できるわけではないが、石材および調整加工により草創期以前の石器と思われるものを第58図に示した。

1はハの字状の爪形文。2はLRの縄文地文と同じ原体の端部で刺突している。3は押圧縄文で、4~11は単節縄文であるが、小破片のため上下左右の判断がつかない。4は唯一接合痕が確認され、横方向に回転施文したRLの縄文である。いずれも内面は指頭押圧によると思われる凹凸が見られる。

12~14は刃部に研磨痕が見られる神子柴型石斧である。縄文時代中期以降の打製石斧とは石材が異なっており、明瞭に区別される。15・16はブランディング状の調整加工が認められる。18~20は槍先形尖頭器である。17は半月形石器であろう。21も早期以降には類例を見ないことから、本項で取り上げた。この他に、後述する石器の項で取り上げた搔器など草創期に比定される可能性がある石器もあるが、早期以降の石器と区別する根拠を持たないため、本項では取り上げていない。

なお、村東山手遺跡背後の奇妙山山腹に、完形の神子柴型石斧5点が採集された宮ノ入遺跡と、神子柴型尖頭器が採集された笹付遺跡がある(森嶋1968)。

## 2) 早期・前期の土器

## 土器分類の概要

縄文時代早期・前期の土器片が約2000点出土した。早期後半から前期初頭の土器が主体で、ほとんどが小破片資料である。遺物の多くは遺構外より出土しており、わずかに土坑内より出土したものも合わせて提示した。これらの土器は縄文時代中期・後期と同一包含層より出土しており、整理段階で中期・後期の土器の中から拾い出したものである。無文や縄文のみなど特に文様の無い土器では胎土に繊維が含まれているものを抽出したため、当該期に繊維を含まない無文土器や縄文施文のみの土器が存在したとしても、それらは抽出されていないことを付け加えておく。

文様構成と調整と胎土により、次のように分類した。

第I群土器 早期押型文系土器

第II群土器 早期沈線文系土器

第III群土器 早期条痕文系土器群

第1類 低い細隆起線、沈線及び刺突により文様を構成し、細隆起線または沈線の交叉点

に円形竹管文が押捺される土器(鴨ガ島台式)

a種 太い沈線によって区画するもの。

b種 細い沈線によって区画するもの。

c種 細隆起線文で区画するもの。

d種 刺突文及び間隔の狭い一対の並行沈線によって区画するもの。

第2類 口縁部形態または器形が1類に類似する土器

第3類 絡糸体圧痕文が施される土器

第4類 1~3類以外で条痕文が施される土器

a種 貝殻条痕のもの

- b種 絡条体条痕のもの
- c種 表面に縄文が施文されるもの
- d種 表面に燃糸文が施文されるもの
- z種 a種・b種・c種・d種の判別ができないもの

- 第IV群土器 前期初頭の土器群(塚田式)
- 第V群土器 前期前葉・中葉の土器群
- 第VI群土器 縄文または燃糸文施文の土器で胎土に繊維を含む土器

- 第1類 単節縄文のもの
- 第2類 単節縄文で、口唇部に棒状工具で刺突をしたもの
- 第3類 胴部に刺突列があるもの
- 第4類 横位の羽状縄文
- 第5類 菱形構成の羽状縄文
- 第6類 結節縄文
- 第7類 附加条・結束・ループ縄文等特殊な縄文施文のものを一括した。
- 第8類 1本の縄を軸に巻きつけたのみの原体による燃糸文
- 第9類 LとRを組合せた燃糸文
- 第10類 網目状の燃糸文
- 第11類 底部

#### 第I群土器 押型文系土器(第59図1~28)

押型文系土器を一括した。遺跡全体で42片出土したのみで、出土量は極めて少ない。分布範囲はIIM・IIN・IIOグリッドの広範囲にわたる。1~15は山形文、17・24は格子目文、16・18~22・25・26・28は楕円文、23は楕円文と並行線文、27は所謂変形押型文である。施文構成がわかる資料はないが、3・4・5は帯状施文と思われる。17は全体に浅い施文で、口唇部にもわずかに格子目文が認められ、焼成後の穿孔がある。19は直行する異方向の楕円文である。13・15・16・19・25・26・28の胎土には繊維の混入が見られる。

これらの資料には古い様相を示すものと(3・4・5・17・24)、新しい様相を示すものが混在している。古い様相を示すものはSB10周辺に集中する傾向が見られる。

#### 第II群土器 沈線文系土器(第59図29)

沈線文系土器を一括した。出土点数は10点に及ばない。29は沈線により横帯に区画され、上段はヘラ状工具による細長い刻み、下段は円形の棒状工具を斜めに突いた刺突列が見られる。

#### 第III群土器 条痕文系土器(第59~63図30~129)

早期後半の条痕文系土器を一括した。以下のように細分した。鶴が島台式を中心とした前半段階と、絡条体圧痕文系土器を中心とした後半段階に大きく分けられる。1類・2類は前半段階、3類は後半段階、4類はいずれかの段階に伴うものである。また、第VI群土器の中にもIII群土器と並行する時期のものが含まれると思われる。

なお、凶版では表裏面の拓本を掲載したものは裏面に条痕が確認されるもので、表面の拓本のみのもは裏面に条痕が確認されないものである。

**第1類** (第59～61図30～85・89) 低い細隆起線、沈線及び刺突により区画文様を構成し、細隆起線または沈線の交差点に円形竹管文が押捺される土器で、鶴ヶ島台式に比定されるもの。文様を区画する手法により以下のように細分する。

a種 太い沈線によって区画するもの。(第59・60図30～50)

b種 細い沈線によって区画するもの。(第60図51～63)

c種 細隆起線文で区画するもの。(第60・61図64～77)

d種 刺突文及び間隔の狭い一對の並行沈線によって区画するもの。(第61図78～85・89)

1類の口縁部は内そぎ状のものが多数を占める。また、口唇部にはキザミがあるものが多く、内そぎ状の口縁では、キザミが口唇全体に及ぶものと(第60図51・68・69など)、口唇端部の角部にキザミがなされるもの(第59図38・42・44など)がある。器面調整では内面が条痕のものとナデのものがある。拓本で表裏面を提示しているものは内面に条痕が認められたもので、表面の拓本のみものは条痕が確認できないものである。条痕の原体を特定できるものは少ないが、条痕の断面形態から第58図54・67・72・73は貝殻条痕と推定される。

89は間隔の狭い一對の並行沈線により細隆起線を表出している部分が多くd種に含めたが、文様区画は細い沈線や区画線が欠如する部分もあり厳密には上記の細分類はできない。この土器は土坑内(SK20)に横倒しの状態で出土したもので、器高約30.0cm、口径18.0cm、底径4.5cmである。口唇部は内そぎ状で、胴部上半に2段の段部を持ち、底部はやや丸みのある平底である。口縁部は6単位の小波状となるが、その間隔は一箇所狭いところがあり、等間隔ではない。器面上半部の文様は、上端を浅い沈線で、下端を段部で区画された2段の文様帯で構成されている。口縁部と2つの文様帯の間には幅1cmほどの無文帯がみられる。6個の波頂部からは2段の文様帯を貫いて細隆起線が垂下しており、器面全体が12の長方形に区画され、それぞれに独立した異なったモチーフを描いている。12の小区画はそれぞれ浅い直線の沈線で幾何学的なモチーフでさらに区画され、その交点に竹管による円形の刺突を行い、区画内は沈線または竹管の押し引き沈線を充填する。沈線による幾何学的なモチーフの区画は三角形、菱形、横長の長方形などであり、沈線の外側が盛り上がりによって細隆起線による区画のように見える所もある。前述の文様帯を貫く垂下する細隆起線も、両脇を浅い沈線を引くことにより低い隆帯のように見えるものであり、貼付したり、つまみ上げた隆線ではない。工具は直径6mm前後の竹管を用いたものと思われる。無文帯および内面に明確な条痕は見られないが、内面に条痕をすり消したと思われるものがわずかに観察される。胎土には繊維を含み、金雲母、石英などの鉱物が多く見られ、器面は脆い。色調は褐色から暗褐色である。

胎土は以下のごとく7タイプに分類され、A～Eの5群に大別される。他の分類に属するものでIII群1類と同時期と思われる土器についても以下に胎土の類型を示す。

A1タイプ:金雲母と石英を含む(大粒の金雲母>石英)。第59～63図36・37・42・46・48・51・64・66・67・68・73・80・81・88・96・99・100・101・129・149が該当する。

A2タイプ:金雲母と石英を含む(小粒の金雲母<石英)。第59～63図31・38・40・44・45・47・49・50・54・55・62・63・69・78・89・94・102・103・125・148・150・153が該当する。

B1タイプ:白色粒子、輝石を含む。第59～62図30・33・35・41・53・56・57・59・60・61・71・72・76・77・79・90・97・98が該当する。

B2タイプ:砂粒が細かく、岩石鉱物を殆ど含まない。第62図119・120・121・122が該当する。

Cタイプ:結晶片岩、滑石を多く含む。第59～61図34・39・43・52・65・70・74・75・83が該当する。

Dタイプ:白色粒子を多く含む。第59～62図32・58・95が該当する。

Eタイプ:灰白色の大粒の粒子を含む。第62・63図91・92・126・151・152・154・160が該当する。

なお、第III群1類・2類土器の肉眼観察による胎土の分類と理化学的分析による胎土分析の比較検討を明治大学考古学研究室のご協力で実施した。分析結果は別稿にて公表する予定である。

**第2類** (第61図86~88、第62図90~103) 口縁部形態が内そぎ状のもの、胴上半部の屈曲部で文様体が区切られるなど、器形と文様帯構成が1類に類似し、1類と同時期と判断される土器を一括した。

86~88・96~98は口唇端部に刻みがある。86は浅い縄文の原体圧痕のようなものが観察される。87は押し引き沈線、88は貝殻腹縁文のような沈線が見られる。90は表裏面に条痕、91の表面は条痕上に縄文が施文される。92は表面が縄文で裏面は条痕、93はR L (?), 94はL Rの単節縄文で内面に条痕は確認できない。95は円形竹管による刺突、97・98は無文で口唇部に刻みがある。99・100は同一個体と思われ、屈曲部より上部に格子目状の沈線が、下部には浅い条痕が観察され、内面に条痕はない。101は屈曲部の下を横位3本の沈線で文様帯を区画し、上段は区画内を沈線で充填する文様が展開し、下段は格子目状沈線が描かれるものと推定される。裏面の条痕は見られない。102は屈曲部に沿って1条の横位沈線と棒状工具による刺突列が施文される。条痕は観察されない。

102以外は全て繊維を含んでおり、102も繊維を含んでいたようにも見える。その他の胎土の特徴については第1類の項で記述した。

**第3類** (第62図104~118) 絡条体圧痕文が施文される土器を一括した。56点出土した。104~110は口唇部に絡条体圧痕が連続して施文される。104・110は斜方向の絡条体圧痕が見られ、鋸歯状のモチーフのものであろうか。106の表面は縦と横方向、裏面には斜方向の絡条体圧痕が見られる。105・107・109・111は絡条体条痕が観察される。112は口縁の肥厚部に綾杉状の、その直下の隆帯には斜めの刻みが付く。胴部の瘤状突起のまわりに絡条体圧痕文状の文様が施文される。裏面は貝殻条痕が見られる。113は112と同様の瘤状突起が見られ同一個体と思われる。なお、119~121も胎土と条痕が類似しており112と同一個体の可能性がある。114・115は異方向の絡条体圧痕で裏面は絡条体条痕、116は縄の間隔が広い横位の絡条体圧痕で内面に条痕はない。117は縄文地紋に絡条体圧痕が見られ、裏面は絡条体条痕である。

**第4類** (第62・63図119~129) 1~3類以外で条痕文が施される土器で、以下の様に分類する。約330点出土しているが、本類の口縁部は少なく、大半は1~3類の胴部破片と考えられる。

- a種 表裏面貝殻条痕のもの。(第62図119~122)
- b種 表裏面絡条体条痕のもの。(第62図123・124)
- c種 表面に縄文が施文されるもの(第63図125・126)
- d種 表面に燃糸文が施文されるもの(第63図127・128)
- z種 a種・b種・c種・d種の判別ができないもの(第63図129)

119~122は胎土、色調、条痕が類似しており、特に119~121は同一個体と思われ、112とも同一個体である可能性が高い。123は間隔の広い横位の、124は間隔の狭い縦位の絡条体条痕である。125はR Lの単節縄文と裏面の擦痕状の条痕であるが、裏面の条痕は細かく表面の縄文原体とは異なる原体である。126は浅い縄文、裏面は絡条体条痕が見られる。127・128は表面に燃糸文、裏面は同原体による条痕(?)が見られる。129の表面はナズ、裏面はわずかに条痕が見られ、口唇部に円形棒状工具の腹部による刻みがある。全て、胎土に繊維が混入される。

#### 第IV類土器 (第63図130~134)

前期初頭家田式の土器群を一括した。130は口縁部の刻みと隆帯上に綾杉状の刻みがある。131は隆帯に板状工具による刺突が見られ、胴部には縄文がわずかに見られる。132は口縁部の刺突と2条の沈線、胴部には浅い単節縄文が施文される。褐色で、胎土に金雲母が多量に見られる。133は隆帯上に円形棒状工

具による刻みがあり、胴部は羽状構成の縄文が予想され、隆帯直下には横位に施文された結節縄文が見られる。褐色から暗褐色を呈する。134は円形棒状工具による刻みがある低隆帯、胴部には単節縄文が施文される。灰褐色を呈し、他のIV群土器に比べ白色で異質である。胎土はそれぞれ異なり共通性はない。

#### 第V群土器（第63図135～147）

前期中葉・中葉の土器群。前葉・中葉の表現も研究者によりその示すところが異なるが、本遺跡V群土器は、中道式から有尾式時代の土器を一括した。出土点数は少ないが、外来的な要素を持つ土器が含まれる。有尾式は数点出土したのみで、主体は長野県史前期II期（市村1988）のものが主体を占める。

135は胴部がくびれる器形を示しており、先割れをした棒状工具で粗雑な格子目状の沈線を描く。136は矢羽状の沈線が見られ、胎土・色調が135に類似する。ともに繊維を多量に含むが、器形と文様の特徴から中越式の系譜上にある土器と思われる。137・138は同一個体と思われ、沈線により区画された口縁部文様帯は円形竹管の刺突と斜行沈線が、胴部は縦位の羽状縄文が施文される。胎土に多量の石英が含まれるのが特徴的である。139・140も同一個体と思われ、口縁部に突起状の貼付が2列巡ると推定され、口縁部の貼付列間は並行する斜行沈線、胴部は羽状もしくは菱形構成の縄文が施文される。141～143は口縁部に棒状工具を器面に対して斜めに刺突した数段の刺突列が見られ、口縁部がわずかに内湾傾向を示す。いずれも橙褐色を呈し、褐色粒を含むなどよく似た胎土である。142は円形棒状工具を斜めに突いた半月状の刺突が連なり、胴部には浅い縄文がわずかに見られる。144は底部破片で、胴部下から底部にかけて棒状工具の刺突で充てられる。145は円形棒状工具による2条または3条の押し沈線で文様を描き、胎土は141～143に類似する。なお、詳細な検討はできないが、141～144は新潟県で見られる大湊式と根小屋式（寺崎1996・1997）などの系譜上に位置づけられる土器であろう。146は半截竹管の押し引きが巡る。有尾式と思われるが、本遺跡で同型式は他に出土例を見ない。147の器面はミガキ調整で、口縁直下とその下3cmほどの位置に細長い刺突列が並ぶ。130～135は胎土に繊維を含み、146・147は繊維を含まない。

#### 第VI群土器（第63・64図148～204）

縄文または燃糸文施文の土器で胎土に繊維を含む土器を一括した。内面に条痕が見られ輪が島台式または絡条体圧痕文土器に伴うと考えられる縄文・燃糸文施文の土器はIII群に含めた。時期比定が難しいものが多く、縄文・燃糸の施文法・器形・口唇部形態により1類～10類に細別した。III群～V群に伴うものと思われる。底部は平底の破片が確認されないことから、本遺跡から出土した繊維を含む縄文施文の土器の大半は尖底と考えてよいであろう。

**第1類**（第63図148～164） 単節縄文のもの。早期・前期土器群の中で本類の点数が一番多い。いずれも単節の斜縄文であるが、口縁形態、節の大きさ、胎土がさまざまである。本類に分類したものはかなりの時間幅を持つものと思われ、III群・IV群・V群土器に並行する土器が混在していると考えられる。

157の胎土には繊維の混入が殆ど見られず、162は内面にも部分的に縄文が施文される。159は胎土色調、口縁部形態、縄文の施文法が2類の165に類似する。

**第2類**（第64図165・166） 口唇部に棒状工具による刺突列があるもの。数個体が確認されるのみである。165は④-1区に単独で出土したもので、上半の1/2ほどが残存しており、下半は失われている。口唇部に先端の棒状工具による刺突列が見られ、幅1.5cm前後のRLの縄文が横位に施文される。縄文は浅く、縄文施文されない部分もあり、内面はわずかに擦痕が観察される。胎土は石英と鉄分の沈着と思われる褐色粒を多く含み、暗褐色から橙褐色である。器形は、お供平遺跡15号住居址<sup>102</sup>、石川条里遺跡S B 2002<sup>103</sup>などの類例から尖底と推定される。166は波状口縁を呈し、RLの単節縄文、口唇部と口縁付近の段部

とに竹管状の工具による刺突列がある。灰褐色で、胎土に石英や褐色粒はあまり含まない。

**第3類** (第64図167~170) 胴部に刺突列があるもの。数点出土したのみである。167はループ縄文が見られ、表面の段部にへら状工具による刺突列がある。168・169は三日月状の刺突と、前者はループ縄文、後者は羽状縄文がわずかに確認される。170は縄文が隆帯上に及んでおり、隆帯には円形の刺突が見られる。

**第4類** (第64図171~177) 横位の羽状縄文を施文したもの。174は口唇部に縄文が施文される。175は口縁部が肥厚しており、中道式に比定されよう。

**第5類** (第64図178~181) 菱形構成の羽状縄文を施文したもの。

**第6類** (第64図182) 結節縄文を施文したもの。182はL Rの単節で破片左側は横位、右半分は縦位施文である。

**第7類** (第64図183~189) 附加条・結束・ループ縄文など特殊な縄文施文のものを一括した。183は附加条縄文。184は原体不明。185・186はループ縄文もしくは特殊な結束縄文の一種であろうか、真田町四日市遺跡の前期中葉とされる土器の中に見られる<sup>100</sup>。187~189は組紐状の縄文が見られる。

**第8類** (第64図190~192) 1本の縄を軸に巻きつけた燃糸文を施文したもの。190は口唇部に円形棒状工具による刻みがある。

**第9類** (第64図193~195) LとRを組合せた燃糸文を施文したもの。本類の施文原体は塚田式に確認されており(下平1994)、193~195は前期初頭に位置づけられるであろう。

**第10類** (第64図196・197) 網目状に燃糸文が施文されるもの。

**第11類** (第64図198~204) 底部及び底部付近の破片を一括した。いずれも尖底で平底は見られないことから、本群の大半は尖底土器であると思われる。ただし、第70図163など前期の可能性のある平底も存在しており、速断はできない。

### 3) 中期・後期・晩期の土器 (第65~70図)

**中期の土器** (第65・66図1~36) 1~10は中期前葉の土器である。中期前葉の土器は調査区全体で38片出土したのみである。11~36は中期後葉から末葉の土器で、11~17は中期後葉の唐草文系土器、18~21・33は中期後葉から末葉の圧痕隆帯文系土器、24・32は越後系?、22・23・27~31・34・36は加曾利E式系と分類されよう。唐草文系土器と越後系の土器の出土点数は圧痕隆帯文系と加曾利E式系土器とに比べきわめて少ない。

22は低隆帯による区画がなされ、部分的に隆帯に縄文が施文される。23は隆帯による区画と縦位に施文した縄文で、加曾利E式系で後期初頭に位置づけられている(綿田1988)。24と32は同一個体と思われ、沈線と隆線による区画文が見られる。26は口縁部の段部に境に口縁部無文帯があり、胴部は燃糸文もしくは条線が施文される。本遺跡では稀な例で、新潟県岩野原遺跡<sup>101</sup>に類似が見られることなどから、後期の新潟地方に系譜をもつ土器であろうか。34はII S 04グリッドで正位に埋設された状態で出土したもので、埋没の可能性はある(出土状況はP L 9)。底部は中央部にナデ痕、周辺部に網代痕が観察される。ナデ調整の後に網代痕が付けられたように見える。35は直径8mmの穿孔がある4単位の突起部を持つ鐮状の隆帯が巡る。そこから垂下するそれぞれの隆帯にも直径2mm~3mmの穿孔があり、紐を通すと胴上半部を巡るようになる。

### 後期の土器 (第66~70図37~167)

37~126は後期前葉、127~149は後期中葉、150~160は後期前葉から後期中葉、161・162は後期後葉、



163~167は底部で時期は特定できない。本遺跡では前期初頭の称名寺式は見られず、後期前葉堀之内1式から後期中葉加曾利B1式が多く、加曾利B2式以降はわずかに出土しているのみである。堀之内2式が中心となる後期前葉では、37~46・48~63・81~100が深鉢A、64~80が深鉢B、47・110~126が注口土器、150~160が無文土器、101~109がその他の器種、と分類した。また、127~149は加曾利B1式・B2式で、器種分類は行っていない。

37は刻みがある紐線が縦に垂下する。39は波状口縁で内面に1条の沈線がある。42は刻みが無い紐線が貼付される。45は口縁内面に段部を有しており、遺物集中区3に類例が見られる(第56図96~98・100)。47は注口土器である。60から63は胴部の屈曲部の上に狭い文様帯がある深鉢A2類で、堀之内2式の時期のものと思われる。66・67は口縁の沈線下に円形棒状工具による刺突が見られ、後者には刻みがある紐線が口縁から垂下する。69の口縁内面には2条の沈線が引かれ、沈線と口唇の間は細かい縄文が施文される。72は口縁内面に2列の刻みがあり、本遺跡では極めて稀な口縁形態である。78はくびれ部の沈線間に竹管状工具で刺突をしており、79・80はくびれ部に刻みがある紐線が貼付される。82~100は胴部にくびれを有する深鉢A3類に分類され、胴上半部の文様帯において縄文が施文される一群と、綾杉状沈線もしくは斜行沈線が描かれる一群とその他とに分類される。89は口縁部の浅い沈線下の屈曲部に刻みがわずかに確認される。101~109は時期が定かではなく、後期中葉のものも含まれそうである。108は指頭圧痕が残る粗雑な作りで、109は胴部下端に3条の沈線が走り、底部に網代痕は無い。110~116は注口土器把手部で、端部の装飾が無文のもの(111)、正面形が三角で左右両面が渦巻文が描かれるもの(110・112~114)、正面形が円形で渦巻文が描かれるもの(115・116)、に大別される。胴部文様では隆起線でモチーフを描くもの(117・118)、充填縄文と小さな円形刺突列が用いられるもの(119・120・122)、三角文の充填縄文のもの(121)などが見られる。

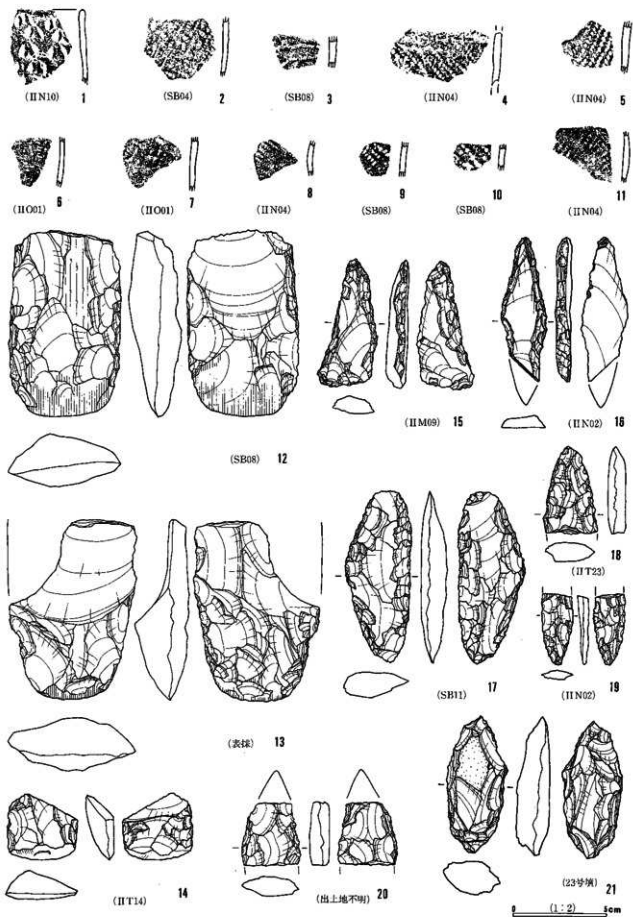
127~149は後期中葉で144・145など加曾利B2式と思われるものが散見されるが、本遺跡の後期中葉の土器は加曾利B1式が主体を占める。

150・154がナデ調整(C類)、151~153はケズリ調整(B類)の無文土器である。151・152は横方向の指ナデの痕跡も残しており、ケズリも横方向であるが、153は縦方向のケズリで他の無文土器と趣が異なる。150と152は内面に沈線が引かれており、本遺跡では類例が少ない。155・156は綾杉状沈線と口縁内面の沈線が特徴的で、157は口縁の2本の沈線と胴部に斜行する浅い沈線が見られる。158は波状口縁の可能性があり、地紋縄文に格子目状の沈線が引かれる。灰褐色を呈しており、遺物集中区1の第54図59と胎土と色調が類似する。159は単節縄文が施文されている。

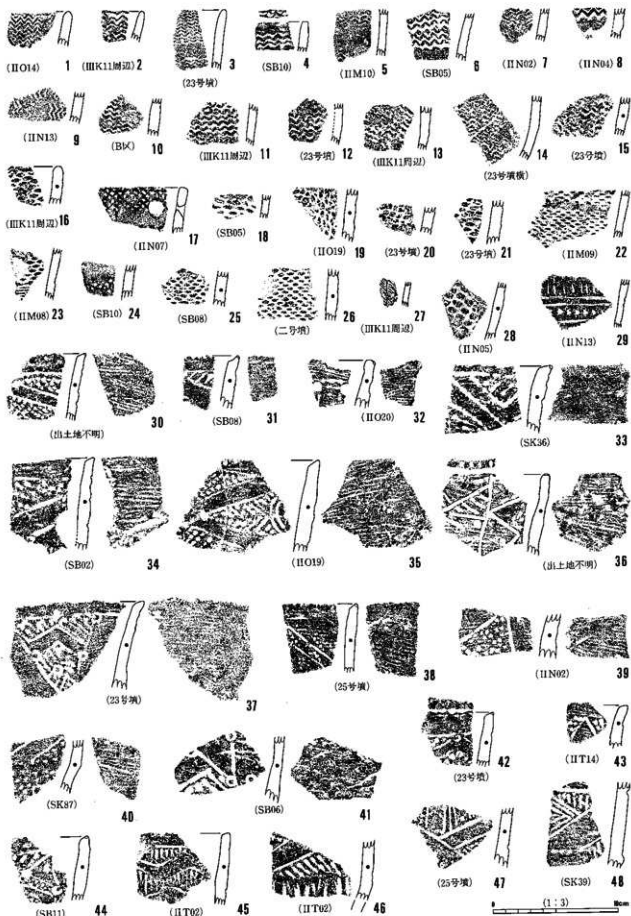
163は附加条の縄文で、胎土にわずかに繊維を含んでおり、底部に網代痕が見られず、前期中葉の土器であろうか。166は指ナデ痕が明瞭で、無文土器の底部であろう。

#### 晩期の土器(第70図168~182)

168~173・181・182は前葉~中葉の依野I式・II式に並行する一群、174~180は後葉の水式に並行する一群である。晩期の土器は出土点数が少なく、図化可能なものは殆ど提示している。174・175は浮線網状文である。176~179は一箇所にまとまって出土したもので同一個体と判断される。口縁は突起状の波状で、口縁部に段があり、わずかにくびれた頸部からやや膨らみを持つ胴部となる器形を呈し、口縁から段部までは細密な条痕、頸部はミガキ調整による無文帯があり、胴部は細密な条痕となる、と推定される。173と178に赤色顔料がわずかに付着している。181と182は同一個体と思われる。

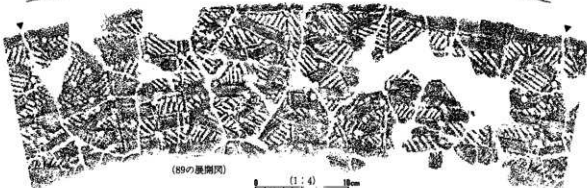
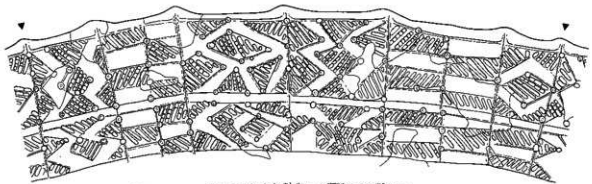
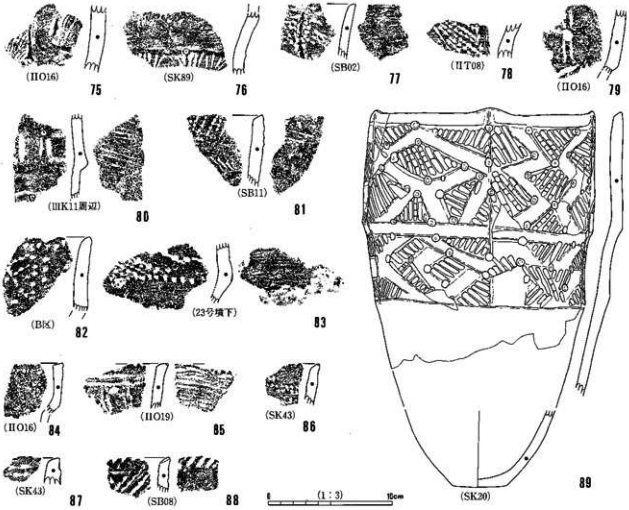


第58図 草創期の遺物



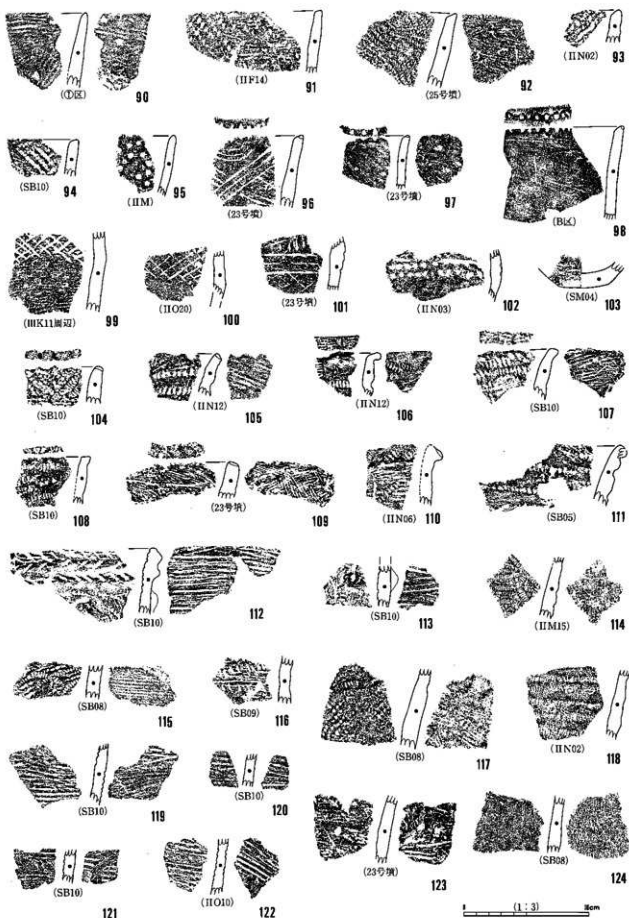
第59図 遺構外の早期・前期土器(1)



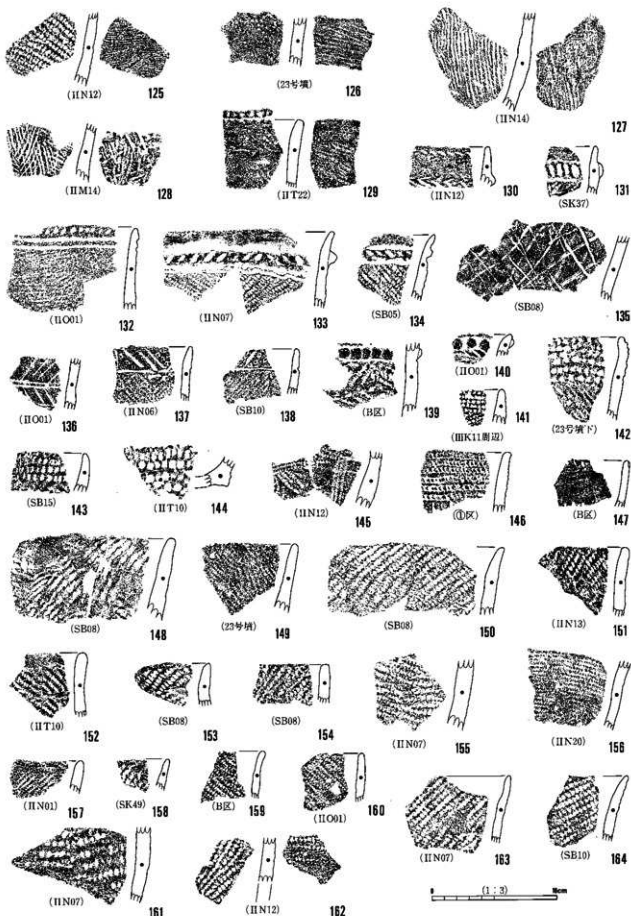


(89の展開図)

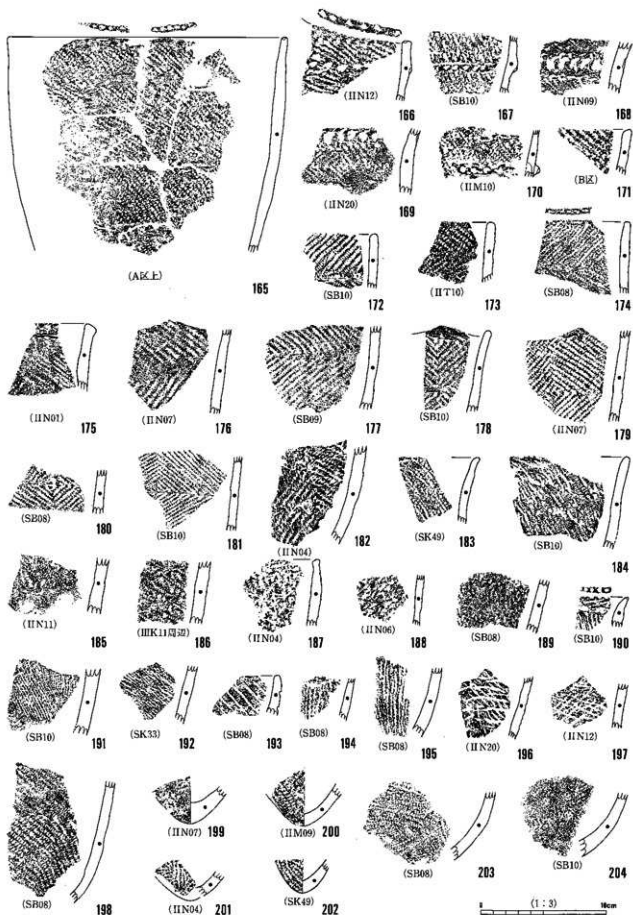
第61図 遺構外の早期・前期土器 (3)



第62図 遺構外の早期・前期土器(4)

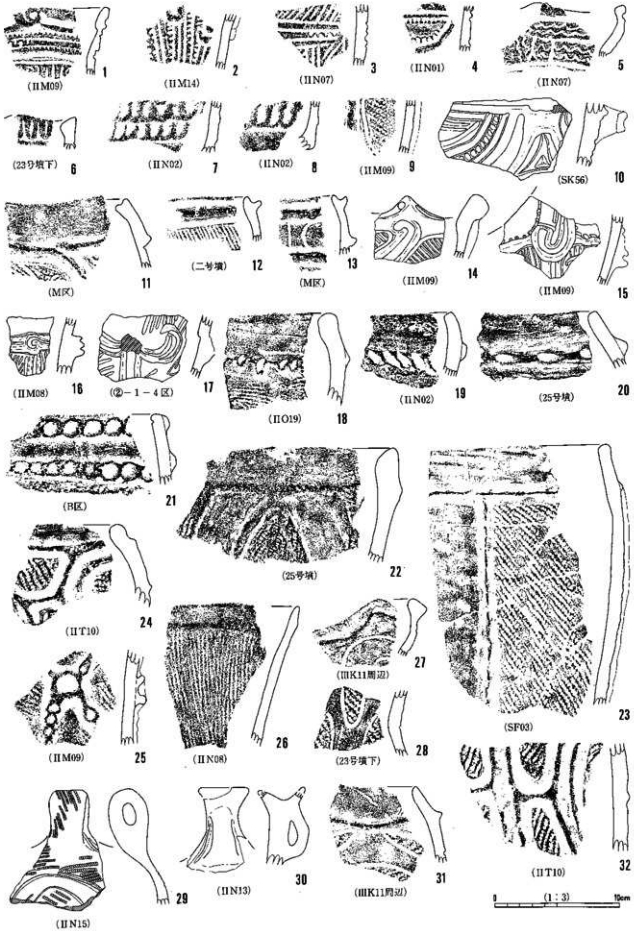


第63図 遺構外の早期・前期土器(5)

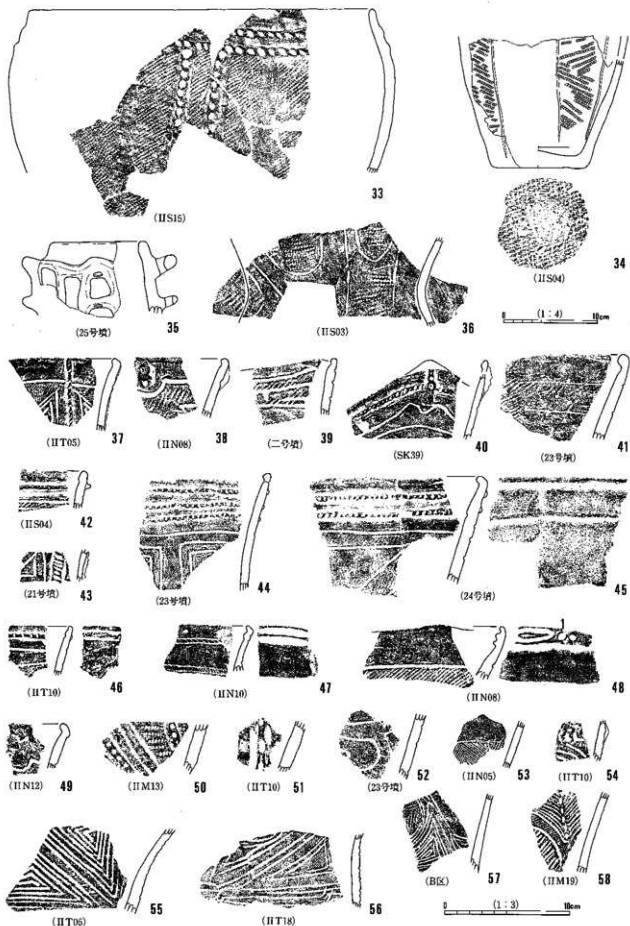


第64図 遺構外の早期・前期土器 (6)

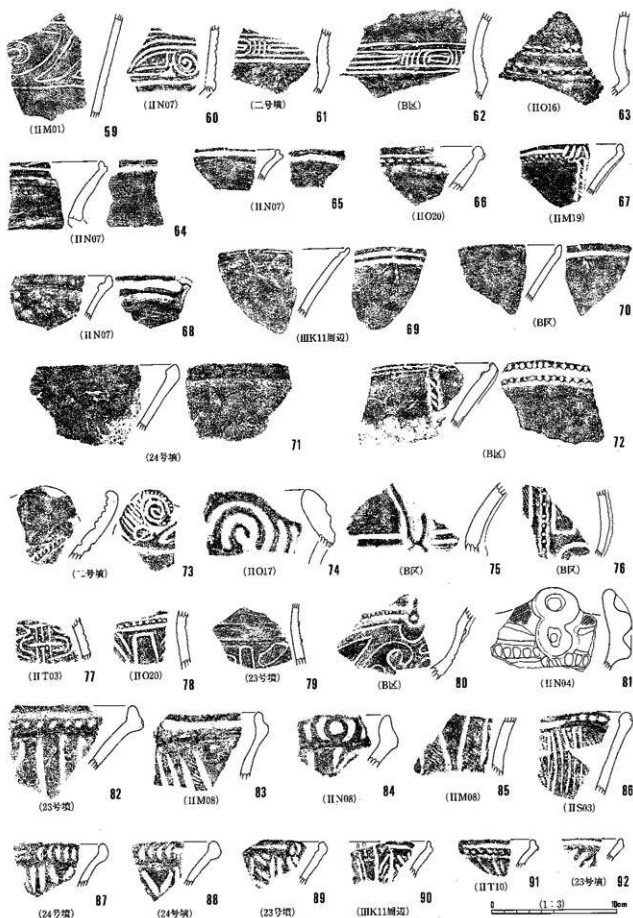




第65図 遺構外の中期～晩期土器(1)



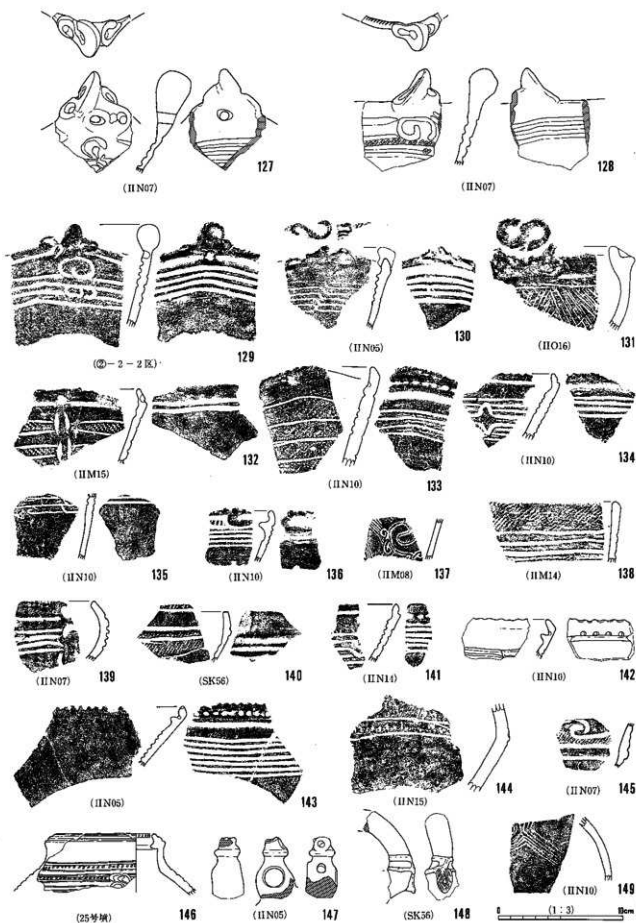
第66図 遺構外の中期～晚期土器(2)



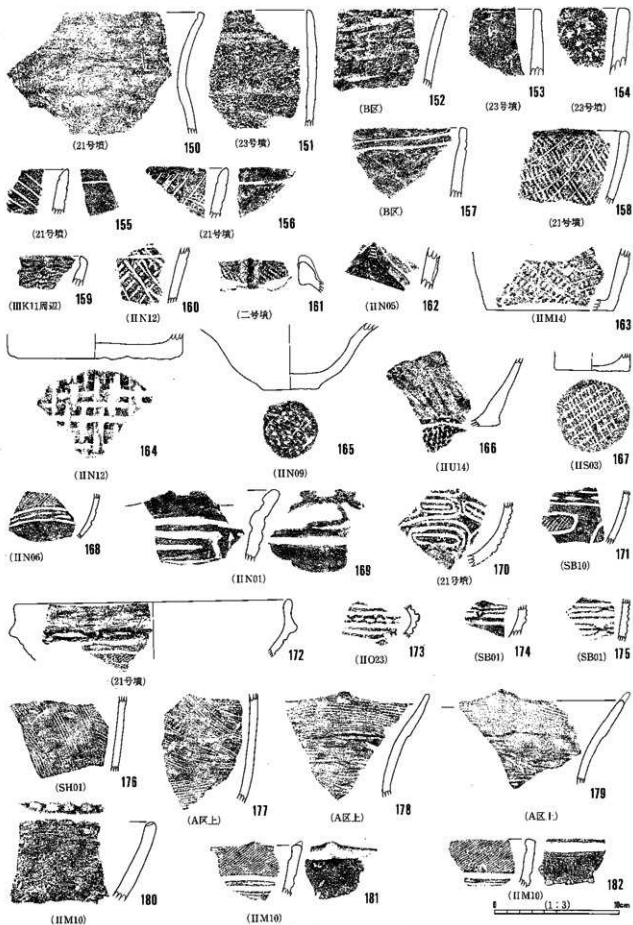
第67図 遺構外の中期～晚期土器(3)



第68図 遺構外の中期～晩期土器(4) (108・109は1/4, 他は1/3)



第69図 遺構外の中期～晩期土器(5)



第70図 遺構外の中期～晩期土器(6)

## 4) 石器 (第73~89図)

石鏃313点、石鏃未製品174点、尖頭状石器2点、尖頭器5点、半月形石器1点、石鏃49点、削器58点、搔器14点、刃器状剥片13点、石匙12点、ピエス・エスキュー148点、異形石器1点、不定形石器38点、2次加工を有する剥片(re.fl)311点、使用痕を有する剥片(u.fl)45点、打製石斧218点、局部磨製石斧4点、磨製石斧60点、礮器5点、石鏃38点、特殊磨石21点、スタンプ形石器7点、凹石42点、磨石46点、敲石72点、石皿7点、砥石6点、石棒12点、石剣2点、軽石2点、研磨痕のある剥片1点、原石26点、石核369点、剥片約7150点が出土した。原石、石核、剥片を除く石器の総点数は1727点である。

以下に各器種ごとに概要を述べる。実測図掲載遺物の属性は第2章末尾の石器観察表を参照していただきたい。なお、尖頭状石器、尖頭器、半月形石器、局部磨製石斧については、草創期の遺物の項で記述している。

## 石鏃 (第73・74図 I~84)

313点出土した。基部形態により以下のように分類した。さらに、基部の細部形状により細分し、長さ指標とした大きさにより、長さ1.8cm未満のものを小形、1.8cm~2.5cm未満のものを中形、2.5cm以上のものを大形とした。なお、有茎石鏃は鏃身部分の長さを計測した。分類別・石材別の点数を第3表に示した。また、欠損形態を第71図のとおり分類した。

I類：無茎凹基石鏃 (1~10・23~49・57~64)。139点出土。抉り部の形状により細分した。

I a類：抉り部が弧状を呈するもの (1~10・23~42・57~59)。

I b類：抉り部が三角形を呈するもの (43・44)。

I c類：抉り部がU字形を呈するもの (45~48・60)。

I d類：抉り部が「コ」の字形を呈するもの (49・61~64)。

II類：無茎平基石鏃 (11~22・50~56)。76点出土。基部の形状により以下のように細分した。

II a類：基部が直線かわずかに内湾するもの (11~18・20・50~56)。

II b類：基部がわずかに外湾するもの (19・21・22)。

III類：無茎凸基石鏃。2点出土。

IV類：有茎石鏃 (65~72)。8点出土。

V類：基部が作り出されない、不整形である、分厚いなど失敗品と考えられるもの (73~79・84)。

47点出土。石鏃未製品I類との区別が不明確であり、石鏃未製品I類と類似したものを含む。

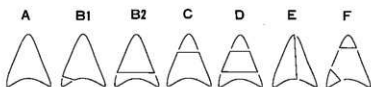
VI類 (その他)：鋸歯状の側縁のもの、特異な基部形状のもの (80~83)。5点出土。

第3表 石鏃分類別点数

	Ia 大	Ia 中	Ia 小	Ib 大	Ib 中	Ib 小	Ic 大	Ic 中	Ic 小	Id 大	Id 中	Id 小	IIa 大	IIa 中	IIa 小	IIb 中	IIb 小	III 中	IV 中	IV 小	V	VI 分類 不能	合計		
黒曜石	1	20	33	1	12		1	12	4	1	1	1		8	9				1	1		28	2	19	195
チャート	1	14	3		1	2	4	3		9	3		3	19	23	6	6	1	4			16		17	135
硅質頁岩	4	2						2							1		1		2	1	3	2		18	
安山岩		1						1																2	
不明	1	1																					1	3	
合計	7	38	36	1	13	2	5	18	4	10	4	1	3	27	33	6	7	2	7	1	47	5	36	313	
完形率(%)	42.8	52.6	61.1	0.0	69.2	0.0	0.0	27.7	25.0	20.0	25.0	0.0	33.3	51.8	57.5	50.0	85.7	50.0	85.7	100.0	38.2	80.0	8.3	44.4	

これらの他に基部の欠損などにより、分類不能のものが36点出土した。分類不能のものはI類~IV類・VI類のいずれかに該当するものである。失敗品(V類)を除くものを完成品とし、その総点数は266点である。完成品とした石鏃の石材は、黒曜石127点、チャート119点、硅質頁岩15点、安山岩2点、その他3

点である。完成品の欠損状況は完形(A)が121点、欠損B1が45点、欠損B2が32点、欠損Cが38点、欠損Dが7点、欠損Eが4点、欠損Fは0点、欠損G(A～Fに該当しないもの)が19点で、完形率は45%になる。



第71図 石鏃の欠損分類

本遺跡では縄文中期末葉・後期前葉の土器が大半を占めるが、縄文早期・前期の土器も少なからず出土している。石鏃の形態から早期・前期・晩期に属すると思われるものも多数出土しており、早期から晩期の石鏃が混在していると考えられる。第3章にて各時期の石鏃の在り方を検討する。

#### 石鏃未製品 (第74～76図85～132)

174点出土した。石鏃に比べやや大きめで、両面加工の不整形円形、楕円形、扁平な滴形を呈し、基部の作り出しが見られないものを石鏃未製品とした。の中にはラウンド・スクレイパーなどの完成品と思われる石器も含まれており、必ずしも全てが未製品であったとは考えられない。

本センターで報告書を刊行した明科町北村遺跡(町田1993)と中野市栗林遺跡(中島・岡村・斎藤1994)においても、同様な石器が多数出土しており、それぞれ異なった分類がなされている。北村遺跡では「製作が粗雑で整形されない一群」として石鏃製作上の失敗品と分類された。栗林遺跡では、円形搔器・尖頭器・石鏃未製品の3器種に分類されたものの、3器種については「区分しがたい部分もある」としており、明確な器種区分の根拠は示されていない。本遺跡で石鏃未製品としたものの中には、いくつかの器種を包括した可能性もあるが、複数の器種として区分する根拠を得ることができなかったため、まとめて石鏃未製品とした。剥片剥離の進行状況と形状とから以下のように細分し、「Ⅲ類→Ⅱ類→Ⅰ類→石鏃」の製作工程を想定している。Ⅰ類とⅡ類には、薄く小形のもの、厚く大形のもの二者がある。

Ⅰ類：やや丸みのある尖頭部を持つ滴形のもの(85～96)。37点出土。

Ⅱ類：全周に調整加工がおよび、円形もしくは楕円形を呈する(97～111・113～126)。98点出土。

Ⅲ類：大きな剥片剥離が数回なされたのみで、素材剥片の剥離面もしくは形状が保持されているもの(112・127～132)。39点出土。貝殻状の素材剥片が多い。

完形品152点、欠損品22点で欠損率は12.6%である。欠損品はⅠ・Ⅱ類に集中する。石材はチャート156点、黒曜石11点、硅質頁岩4点、不明3点、とチャートが全体の90%を占める。

#### 石鏃(第76・77図133～150)

49点出土。鏃部とつまみ部の形状により以下のように分類した。完形のもの(欠損分類A)40点、鏃部を欠くもの(欠損分類B)5点、つまみ部を欠くもの(欠損分類C)2点、鏃部の一部のみもの(欠損分類D)2点である。石材は、チャート31点、黒曜石17点、硅質頁岩1点である。

Ⅰ類：棒状の鏃部で、つまみ部が特別に作り出されず、全体の形状が棒状のもの(133～139・141)。23点出土。チャート14点、黒曜石9点。133・134・136・141の鏃部端部に磨耗痕が確認される。

Ⅱ類：棒状の鏃部で、つまみ部があるもの(140・142～144)。6点出土。チャート6点。

Ⅲ類：三角形の鏃部で、つまみ部があるもの(145～150)。17点出土。チャート9点、黒曜石7点、硅質頁岩1点。

この他に分類不能ものが3点出土した。



**削器** (第77図151~155、第82図229~233)

58点出土。剥片の縁辺に連続的な調整加工を施し、刃部を形成していると考えられるもの。素材剥片の石材により、以下のように分類した。

I類：石鉄・石匙・石錐など小形の剥片石器と同じ石材を素材剥片としたもの(151~155)。削器の中では概ね小形から中形のものが含まれる。25点出土し、20点が完形である。石材はチャート11点、黒曜石3点、珪質頁岩4点、安山岩5点、不明2点である。

II類：打製石斧と同じ石材を素材剥片としたもの(229~233)。削器の中では中形から大形のものが含まれる。所謂横刈型石器がII類に含まれる。33点出土し、22点が完形である。石材は頁岩29点、安山岩2点、不明2点である。II類には刃部に磨耗痕が見られるもの(230)、光沢が見られるものが4点確認された。

**刃器状剥片** (第82図228)

削器II類と同じ石材で、鋭利な縁辺を持つ、横長もしくは貝殻状の大形剥片を刃器状剥片とした。調整加工は認められないが、形状と大きさは削器II類に共通する。刃部と思われる縁辺に使用痕と思われる小さな剥離が見られるものもあり、利器として使用されたものがあると考えられる。13点出土し、全て頁岩である。

**搔器** (第77図156~159)

14点出土し、黒曜石9点、チャート3点、珪質頁岩1点、不明1点である。157~159などの黒曜石以外のものは相対的に大形のものが多く刃部が直線的であり、黒曜石のものは、156のように刃部が曲線的で小形のものである。黒曜石製の搔器は長さ2.0cm~2.6cm、幅1.3cm~2.0cmで、黒曜石以外のものは長さ2.6cmを越える。

**石匙** (第78図160~167)

つまみ部の挟りと刃部の位置関係でI類~III類に分類し、刃部が片刃のものをa種、両刃のものをb種とした。12点出土した。

I類：挟り部分が水平のとき刃部が斜行するもの(161~163)。4点出土。

II類：挟り部分が水平のとき刃部が垂直となるもの(160)。2点出土。

III類：挟り部分が水平のとき刃部が水平となるもの(164~167)。6点出土。

石材はチャート4点、黒曜石3点、安山岩3点、頁岩1点、珪質頁岩1点である。チャートはI・II類、黒曜石・珪質頁岩はIII類・頁岩はII・III類、安山岩はI~III類に見られる。

**ピエス・エスキーユ** (第78図168~171)

両極打法による剥片剥離が見られるものをピエス・エスキーユとした。148点出土した。黒曜石107点、チャート39点、不明2点である。所謂両極石核(山田1986)とされるものも含んでおり、さらに細分類が可能である。打痕があまり顕著でない平坦な剥片を剥離するために、両極打法は有効であり、他器種の素材剥片獲得のために生じたもの、また、石鉄などのように、薄い両面加工石器の調整加工に両極打法が用いられたことも想定され、他器種の生産過程で生じたものが多数含まれていると考えられる。

### 異形石器

1点出土。チャート製で挟入部を作り出したものである。

### 不定形石器

面的な調整加工により、不定形な形状を作り出している石器を一括した。38点出土し、黒曜石22点、チャートが16点である。

### 2次加工を有する剥片

部分的な調整加工が見られるが、一定の形状を作り出していないものを一括した。定形的な器種の未製品・失敗品も含まれると考えられる。311点出土し、黒曜石109点、チャート173点、珪質頁岩7点、頁岩3点、安山岩8点、その他・不明11点である。

### 使用痕を有する剥片

調整加工は見られないが、鋭利な縁辺に微細な刺痕跡が見られるものを一括した。剥片をそのまま利器として利用したものと考えられる。45点出土し、黒曜石21点、チャート18点、珪質頁岩1点、頁岩3点、不明2点である。

### 打製石斧（第80～82図195～227）

218点出土した。平面形態により以下のように分類した。石材は表面が風化して白く変色した黒色の頁岩207点、安山岩1点、不明10点である。頁岩は節理面を残したものが83点（40%）確認される。自然面を残したものの18点、円礫のもの5点、角礫のもの13点がある。

I類：側縁が並行しており、幅が4cm以上のもの（195～213・220）。短冊形打製石斧に含まれる。94点出土。

II類：基部に向かって先細りになるもの（217・218・221）。撥形打製石斧に含まれる。11点出土。

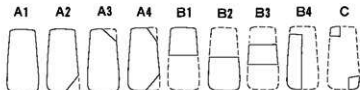
III類：側縁が並行しており、幅が4cm以下のもの（214・215・219・222）。短冊形打製石斧に含まれる。25点出土。

IV類：側縁に挟りが入るもの（223～226）。分銅形打製石斧の一種である。9点出土。

V類：側縁が並行し、刃部が広がるもの（216）。5点出土。

この他に欠損のため分類不能なものが73点、未製品（227）が1点ある。227は側縁にのみ調整加工が見られるのみで、使用痕跡も見られないことから、未製品としたが、本例以外に明確に未製品といえるものは確認できず、石器製作のシステムとして、遺跡内で打製石斧製作が行われたと考えることはできない。

欠損状況を第72図のとおり分類した。A1類は完形で、A2～A4類はわずかに欠損したもので、使用に耐えられると思われるもの。B1～B4類は欠損で使用に耐えないもの。C類は小破片である。A1類が42点、A2類が7点、A3類が4点、A4類が0点、B1類が49点、B2類が64点、B3類が31点、B4類が2点、C類が13点、この他に刃部と基部の識別ができないものなど分類不能なもの6点である。A1～A4類を完形品とし、C類を対象外とすると完形率25.8%である。



第72図 石斧の欠損分類

## 磨製石斧 (第83・84図234~258)

形態的特徴から以下のように分類した。

I類：刃部(局部)磨製石斧(第58図12~14)。断面D字形を呈し、刃部に研磨がみられる。石材は他の磨製石斧、打製石斧と異なる。草創期の遺物であり前項で扱った。4点出土。

II類：断面が扁平な楕円形なもの(235~241)。平面形は定形的ではなく、素材礫の形状を反映したものが多く、14点出土。幅5cm以下の小形のをII a類(236~241)、幅5cm以上の大形のをII b類(235)とした。II類は片刃が多い。

III類：断面胴張りの方形を呈する幅3cm以上の大形の定角式磨製石斧(242~245・249~255・257)。28点出土。基部に平坦面がないものをIII a類(253・254)、基部に研磨又は敲打による平坦面があるものをIII b類(242~245・250・252)とした。

IV類：断面胴張りの方形を呈する幅3cm未満の小形の定角式磨製石斧(246~248)。6点出土。

V類：擦り切りの痕跡を持つもの(234)。1点出土。石材は不明で緑色である。

VI類：太形蛤刃石斧(258)。輝緑岩製で弥生時代のもので推定される。

他に上記の分類に当てはまらない

第84図256も輝緑岩製で弥生時代のものである可能性がある。

分類別の石材組成を第4表に示した。蛇紋岩が5割を占めており、草創期と弥生時代の石斧を除くと、蛇紋岩の比率はさらに高くなる。

第4表 磨製石斧分類別・石材別点数

分類	I	II a b	II a	II b	III a b	III a	III b	IV	V	VI	その他	分類不能	合計
石材													
安山岩					4	1	4						9
輝緑岩						1				1	1	2	5
蛇紋岩		1	8	3	5	2	4	4					7
不明	4		1	1	5		2	2	1				16
合計	4	1	9	4	14	4	10	6	1	1	1	9	64

## 礫器

礫を素材とした石器で5点出土した。素材礫の形状、調整加工に共通性は見られず、石核との区別もあいまいである。刃部を作り出していると思定されるものを礫器とした。出土点数も少なく、本遺跡では典型的な器種としては認めがたい。

## 石錘 (第84図259~272)

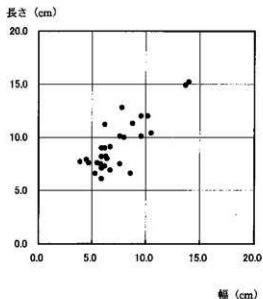
いずれも扁平礫を素材とした、対峙する打ち欠き部分がある礫石錘である。38点出土。礫の形状と打ち欠き部の位置関係により以下のように分類した。いずれも河床礫と思われる扁平なもので、安山岩35点、砂岩1点、不明2点である。

I類：対峙する辺に1対の打ち欠き部分があるもの。

I a類：楕円形の長軸上に1対の打ち欠き部分があるもの(259・260・262・263・267~271)。26点出土。

I b類：楕円形の短軸上に1対の打ち欠き部分があるもの(272)。1点出土。

I c類：ほぼ円形で1対の打ち欠き部分があるもの(264・266)。7点出土。



グラフ2 石錘の長幅比

II類：直交する軸線上に2対の打ち欠き部があるもの(261・265)。4点出土。

38点中8点が欠損しており、1点を除き全て打ち欠き部の軸線に直交した欠損であり、打ち欠き部を作り出すための剥片剥離の際に欠損したものと考えられる。礫の大きさも、長さ10cm以下の小形のもの、10cm~15cmの中形のもの、15cm以上の大形のものに分かれる(グラフ2)。

なお、切日石錘、有溝石錘、土錘は確認されていない。

#### 特殊磨石(第85図273~285)

自然礫の稜線上に狭長な磨り面を持つもので、磨り面以外の使用痕により以下のように分類した。欠損で片方の端部がないものは、残存部のみにて敲打の有無を判断した。21点出土。

I類：磨り面のみのもの(274・276・280)。8点出土。

II類：礫の先端部に敲打痕が見られるもの(273・275・277・279)。5点出土。

III類：礫の片方の端部に平坦な機能面を持つもの(281~285)。5点出土。敲打のみにより機能面が形成されているもの(III a類)と、割った面を機能面とするスタンプ形石器の範疇に入るもの(III b類)とがある。後者について本遺跡では、稜線上の磨り面を重視し特殊磨石とした。この他に、細分類不能ものが3点出土した。

21点中、5点が完形品(欠損分類A)、1点が小破片(欠損分類D)、他は長軸に対して直交する方向の欠損(欠損分類B)である。

#### スタンプ形石器(第85図286~292)

棒状礫の半割面を機能面としたもので、機能面の使用痕跡により以下のように分類した。7点出土し、全て安山岩製である。関東地方の燃糸文系土器に伴うスタンプ形石器に見られるような礫の罫線に挟りが入る例は認められない。

I類：半割面に敲打・摩滅痕が見られるもの(286~290)。機能面の使用痕跡は特殊磨石III b類と類似する。5点出土。

II類：半割面に使用痕跡が見られないもの(291・292)。2点出土。

#### 凹石・磨石・敲石(第86~88図)

凹石、磨石、敲石それぞれの凹部、磨り面、敲打の使用痕跡の特徴から分類されている器種であるが、一つの石器に複数の使用痕跡が見られることが多く、厳密に区分することが困難であるため、本遺跡では凹部を有するものを全て凹石、凹石以外で磨り面があるものを磨石、敲打痕のみのものを敲石とした。

#### 凹石(第86図293~303・305~309・314)

42点出土。磨り面の有無と使用痕跡の部位により以下のように分類した。石材は安山岩18点、花崗岩21点、閃緑岩1点、砂岩1点、不明1点である。42点中12点が欠損品である。

I類：磨り面がないもの。24点出土。以下のように細分した。分類不能が2点ある。

I a類：片面に凹部があるもの(295・296・298)。7点出土。

I b類：両面に凹部があるもの(299・300)。9点出土。

I c類：片面に凹部があり、側面に敲打痕があるもの。1点出土。

I d類：両面に凹部があり、側面に敲打痕があるもの(293・294・314)。5点出土。

II類：正面に磨り面があるもの。磨り面は研磨されたように滑らかである。15点出土。以下のように細分した。

II a 類：片面に凹部があるもの (306)。3点出土。

II b 類：両面に凹部があるもの (302・303・307・309)。6点出土。

II c 類：片面に凹部があり、側面に敲打痕があるもの。2点出土。

II d 類：両面に凹部があり、側面に敲打痕があるもの (297・308)。4点出土。

III類：側面に磨り面があるもの。磨り面は特殊磨石の機能面のごとくザラザラしている (301・305)。3点出土。

磨石 (第86～88図304・310～313・315～325・347)

46点出土。以下のように細分した。石材は花崗岩26点、安山岩18点、不明2点である。46点中12点が欠損品である。

I 類：正面に磨り面があるもの。

I a 類：正面のみに磨り面があるもの (304・312・313・315～320・322～325)。28点出土。

I b 類：側面に敲打痕があるもの (347)。2点出土。

I c 類：磨り面が不明瞭であるが整った形状で、自然礫の可能性があるもの (310・311)。15点出土。

II類：正面と側面に磨り面があるもの (321)。1点出土。

敲石 (第87・88図326～346・348)

72点出土。礫の形状と敲打痕の位置により、以下のように分類した。72点中33点が欠損している。石材は安山岩44点、花崗岩8点、チャート3点、不明17点である。

I 類：円形もしくは楕円形で相対的に厚みのある礫を用いたもので、長軸の先端部に敲打痕があるもの (346・348)。9点出土。

II類：10cm以下の小形の棒状礫を用いたもの。以下のように細分した。11点出土し、2点は分類不能。

II a 類：長軸の先端部に敲打痕があるもの (334・337)。5点出土。

II b 類：長軸の端部の側面に敲打痕があるもの (335)。3点出土。

II c 類：長軸の先端部と側縁部に敲打痕があるもの (336)。1点出土。

III類：11cm以上の大形の棒状礫を用いたもの。以下のように細分した。25点出土。

III a 類：長軸の先端部に敲打痕があるもの (338～345)。20点出土。

III b 類：側縁部に敲打痕があるもの。敲打痕の位置は、側縁の端部のものと、中央部のものとがある。5点出土。

IV類：扁平な楕円礫を用いたもの。14点出土。

IV a 類：長軸上の端部に敲打痕があるもの (329)。5点出土。

IV b 類：側縁部に敲打痕があるもの (330・331・333)。5点出土。

IV c 類：長軸の端部と側縁部に敲打痕があるもの (328・332)。4点出土。

V類：円盤状の礫を用いたもの。側縁部に敲打痕が見られる (326・327)。8点出土。

VI類：I～V類以外で、不整な形状のもの。2点出土。

この他に分類不能なもの3点出土。

石皿 (第89図359・361～363)

7点出土し、全て安山岩製である。機能面の形状と脚部の有無で以下のように細分した。

I類：無脚で、平面形が楕円形、機能面が窪むもの (359・361)。2点出土。

II類：有脚で、平面形が方形、機能面がほぼ平坦で縁があるもの (362・363)。3点出土。

III類：無脚で、平面形が円又は楕円形、機能面が平坦なもの。台石と分類されるものである。2点出土。

I・II類は全て欠損品で、III類は完形品であるが、使用痕跡があまり明瞭でなく石器と断定できない資料である。

### 砥石

6点出土。いずれも角柱形の金属器用の砥石で縄文時代の遺物ではないが、時代は不明である。

### 石棒・石剣 (第88・89図349~358・360)

石棒12点、石剣2点が出土した。全て欠損品である。349は角柱状の石器で、稜部の細かな剥片剥離と、研磨が認められる。石材、形状が他の石棒と異なる。石棒の未製品であろうか。350~355は緑色片岩製で直径3cm以下の細形の石棒で、358・360は安山岩製で直径10cmを超える太形の石棒である。細形のもの10点、太形のもの2点が出土した。356・357は石剣と思われる。354と356が竪穴住居址内出土で、他は遺構外より出土した。

### 軽石

2点出土。1点是小破片、1点は長径10cmほどの卵形のもので、加工痕は認められない。

### 原石 (第79図172~176)

26点出土した。いずれも黒曜石である。他の石材は遺跡内に持ち込まれたものか否か判断できず、調査時に採集していないため、原石の遺跡内搬入を確認できるのは黒曜石のみである。10g未満のもの16点、10g以上~20g未満のもの5点、20g以上~30g未満のもの3点、50g以上のもの2点で、20g未満のものが大半を占める。最小のものは2.6g、最大のものは65.8gである。

### 石核 (第79図177~194)

369点出土した。黒曜石263点、チャート93点、頁岩2点、硅質頁岩3点、石英3点、不明5点である。黒曜石とチャートで96%を占める。黒曜石では1.3g~106.8gのものがあり、10g以下のものが91%を占める。チャートで

は2.4gから308.1

gのものがあり、

10g~40gものが

多く、黒曜石に比

べ重量分布が分散

する。第5表に石

材別の重量分布を示した。

第5表 石核の石材別重量分布

	5g未満	5~10g	10~20g	20~30g	30~40g	40~50g	50~100g	100g以上
黒曜石	135	105	15	2		1		1
チャート	9	6	18	11	14	2	12	15
硅質頁岩				1	1			
石英			2					1
頁岩								2

欠損品の点数はカウントしていない。5~10gは5g以上10g未満を示す。

### 剥片・砕片

剥片・砕片合わせて7128点出土した。発掘調査の精度のためであろうか、砕片はあまり含まれず、剥片が多い。黒曜石2625点、チャート3493点、硅質頁岩248点、安山岩・頁岩604点、蛇紋岩1点、その他・不明157点である。安山岩と頁岩とは判別が困難でまとめて集計したが、安山岩が多い印象をうける。その他・不明の中には硅化木・流紋岩などが見られる。なお、剥片には、打製石斧の刃部調整剥片、切断面がある剥片などが少数見られる。

## 5) 土製品 (第90・92図)

## 土製円盤 (第90図・第6表)

土製円盤は54点出土し、第90図にまとめて掲載した。穿孔の有無と側縁の加工の状態により分類し、穿孔が無いものを1類(1~26)、中央に穿孔したものを2類(27~33)、穿孔途中の2類の未製品と思われるものを3類(34~38)とした。さらに、側縁が特に丁寧に加工(研磨)されたものをa、研磨が部分的もしくは為されていないものをbと細分した。詳細は第6表土製円盤観察表を参照していただきたい。

## 土偶 (第91・92図1~11)

11点出土した。5と10はSB08の覆土から出土しており、覆土内の土器から堀之内2式に伴うものと思われる。2は遺物集中区1a、4は遺物集中区2、7・8は遺物集中区1bより出土した。他は遺構外より出土し、特に1・6・11は古墳の墳丘から出土したもので、原位置を保っていない。これらは出土状況から時期を特定することはできないが、形態・文様の特徴(植木1990・宮下1995)から概ね後期前葉堀之内式期に比定されるものである。

1は頭部表面に直径6mmほどの孔が穿たれ、顔面は鼻と眉が隆帯で、目と口が棒状工具による刺突で表現される。実測図の斜線は剖面もしくは剥落面を示す。2は顔面部が強調されたもので、胴部と腕部は作られない。頭部には刻みがある鉢巻状の粘土紐が貼付され、目と口は棒状工具で刺突し、鼻と耳は粘土を貼り付ける。口の左右にも粘土が貼り付けられている。耳と口の脇の貼り付けは剥落している。背部に浅沈線で円文が描かれている。3は口を刺突で表現し、目と鼻は粘土を貼り付けしている。4は腕部と思われる、片面にのみ磨消縄文が見られる。5は中空で、二股に分かれる棒状の芯の痕跡が見られる。胴部の断面は方形と推定され、腹部のみに縄文が施文される。6は胴部と脚部との接合部が剥がれており、沈線による文様が見られる。7は乳房部分が剥落しており、胴部断面は圓張りの方形を呈する。8は頭部と右腕部の接合部が剥がれており、胴部断面は方形を呈する。胸部と背中部の沈線は7に比べ細く、背面上部の縦の線はキズであると思われる。9は足の指を表現したと思われる4つの刻みが見られ、底面には網代痕と棒で刺した孔がある。10は脚部と思われる、胴部との接合痕が観察される。沈線文様と端部に凸帯を巡らせている。縦方向に直径4mmほどの孔が貫通している。11は3方の側面に接合痕があり、部位は不明であるが土偶の一部と推定される。竹串状の細い工具による刺突列や溝巻文など、後期前葉の深鉢A3類、注口土器の文様に共通するものがある。

## ミニチュア土器・その他土製品 (第92図12~18)

12は用途不明の土製品で中央に直径4mm程度の穴が貫通している。孔は両面から突き刺している。13~18はミニチュア土器で、9点出土した。遺構より出土したものはSB08より3点、SB10より1点、SB13より1点で、他は遺構外である。器形は全て口縁部が小さくなる円筒形で、器高、最大径ともに4cm~5cmである。SB10出土の14は完形品であるが、他は破片資料である。無文のものと、沈線のみで文様を構成するものと、口縁部に帯縄文を配するものがある。17は無節の縄文、18は単節の縄文である。いずれも後期前葉に比定される。

## 6) 石製品 (第92図19~27・巻頭カラー図版)

珠状耳飾2点、垂飾4点、その他石製品3点が出土した。19・20は珠状耳飾りで、ともに滑石製と思われる。いずれも欠損面に磨耗部分が見られることから、欠損後も使用されたものである。19は両面からの穿孔が貫通していない。孔の直径は2.2mm~3.5mmで、端部が丸い棒状の穿孔具が用いられていることが観

察される。20は両面穿孔で、孔の直径2.2mm～3.3mm、穿孔部からの紐擦れ痕（スクリーントーン部）が顕著である。21～24は垂飾で、21・23・24はヒスイ製と思われる、22は材質不明で濃い藍色から黒色である。21は欠損面が磨耗しており、欠損後の使用が推定される。片面穿孔の痕跡が確認される。孔の直径は4.4mmである。22は直径1.4cm、厚さ0.9cmの玉で、孔の直径は5.2mmである。23・24は大きさが異なるが、断面三角形で片面からの穿孔である点共通する。面的な研磨により断面三角形を意図的に作出したと思われる。特に23は穿孔が不完全で管状の穿孔具を使用した痕跡が明瞭に残している。孔の直径は23が5.4mm、24が5.3mmである。25～27は研磨痕があるヒスイ製の石製品であるが、垂飾の未製品の可能性もある。25は鏝節状の形を呈しており、長さ7.6cmである。26・27は自然礫の形状を比較的残しており、27はほぼ全面に研磨痕が認められるが、26は部分的に研磨されているのみである。なお、プロモホルム液に沈んだものをヒスイと認識した。

これらの石製品は石材、形状、穿孔法から以下の4つに分類される。

- ① 滑石製の両面穿孔の塊状耳飾（19・20）。棒状穿孔具を用いている。遺構外から出土しているが、石材・形態的特徴から早期末葉～前期のものと思われる（川崎1994・1998）。本遺跡では早期末葉から前葉前葉の土器が出土していることから、これらの土器に伴う遺物とするのが妥当であろう。
- ② 石材不明の丸玉（22）。穿孔方法は不明。SB07ピット内より出土しており、後期前葉の堀之内式土器に伴う遺物と推定される。
- ③ ヒスイ製の片面穿孔の垂飾（21・23・24）。管状穿孔具を用いている。24はSB06覆土より出土しており、伴出遺物より後期前葉堀之内式土器に伴う遺物と推定され、他も同時期と考えられる。
- ④ ヒスイ製の研磨痕のみの石製品（25・26・27）。25はSB05覆土、27はSB13床下より出土したもので、いずれも後期前葉堀之内式土器に伴う遺物と推定される。

以上のように、19・20は早期末葉から前期前葉、22～27は後期前葉の石製品と考えられる。また、石製品の出土点数は少なく、製作に関わる剥片、原石等は確認されない。しかしながら、穿孔途中のものが見られることから、遺跡内で穿孔作業や簡単な研磨が行われていた可能性は否定できない。

なお、報告書刊行直前に、SB12より新たな垂飾りが出土していたことが判明した。当センター研究紀要に別途報告を予定している。

## 註

- 1 徳田弘美氏のご教示による。富山県境A遺跡、高波ふるや遺跡などに少数みられ、後期初頭の新しい段階に位置づけられている。
- 2 長野県信濃郡新町お供平遺跡。松永満夫他 1989 『お供平遺跡 II』信州新町教育委員会 P63～P66
- 3 長野県長野市石川系里遺跡。白居直之・市川隆之 1997 『中央自動車道長野緑線埋蔵文化財発掘調査報告書15 一長野市内その3— 石川系里遺跡第1分冊』 08長野県埋蔵文化財センター P66～P67、P101～P104
- 4 長野県真田町四日市遺跡、B地区3号住居址、D地区24号土坑など。和根崎剛 1996・1997 『長野県小県郡真田町埋蔵文化財調査報告書第7集 四日市遺跡II』P66第66図・『長野県小県郡真田町埋蔵文化財調査報告書第9集 四日市遺跡III』P20第14図
- 5 新潟県長岡市岩野原遺跡。寺崎裕助 1981 『埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡』長岡市教育委員会 P183第112図

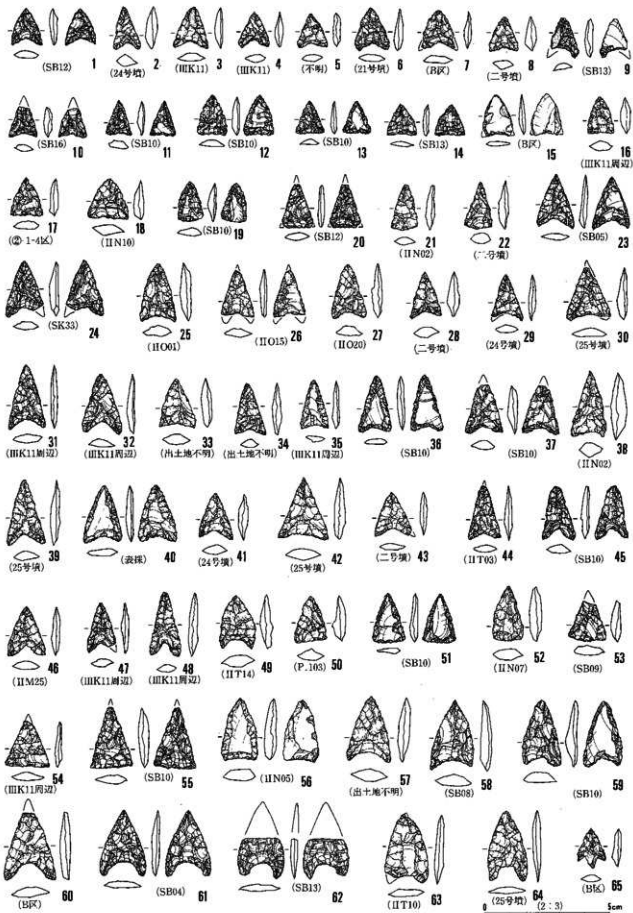
## 参考文献

- 市村勝巳 1988 「2縄文時代(4)縄文前期の土器」『長野県史 考古資料編』
- 橋本 弘 1990 『土器の形式と系統について—東日本の後期前半における三形式の七隅をめくって—』『埼玉考古』27号
- 川崎 保 1994 「縄文時代前期の玉と墓」『同志社大学考古学シリーズVI 考古学と信仰』
- 川崎 保 1998 「第4節 石製品について」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4 一長野市内その2— 松原遺跡 縄文

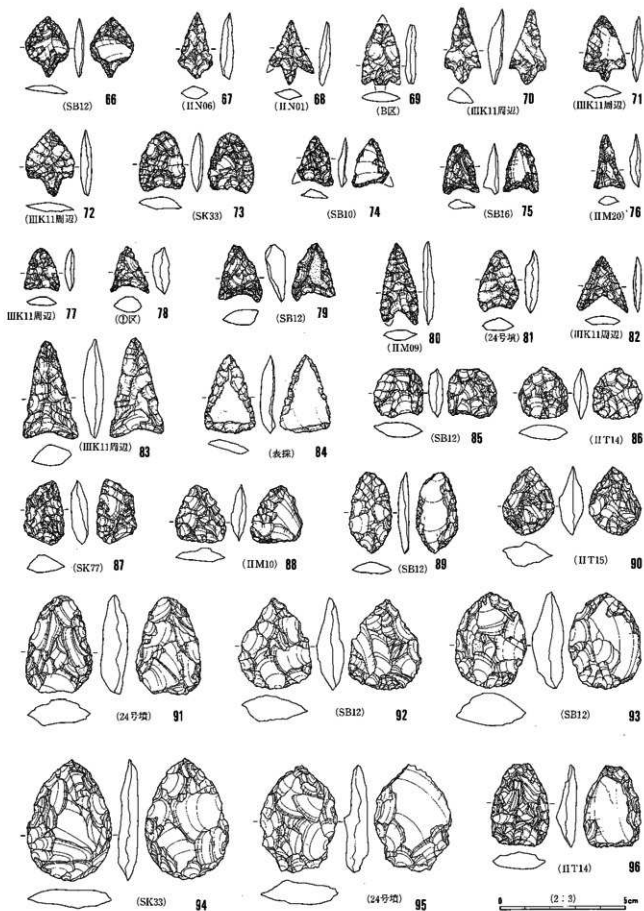


時代】 館長野原埋蔵文化財センター他

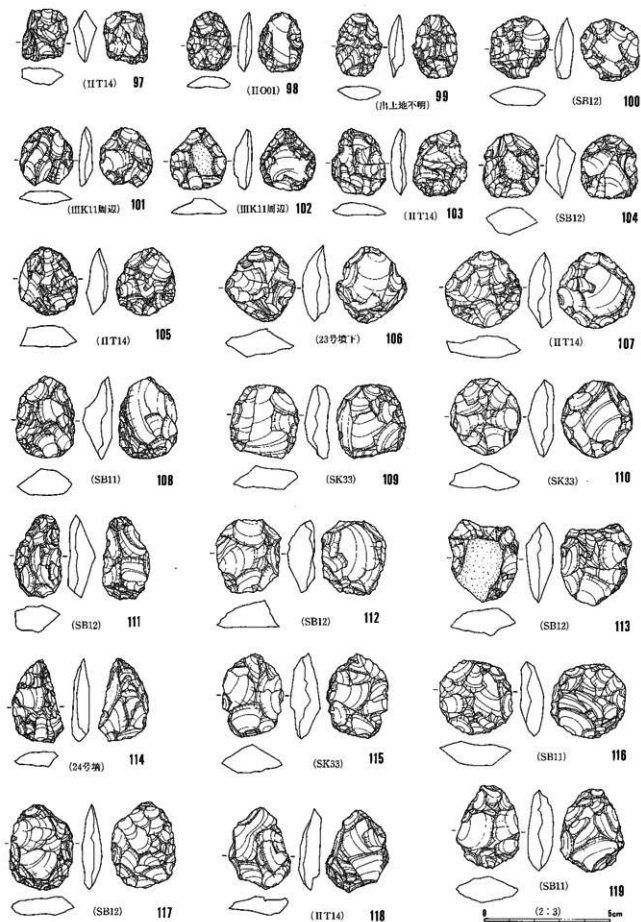
- 下平博行 1994 「『塚田式』の設定とその様相について」『塚田遺跡』 御代田町教育委員会
- 寺崎裕助 1996 「B 縄文時代前期前半の土器について」『清水上遺跡II』新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 1997 「新潟県における前期中葉の土器—根小屋式を中心として—」『第10回縄文セミナー 前期中葉の跡様相』縄文セミナーの会
- 中島庄一・岡村秀雄・斎藤久美 1994 「第II章 3節 3(2)石器」『泉道中野県野越バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書—長野県中野市内— 栗林遺跡・七瀬遺跡』館長野原埋蔵文化財センター他
- 平山一治 1985 「第二編第二章第二節 村内の遺跡と遺物」『家村誌』
- 町田勝則 1993 「第3章第3節 2(2)石器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書II 一明科町内— 北村遺跡』館長野原埋蔵文化財センター他
- 宮下健司 1995 「長野県における縄文時代後期の土偶」『長野県立歴史館 研究紀要』第1号
- 森嶋 稔 1968 「神子架型石斧をめぐっての試論」『信濃』20-4
- 山田晃弘 1986 「第V章第2節 石器分析の方法と出土石器の検討」『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
- 綿田弘実 1983 「北信地方における縄文時代中期後葉より後期初頭の土器の土器」『須高』17
- 綿田弘実 1988 「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2



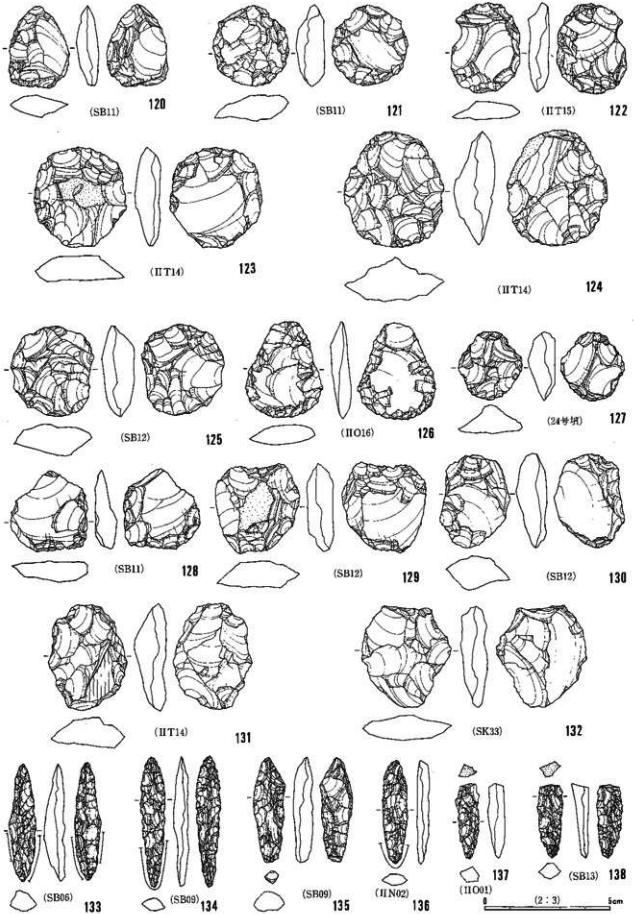
第73図 石器 (1)



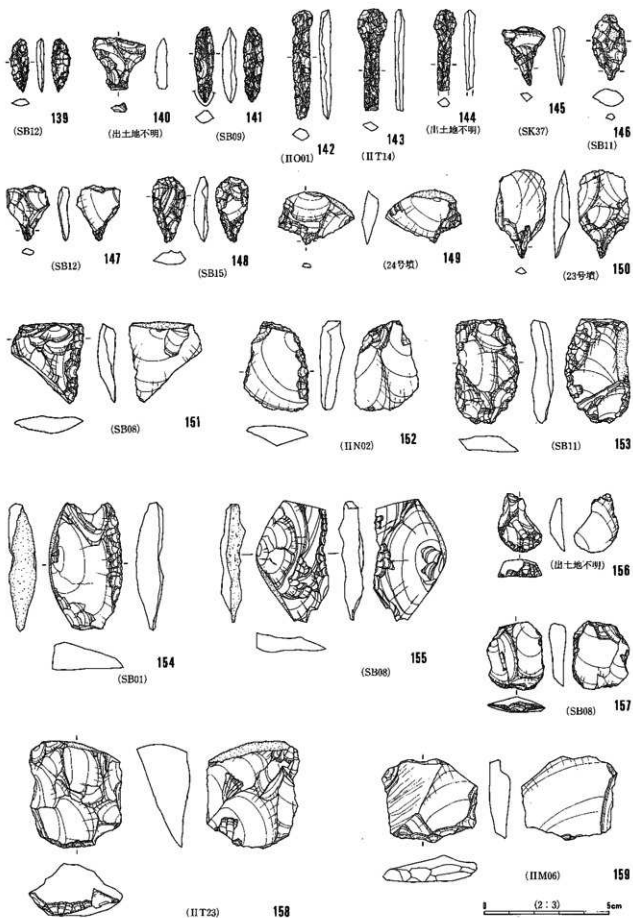
第74図 石器(2)



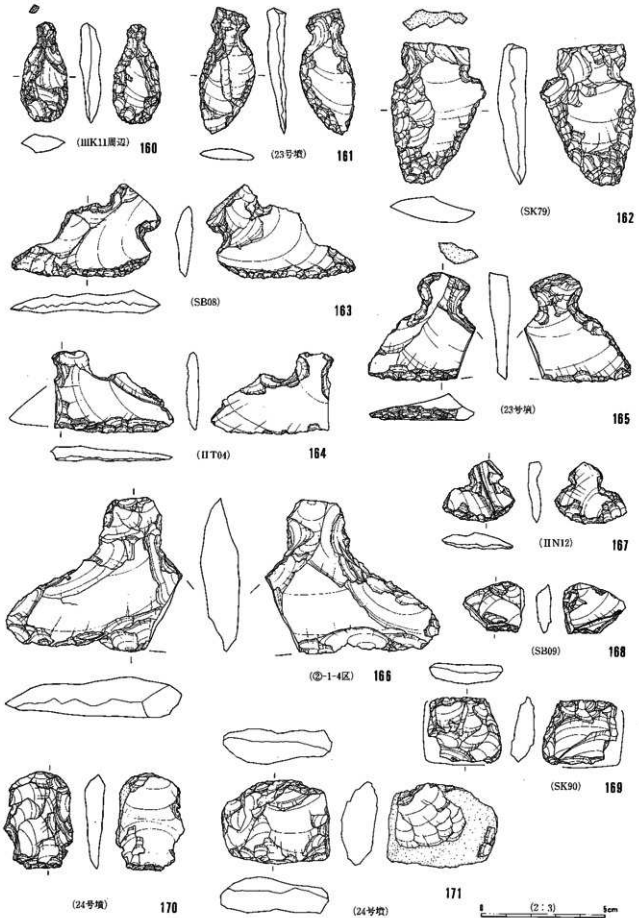
第75図 石器 (3)



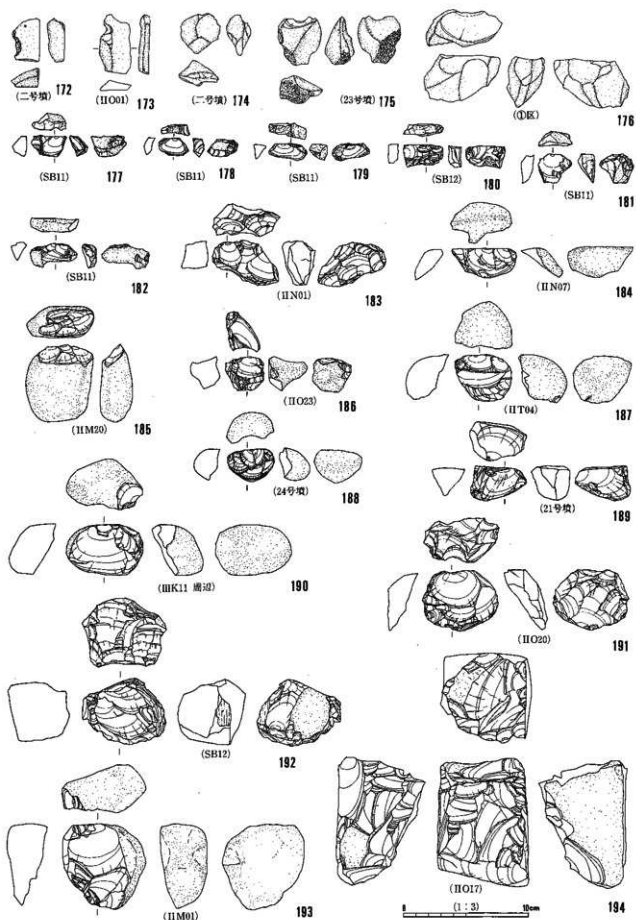
第76図 石器 (4)



第77図 石器 (5)

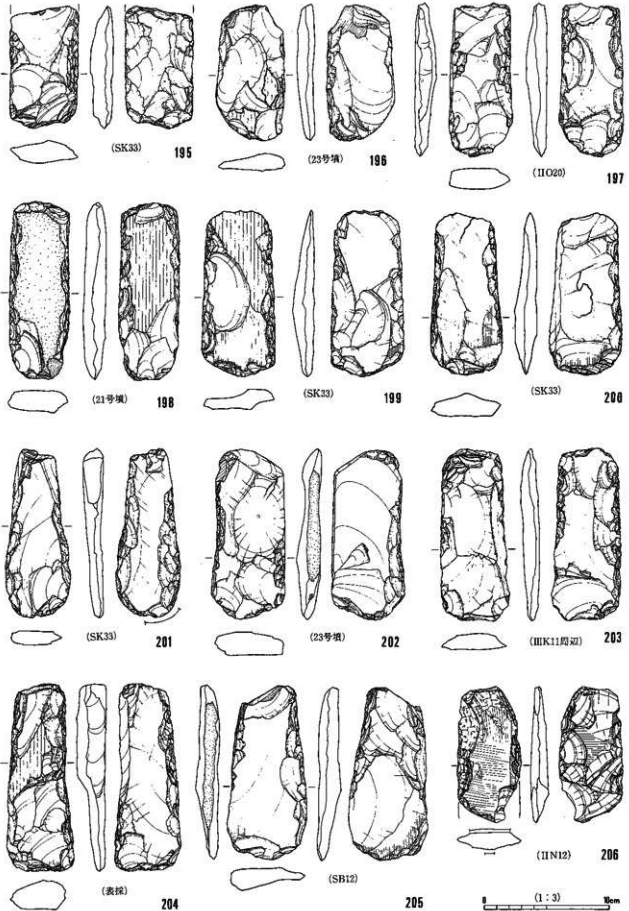


第78図 石器 (6)

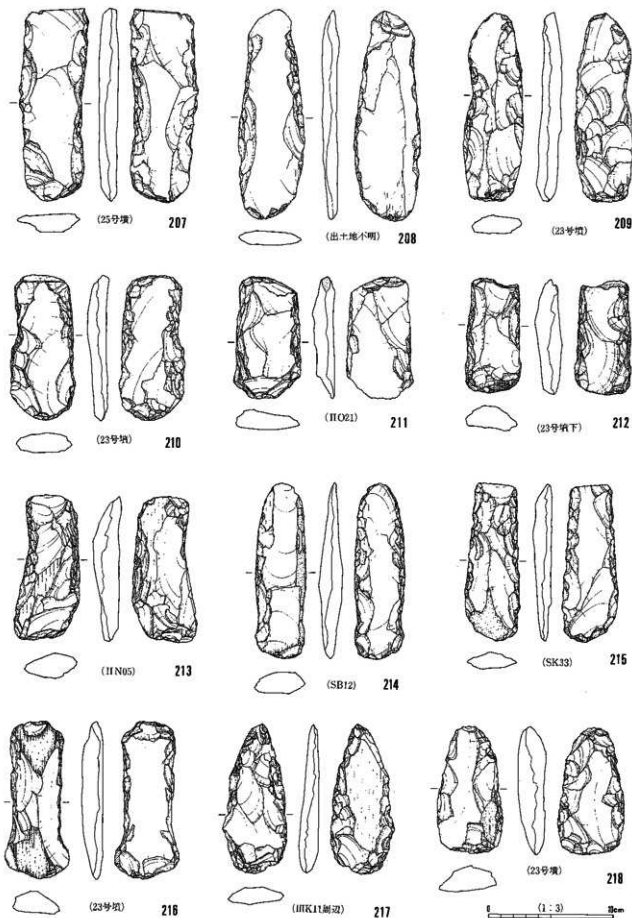


第79図 石器(7)

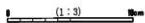
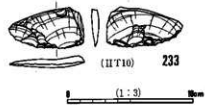
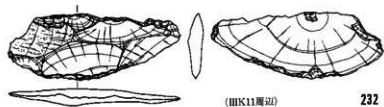
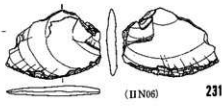
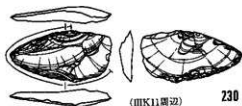
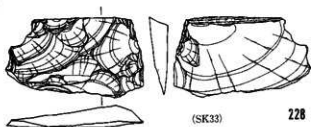
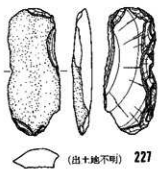
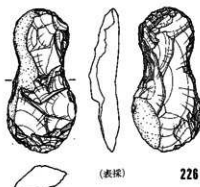
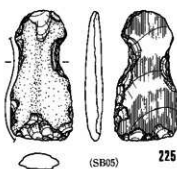
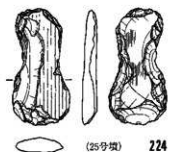
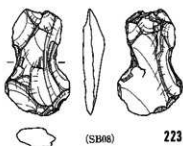
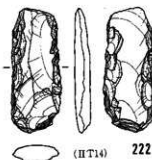
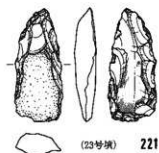
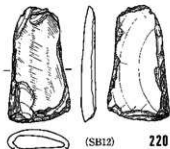
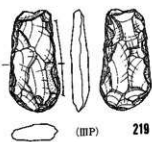




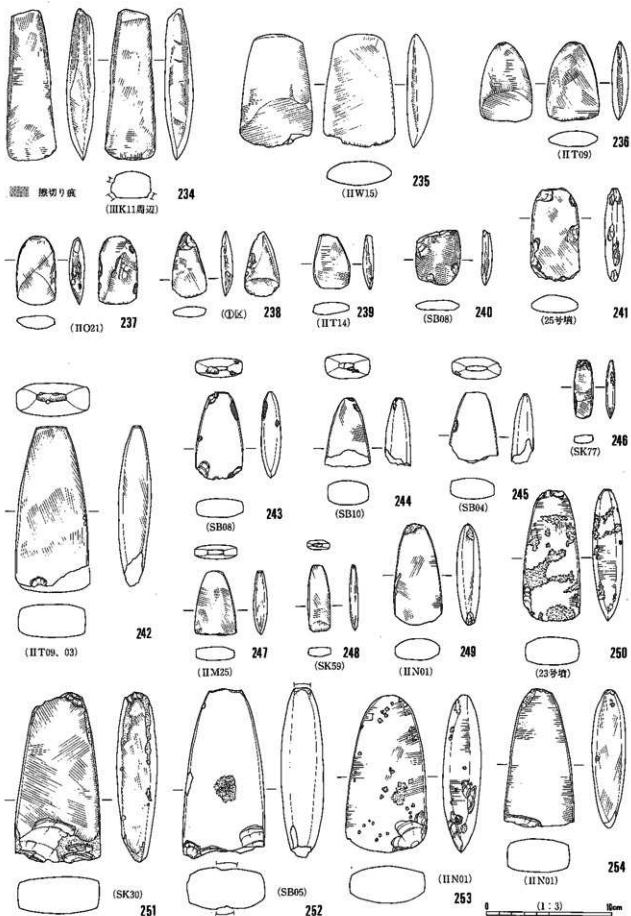
第80図 石器(8)



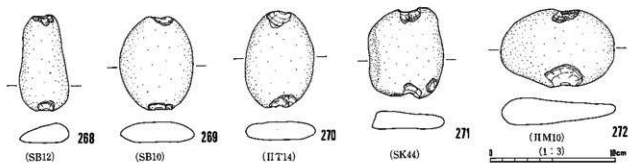
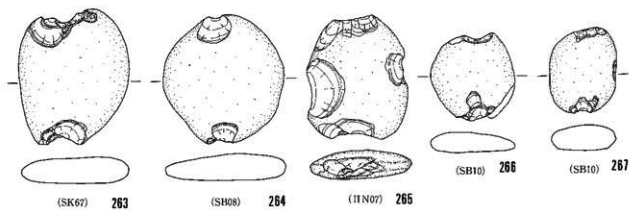
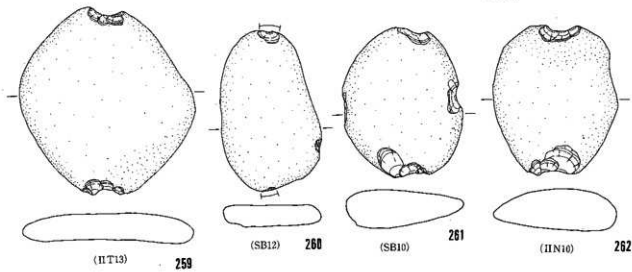
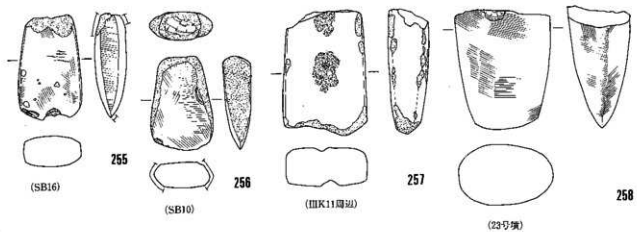
第81図 石器 (9)



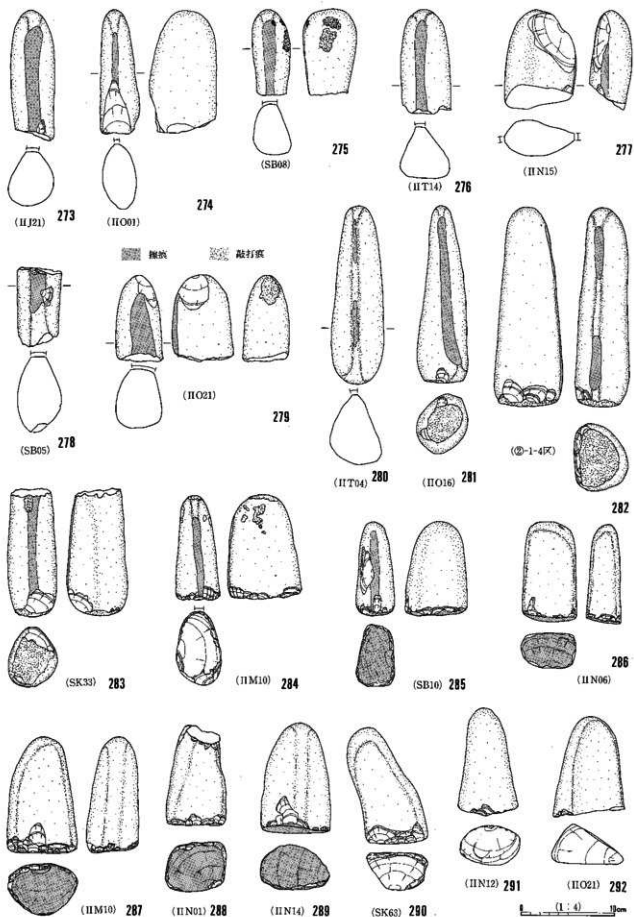
第82図 石器 (10)



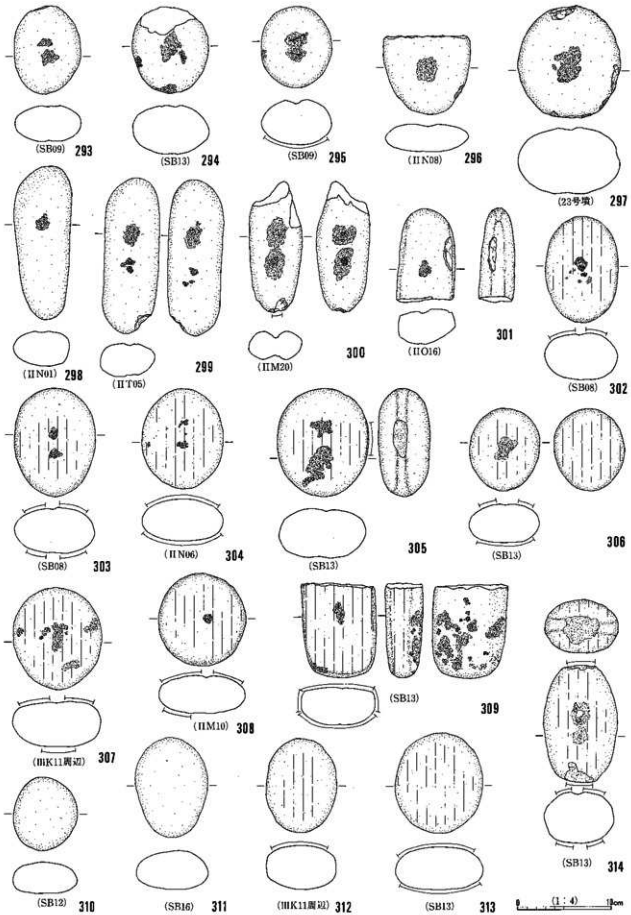
第83図 石器 (11)



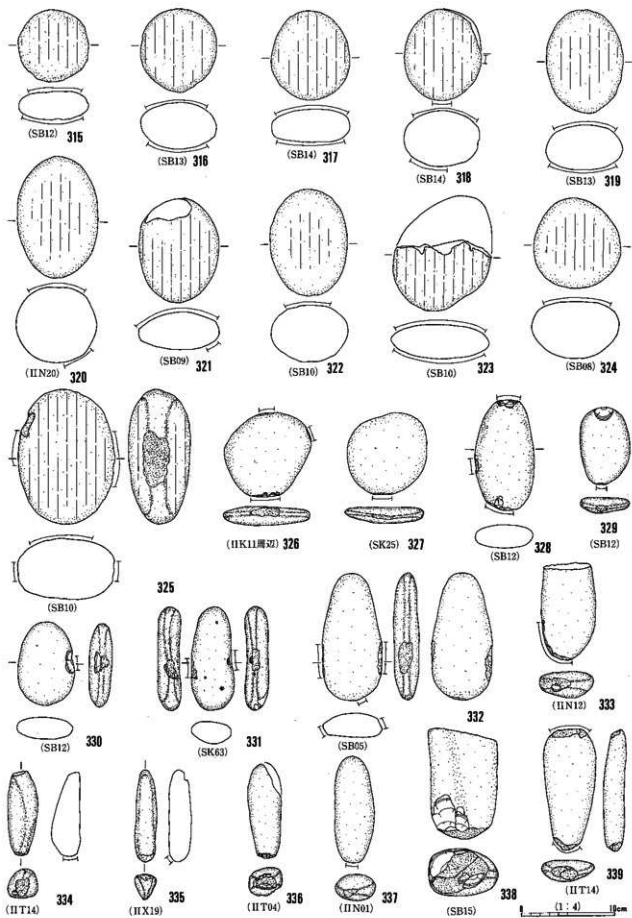
第84図 石器 (12)



第85図 石器 (13)

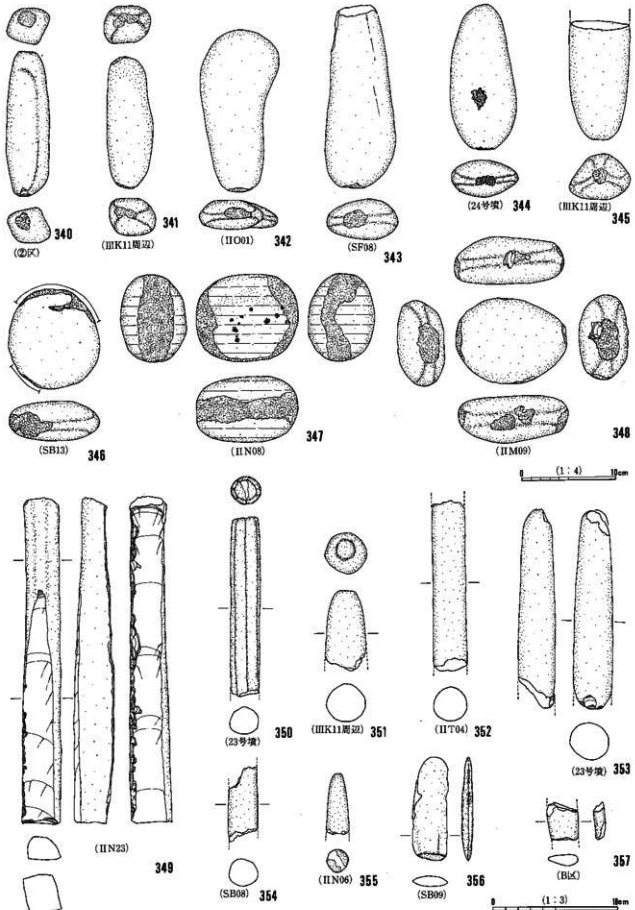


第86図 石器 (14)

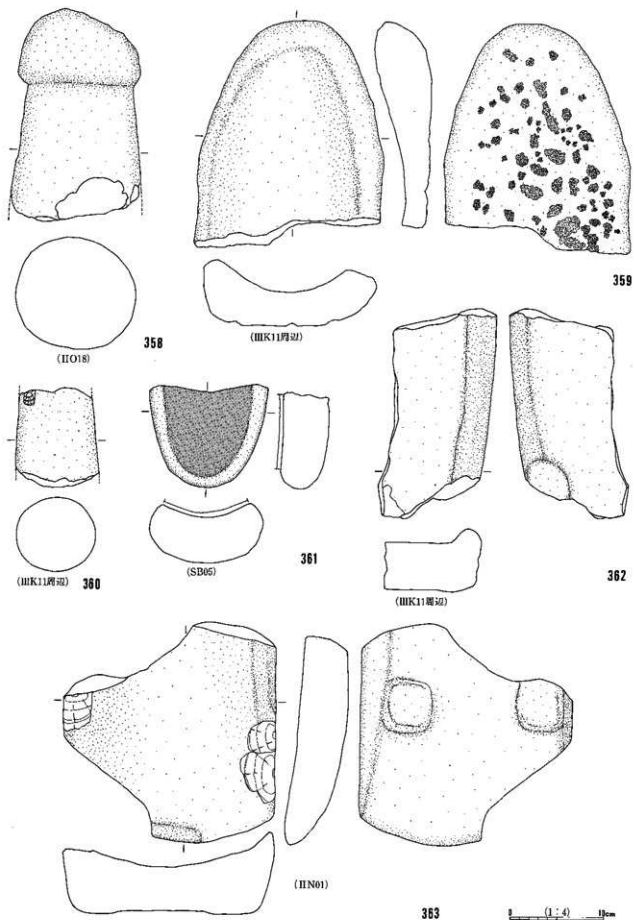


第87図 石器 (15)





第88図 石器 (16)



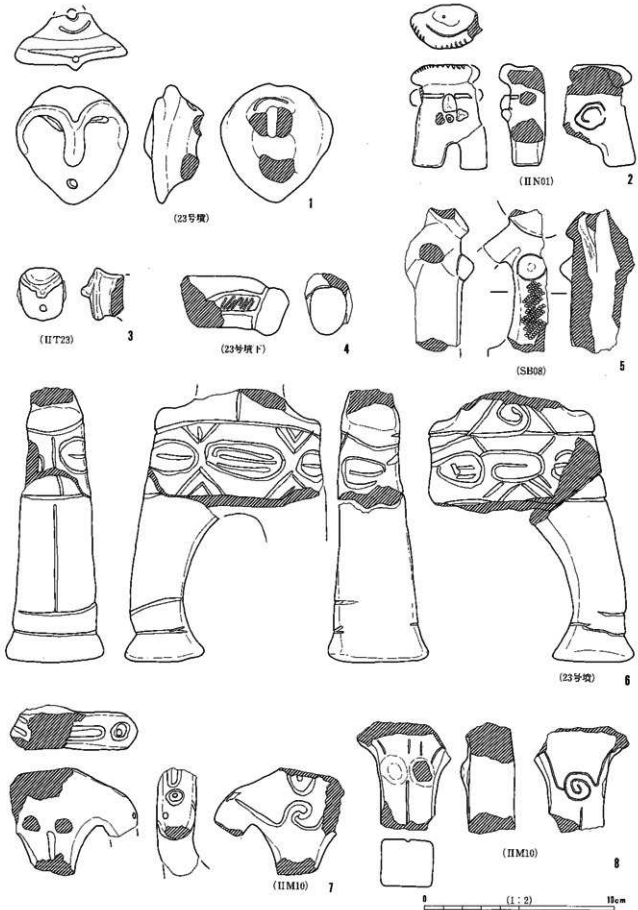
第89図 石器 (17)



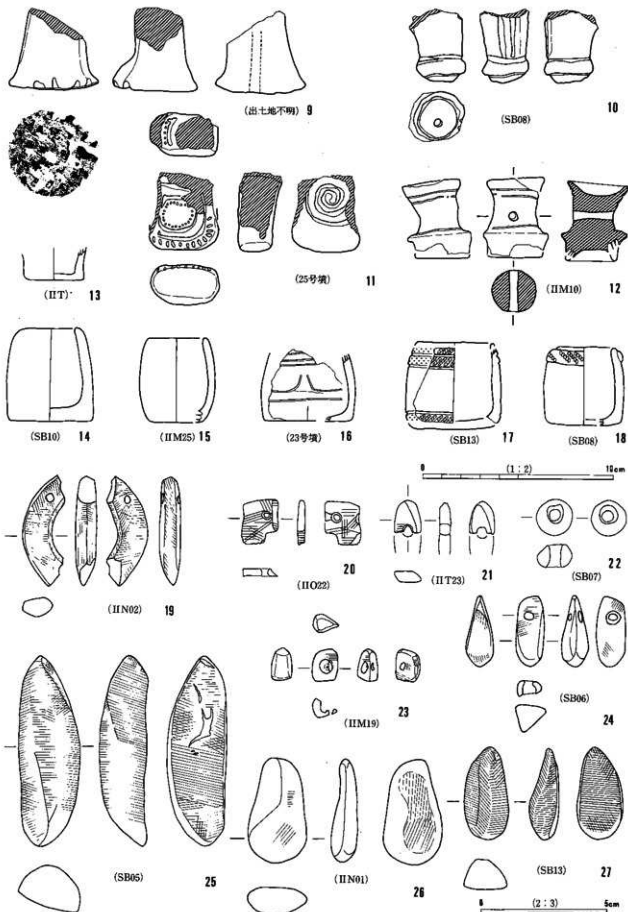
第90図 土製円盤

第6表 土製円板観察表

図版番号	出土地点	長さcm	幅cm	重さg	分類	文様	土器の時期	備考	整理番号
第90図1	SB05	2.97	2.82	6.99	1 a	沈線	不明		31
第90図2	SB05	3.63	3.38	13.34	1 a	無文	不明		32
第90図3	SB06	4.09	4.01	16.48	1 a	無文	不明	欠損	33
第90図4	SB08 <sup>炉</sup>	2.68	2.61	8.90	1 a	無文	不明		22
第90図5	SB08	3.59	3.27	9.74	1 a	無文	不明		23
第90図6	SB08	3.16	3.11	15.47	1 a	無文	不明		24
第90図7	SB08	3.28	3.26	13.51	1 a	無文	不明		25
第90図8	SB09	3.88	3.28	10.66	1 b	無文	不明		26
第90図9	SB10	3.36	3.27	12.85	1 a	磨り消し縄文	中期～後期		27
第90図10	SB10	4.37	4.03	18.42	1 b	無文	不明		30
第90図11	SB10	3.89	3.85	17.34	1 a	無文	不明		28
第90図12	SB10	3.52	3.19	9.52	1 a 又は b	無文	不明		29
第90図13	SB13	3.70	3.41	14.50	1 a	無文	不明		34
第90図14	SB15	2.80	2.73	7.44	1 a	沈線	後期		35
第90図15	IIM24	2.02	1.91	4.42	1 a	無文	不明		37
第90図16	B区	2.40	2.13	5.08	1 a	無文	不明		47
第90図17	IIN06	3.24	3.19	11.97	1 a	無文	不明		41
第90図18	IIN08	3.65	3.46	9.44	1 a	無文	不明		42
第90図19	IIS03	3.38	3.23	9.82	1 a	磨り消し縄文	後期		43
第90図20	IIT14	4.18	4.04	16.53	1 a	?	早期?		44
第90図21	IIM15	3.85	3.82	19.36	1 a	無文	不明		38
第90図22	IIN01	4.35	3.98	20.33	1 b	縄文	中期		39
第90図23	IIT21	4.60	3.72	19.54	1 b	磨り消し縄文	中期～後期		45
第90図24	IIN06	3.88	3.43	16.55	1 a	縄文・沈線	中期		40
第90図25	不明	5.01	4.90	23.11	1 a	無文	不明		46
第90図26	23号墳	5.51	5.45	30.84	1 a	縄文・沈線	中期末		36
第90図27	SK63	3.93	3.51	9.68	2 b	沈線	後期		48
第90図28	23号墳下	4.69	4.44	17.14	2 a	内面に沈線	後期		11
第90図29	IIT03	3.48	3.09	7.80	2 a	沈線	不明		12
第90図30	SB10	4.23	3.65	14.19	2 b	磨り消し縄文	後期		13
第90図31	SB15	3.80	3.20	8.58	2 b	無文	不明		49
第90図32	SK37	3.28	2.98	9.07	2 a	無文	不明		14
第90図33	IIN01	4.90	4.72	13.52	2 b	磨り消し縄文	堀之内2式		15
第90図34	24号墳	5.08	5.05	29.08	3 a 又は b	沈線	不明		19
第90図35	SB13	5.00	4.56	27.56	3 a	沈線	後期		21
第90図36	IIJ2-1-4	3.24	3.09	7.88	3 b	沈線	不明		16
第90図37	SB14	6.03	5.21	26.91	3 b	無文	不明		17
第90図38	24号墳	6.35	5.81	37.86	3 b	底部	後期		18
第90図39	IIT23	6.22	5.40	33.98	3 b	無文	不明		20
	IIM14	4.10	3.66	20.29	1 a	無文	後期?		
	IIM20	2.98	2.76	6.15	1 a	無文	不明		
	IIM20	3.67	3.59	11.39	1 a	無文	不明		
	IIM20	3.14	3.12	7.72	1 b	無文	不明		
	IIN04	3.50	3.24	12.76	1 b	無文	不明		
	IIN06	3.28	2.62	6.63	1 a	無文	不明		
	IIN06	3.28	2.69	8.59	1 b	無文	不明		
	IIO01	3.60	2.84	12.97	1 a	縄文	不明		
	IIO17	4.78	4.18	24.68	1	沈線	不明		
	IIO24	3.64	3.21	11.18	1 a	無文	不明		
	IIT04	2.77	2.65	5.00	1 a	無文	不明		
	IIT09	4.33	4.27	21.44	1 a	無文	不明		
	IIT09	4.35	3.74	16.36	1 b	沈線	不明		
	24号墳	3.81	3.80	16.30	1 a	無文	不明		
	24号墳	3.80	2.95	9.51	1 a	無文	不明		
	24号墳		6.14		1 a	無文	不明	欠損	
	道切り廻し	2.59	2.50	5.58	1 a	縄文	不明		



第91図 土偶(1)



第92図 土偶(2)・ミニチュア土器・石製品(9~18は1/2、19~27は2/3)







第8表 出土地点別口縁部破片数

出土地点	中 期	注 口 土 器				後 期 其 他 の 器 種	南 三 十 種 場 式	加 會 利 B 1 式	後 期 時 期 不 明	無 文 土 器	合 計	無 文 土 器 A 1 類	無 文 土 器 A 2 類	無 文 土 器 B 1 類	無 文 土 器 B 2 類	無 文 土 器 C 類	無 文 土 器 D 1 類	無 文 土 器 D 2 類		
		堀 之 内 1 式 深 鉢 A	堀 之 内 1 式 深 鉢 B	堀 之 内 1 式 器 種 不 明	堀 之 内 2 式 深 鉢 A														堀 之 内 2 式 深 鉢 B	
SB05	0	2	0	0	9	11	0	1	0	0	3	23	49	2	0	1	0	16	0	0
SB06	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
SB07	4	0	0	0	1	3	0	2	0	0	1	4	15	1	0	1	0	0	0	0
SB08	0	0	16	3	55	48	5	2	+	0	5	49	183	6	5	4	0	20	4	1
SB09	1	1	0	2	52	25	1	6	2	15	3	47	155	8	0	2	4	18	1	3
SB10	8	2	8	0	54	34	2	3	1	3	5	27	147	4	0	7	0	8	0	0
SB11	4	0	1	0	2	1	0	1	0	0	5	7	21	-	-	-	-	-	-	-
SB12	5	0	2	0	0	4	0	0	0	0	1	12	24	-	-	-	-	-	-	-
SB13	2	2	3	0	47	33	6	0	1	0	11	43	148	2	3	2	0	20	10	2
SB14	3	1	0	1	11	13	1	0	0	0	6	7	43	2	0	2	0	0	3	0
SB15	1	0	0	0	6	9	0	0	0	1	0	9	26	-	-	-	-	-	-	-
SB16	0	0	0	0	6	7	1	0	1	0	2	11	28	-	-	-	-	-	-	-
SD04	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4	-	-	-	-	-	-	-
SF09	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	3	-	-	-	-	-	-	-
SF10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-
SF14	2	0	0	0	1	2	0	0	0	0	4	2	11	-	-	-	-	-	-	-
SK33	146	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	146	-	-	-	-	-	-	-
SK39	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-
SK63	0	0	0	0	9	2	3	0	+	0	0	8	22	-	-	-	-	-	-	-
SK65	0	0	0	0	5	1	1	0	1	0	0	1	9	-	-	-	-	-	-	-
SK77	4	1	0	0	2	2	0	0	0	0	0	1	10	-	-	-	-	-	-	-
SK83	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	3	-	-	-	-	-	-	-
SK89	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	-	-	-	-	-	-	-
SK90	2	0	1	0	1	0	0	2	0	1	0	0	7	-	-	-	-	-	-	-
遺物集中区1 a	14	6	14	7	37	35	1	1	0	18	17	47	197	1	1	4	1	30	0	0
遺物集中区1 b	6	1	1	3	46	37	3	1	0	29	27	49	203	1	0	3	2	34	0	2
遺物集中区1 c	5	1	4	4	22	22	1	1	1	18	9	33	121	1	0	3	1	23	0	0
遺物集中区2	0	3	2	5	29	29	7	1	1	0	11	39	127	4	0	2	0	33	0	0
遺物集中区3	17	0	1	0	48	31	1	1	1	0	17	24	141	0	0	3	0	19	0	0
遺物集中区4・6	21	8	7	0	13	34	0	0	1	0	24	19	127	0	0	0	0	10	0	0
遺物集中区5	0	2	3	9	21	39	0	0	0	1	1	21	97	0	1	3	0	13	0	0
ⅢK11周辺	62	1	7	0	64	68	12	2	2	2	44	74	338	6	3	9	0	30	0	0
21号墳	1	0	0	1	8	3	1	3	0	17	7	13	54	-	-	-	-	-	-	-
23号墳	83	0	7	0	40	57	8	3	3	1	26	62	290	-	-	-	-	-	-	-
24号墳	52	2	7	0	18	36	2	1	2	1	17	41	179	-	-	-	-	-	-	-
25号墳	64	0	2	0	2	5	0	0	0	1	11	13	98	-	-	-	-	-	-	-
二号墳	12	2	0	0	15	26	0	2	0	9	22	16	104	-	-	-	-	-	-	-
ⅡJグリッド	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	3	7	-	-	-	-	-	-	-	-
ⅡMグリッド	3	0	0	0	11	27	4	1	1	7	15	22	91	-	-	-	-	-	-	-
ⅡNグリッド	15	2	16	1	42	42	6	7	1	22	25	62	241	-	-	-	-	-	-	-
ⅡOグリッド	22	1	1	0	21	24	1	3	0	3	8	23	107	-	-	-	-	-	-	-
ⅡSグリッド	6	0	0	0	1	0	0	0	1	0	3	2	13	-	-	-	-	-	-	-
ⅡTグリッド	19	0	0	0	14	15	1	0	1	0	5	16	71	-	-	-	-	-	-	-
ⅡWグリッド	0	0	1	0	3	0	0	0	0	3	2	1	10	-	-	-	-	-	-	-
ⅡPグリッド	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	5	-	-	-	-	-	-	-
VDグリッド	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	-	-	-	-	-	-	-
グリッド不明	14	1	1	0	16	8	4	0	0	4	5	14	67	-	-	-	-	-	-	-
合 計	602	39	105	36	734	739	72	45	21	157	349	850	3749	-	-	-	-	-	-	-

器種分類と無文土器の細分類は第2章2節2項参照。無文土器は細分類できないものがあり、合計が無文土器の欄と一致しない。  
注口土器は注口部破片数。+は口縁部は見られないが胴部破片が見られることを示す。-は分類を行っていないことを示す。  
表中のに掲載されていない遺構の分類は行っていない。

第9表 出土地点別石器数(その1)

出土地点	石 核	石 鏃 未 製 品	尖 頭 状 石 器	石 鏃	削 器	半月 形 石 器	異 形 石 器	二 次 加 工 が あ る 製 片	切 断 面 が あ る 剥 片	P E Q	刃 器 状 剥 片	打 製 石 器	磨 製 石 器	特 殊 磨 石	スタ ン ブ 形 石 器	凹 磨 石	磨 石	石 錐	石 錘	石 劍	石 棒	石 原 石	石 核	合 計																																											
																									SB01	SB02	SB03	SB04	SB05	SB06	SB07	SB08	SB08	SB09	SB10	SB11	SB12	SB13	SB13	SB14	SB15	SB16	SD04	SF08	SF09	SH01	SK09	SK17	SK19	SK25	SK30	SK33	SK36	SK37	SK38	SK39	SK42	SK43	SK44	SK54	SK56	SK57	SK59	SK63	SK66	SK67	SK77
SB01	1																							3																																											
SB02								1															2	4																																											
SB03										1													2	3																																											
SB04	2							2			1					1							3	8																																											
SB05	1	1						5	3		2	2	2			2	1						8	29																																											
SB06				1							1												2	2																																											
SB07								1	1														1	3																																											
SB08	6			1	2	1		6	2	1	3	5	1		1	3	1		1	1		5	40																																												
SB08																1							1	1																																											
西側溝																1							1	1																																											
SB09	2	1		3	1			5	1	1	1				2	1			1	1	1	3	23																																												
SB10	17	1		1	2		1	11	3	4	3		2	1		5		5				6	62																																												
SB11	3	6		1	1	1		1	1	1												1	10	26																																											
SB12	13	24		2	1	2	1	17	3	4	2	12	1		2	14		3				9	111																																												
SB13	6	2		1	1	2	1	2	3	1	1		1		6	2	2					10	36																																												
SB13																1							1	1																																											
西側溝																1							1	1																																											
SB14	2			1				1		1					2			1					1	8																																											
SB15	2			1	1		2	1	1	1	3				1							2	15																																												
SB16	2	1						2		1	2		1		1	2						2	14																																												
SD04	2										2		1										1	4																																											
SF08																2							1	2																																											
SF09												1											1	1																																											
SH01								1															1	2																																											
SK09									1														1	1																																											
SK17	1																						1	1																																											
SK19				1																			1	1																																											
SK25	1							1								1							1	4																																											
SK30		1											1										2	2																																											
SK33	3	7						4		1	5	18	1	1		1	1					8	50																																												
SK36	1							1															3	5																																											
SK37								1															2	2																																											
SK38				1																			3	3																																											
SK39	1	1					1															1	1	2																																											
SK42											1												1	3																																											
SK43	1																						3	4																																											
SK44	1																						1	1																																											
SK54								1															1	1																																											
SK56									1	1						1							2	5																																											
SK57								1															1	1																																											
SK59								1				1											2	2																																											
SK63										1					1								3	3																																											
SK66								1															1	1																																											
SK67																		1					1	1																																											
SK77		1									1					1							4	4																																											
SK78								1			1												1	3																																											
SK79																							1	1																																											
SK83				1																			2	2																																											
SK89									1														1	1																																											
SK90										1													1	3																																											
SX03																1							1	1																																											
SX04																							1	1																																											
pit103								1															1	1																																											
pit12	1																						1	1																																											
pit17																1							1	1																																											
pit222									1	1													1	2																																											
pit4								1															1	1																																											
IF04													1										1	1																																											
IF21								3		1				1									3	8																																											
IFM01																							1	1																																											
IFM04		1										1											2	2																																											
IFM06								1		1													2	2																																											
IFM07																1							1	1																																											
IFM08																							2	5																																											
IFM09	6	2	1	1	1			4		4	1	1	1			1						5	27																																												
(遺物発中区1b)																							3	36																																											
IFM10	3	3		1	2		1	9		1	1	1		2	1	1	3	2	1	1		3	36																																												
(遺物発中区1b)																							2	2																																											
IFM13								2	1		4												2	2																																											
IFM15		1														2							2	11																																											



第9表 出土地点別石器数(その3)

出土地点	石 鏃 未 製品	尖 頭 状 石 器	石 鏃	石 匙	削 器	槌 器	半 月 形 石 器	異 形 石 器	二 次 加 工 が あ る 剥 片	切 削 面 が あ る 剥 片	P E Q	打 製 石 斧 刃 器 状 剥 片	磨 製 石 斧 磨 器	特 殊 磨 石	ス タ ン プ 形 石 器	磨 石	磨 石	石 皿	石 鏃	石 劍	石 棒	原 石	石 核	合 計								
II T18	1		1	2				1		4	1							1					2	13								
II T19			1						2	1	1					2							1	5	13							
II T21	1								1																2							
II T23	2	1				1				1									1				1	3	10							
II W14								1																	1							
II W15													1				1								2							
II W18																								2	2							
II X19	1									1	1						1							1	5							
III K11 周辺	50	13	1	4	1	8		2	16	2	13	3	15	1	6		2	3	4	2			3	1	30	180						
III P13												1	1													1						
III P												1	1													1						
V D03												1														1						
V D09								1																		1						
21号墳	13	2		2		1	2	9	1	7		5				4	3			2			3	11	65							
23号墳	2	17	1	4	3	4	2	3	32	2	2	20	37	7		1	1	1	2			2	2	2	24	169						
23号墳下 (遺物集中区3)	4	4					2		4	4	3	3				3	2	1								18	48					
24号墳	16	9	1	5	1	1		4	18	5	11	1	14	1		3	1	3	1				2		14	111						
25号墳	11	7		1	5	1		1	6	1	2		30	2		1	2									9	79					
二子号墳	9	8		1	3				18	3	5	1	2												3	16	69					
①区	3	1					2	3	1			1	1													2	4	16				
②区	3	2		1	1			6	2		6	2	1	1		2	1	2						2		3	8	41				
④区	1							2			2								1	2							2	12				
表掘	10	5		1	2		1	20	1	5	4	1	1			3	1	1									11	70				
不明	25	4		4	4	1	3	10		5	1	10	4												2		10	84				
合計	313	174	5	2	49	12	58	14	1	38	1	311	45	21	148	13	218	5	64	21	7	42	46	72	7	2	38	2	12	26	969	2138



